

ひよけり。三郎兼平ときこえける。二位までぞおはしける。四郎忠平のおとゞ。太政大臣までなり給ひて。多くの年をろすふさせ給ひける。」

〔解〕榮花物語ハ。四十一卷あり。赤染衛門略傳上ありの作と云傳へたれど信じがたし。安藤爲章が榮花物語考委しく論じたれば。左よ示すべし。

前略さて作者を赤染衛門といひ傳へて。誰もうたがはず。或本は目錄系圖一卷をそへて。その端は赤染衛門記之とあり。今くばしく全書をよみ。かつ赤染家集。紫式部日記などに考へ合するよ。決して赤染が撰よあらず。思ふよ堀河院より後の男子の手よ出て。ふるき實録またハ赤染紫以下諸才女の日記家集などより抜きあつめ。女の筆めかしく作れるものと見ゆ。うの證を左よかふとて委しくいはれたれど略す。

弘恭按るに。此の作者を藤原爲業ぬしなりといふ。説も古へよりあれば。もしハ安藤ぬしの考の如く。爲業ぬしなどの戯れよものしたるよや。爲業ハ。大鏡の作者よて。堀河帝以後の人なり。爲業は崇徳の朝の人にて皇太后宮大進と見えたり

此の書ハ。物語といへど。かの世態人情をうつしたる大かたの物語の類よ

あらずして。醍醐天皇の御時より堀河天皇の御時まで。凡二百年ばかりの禁中の有様をまゐるされたるなれば。歴史の一として見るべき書之。○榮花と名付しハ。藤原氏のうち尤も榮花を極めたる關白道長公のさまを旨とかければなり。然して題號ハいつの頃より誰人の名づけられたりといふを未だ考へず。と安藤ぬしがいはれたるが如し。○月の宴とハ。此の物語一の卷の名よて。村上天皇の康保三年八月十五夜清涼殿よて月の宴せさせ玉へる事をかゝれたれば之。○世はじまりてとハ。神武天皇の御即位より以後といふ意之。○六十餘代とハ。當代一條天皇まで。神武より六十六代よなり給ふ之。○この次第ハ。神武より御代くのとこ。○こちよりての事ハ。此方によりての事之。醍醐天皇より此方の事を記さんと之。○宇多の帝ハ。光孝天皇第三の皇子諱定省と申奉る。神武より第五十九代帝之。○みこたちあまた云々。皇子たち男女廿二人おはしつる之。○醍醐の聖帝。第六十代醍醐天皇之。御母ハ藤原胤子。太政大臣高藤公の女之。○天の下のためでたきためしとハ。後世治をいふもの延喜の御代とて當代を譽り奉るをいふ之。○女御ハ。女御更衣とて何れ

も女官なれど天皇の御妾のとこ○男みこ云々。天皇の皇子男十六人女十八人おはしけるこ○基經のおとどい。照宣公と謚す。中納言長良の子。おとどい大殿といふ義よて敬語之○御太郎とい。御ハ敬語之。太郎ハ長男のとこ○かの御三郎ハ。長良の三男のとこ。下なる次郎三郎四郎といふも次男三男四男のとこ○時平。本院左大臣と稱す○仲平枇杷左大臣と稱す○兼平。大臣ハ任ぜられざりしこ○忠平。貞信公と謚したり。

以上の此の物語の發端よて。次ハ基經公の御女穩子の醍醐天皇ハ召されて。朱雀村上二帝を産み奉り。いよく藤原氏の榮花を極むる次第をかゝれたれども。事ながければこゝハ省きつ。

## 宇治拾遺

宇治拾遺物語(卷第一)

源 隆 國 源は上にあり

これも今ハむかし。丹波國篠村といふところハ。年ごろ平茸ヒラタケやるかたもなくおはかりけり。里村のものこれを取りて人よもこゝろざし。またわれもくひなどしてとしごろするほどに。その里よとりてむねとあるものゝゆめよ。かしらおづがみなる法師どもの一三十人はかりいできて。申べきことのゆといひければ。いか

なる人ぞとふに。この法師はらい。この年頃も宮づかひよくきてゆつるが。この里の縁つきで。今ハよそへまかりひなんずることのかつはあはれよもひ。またことの上しを申さでいと思ひて。此の上しを申なりといふと見て。うちおどろきて。こはなよとぞと妻や子やなどにかたるほどに。またその里の人の夢よもこの定にみえたりとて。あまた同様よかたれば。心もえでとしもくれぬ。さて次のとしの九月よもなりぬるに。ときくいでくるほどなれば。山よ入て茸をもとむるよ。すべて蔬ヤブタネおはかたみえず。いかなる事よかと里村の者おもひてするほどに。故仲胤僧都コナリノソウダとて説法ならびなき人いましけり。この事をきいてこはいかよ。不淨フジヤウ説法セツポフする法師平茸ヒラタケにうまる。といふことのあるものをとの給ひてけり。さればいかよもいかよも平茸ハくはざらんことかくまじき物とぞ。

〔解〕宇治拾遺物語ハ。十六卷凡百九十六條ありて隨筆躰の文なり。此の段ハ。卷の一なる第二條を擧たるこ。作者ハ。宇治大納言隆國卿よて。この卿さまに物語六十卷を著せり。世ハ宇治大納言物語とも今昔物語ともいふ。此篇ハそれよ漏たる談話をあつめられたればかく名付しこ。さて隆國卿ハ上ハ略傳

あり甚だ長壽よて。後冷泉。後三條。白河の朝よ仕へ。老年隱居して宇治よ住したれば。世よ宇治大納言といはれし。即ち當時の一畸人よしてその行ひの概略を序文よ擧たれば。今抄録して左よ示すべし。

世よ宇治大納言物語といふ物あり。此大納言ハ隆國といふ人なり。西宮殿編の孫俊賢大納言の第二の男なり。年九かうなりてハ。暑さをわびていとまを申て。五月より八月までハ。平等院一切經藏の南の山ぎハよ。南泉房といふ所よこもりあられけり。さて宇治大納言といふまこえけり。もとゞりをゆひわけてをかまけなる姿よて。むしろをいたよしきてすゞみる侍りて。大なるうちはさもちてあふがせなどして。往來の者たかき賤しきをいはず。よびあつめむかし物語をせさせて。我ハうちこそひふして。かたるよまたがひて。おほきなる双紙よかへれけり。天づくの事もあり。大唐のこともあり。日本の事もあり。それかうちに貴きともあり。あはれなるともあり。またなき事もあり。少しハそら物語もあり。利口なることもあり。さまたまやうくなり。よの人これをけうじみる。十五帖なり。その正本ハつたはりて。侍從俊貞といひし人のも

とよぞありける以下略す

○これも今はむかし。此の書ハ每段今ハむかしといふ言を冒頭とせり。上の段を受てこれもといへる。○平茸ハ。茸の名。シメジタケの類といへり。○人よもこゝろさしハ。人よも惡贈する。○むねとあるものハ。その里村の重立たる人。○かしらおづがみハ。頭の懼オウカ髪よて俗よ云五分月代オウカ之。法師の頭髮の五分ばかりのびて恐ろしけなる。○宮づかひとハ。奉公するとなれど。今俗よ云義務などいふ詞よつかひたる。此所ハ年來このことの人々よ義務をよくつくしつるがどの意。○ゆなんずるハ。この物語よ多くある詞なれど當時の俗言。是より後の平家物語などよも此詞多くあり。よかりゆなんずるハ退去オトナスルコトナスルといふ義。○この定ハ。是れも當時の俗言。今俗よコントホリといふが如し。○とまきくいでくるほどなれば。先々茸の出る時節よなれば。○蔬ハ。茸類の總名。○故仲胤僧都。故の字ハ誤字よや仲胤僧都ハ誰とも詳ならず。○いよしけりハ。在けり。○不淨說法云々ハ。佛經のうちよあるさくらん。○んばさらんハ。食ずあらん。○ことかくまじ

き物とぞい。指間なき物なりとぞいふとの意。

紫式部日記

紫式部日記

紫式部

秋のけはひのたつまへに。土御門殿のありさまいばんかたなくをかし。池のわたりの木すゑども。やり水のはどりの草むら。おのがまゝ色つきわたりつゝ。おほかたの空もえんなるにもてはやされて。ふだんの御どきやうのことろくあはれまさりけり。やうくすゞしき風のけしきよも。れいのたえせぬ水のおとをひ。夜もすがらまがはさる。御まへよもちかうさふらふ人々。ばかなき物がたりするまことしめしつゝ。なやましうおはしますすべかめるまことりけなくもてかくさせ給へり

〔解〕紫式部日記の。紫式部が上東門院の宮仕してあるほどの日記也。今二卷あれどとは残欠なり。紫式部の事ハ。上の源氏物語の條よりへり。此の段ハ。御堂關白道長公の御女。一條天皇の中宮彰子の<sup>上東門院</sup>の土御門殿よて。第二の皇子<sup>後一條天皇</sup>なり。さうみ給ふまりの事也。○秋の云々の。秋の景色よなるまゝにと云意よて寛弘五年七月のとこ。○土御門殿ハ。土御門の南。烏丸の西よありし關白

道長公の邸也。○をかしの。面白き也。○やり水ハ。庭中よ流しかけたる水也。○おのがまゝハ。各々それくく也。○おほかたの空ハ。一通りの空也。○ふだんの御どきやうハ。不斷の御讀經也。斷間なく仕まつる御經のとこ。○やうくすゞしき。漸々よ涼しき也。○れいのたえせぬ云々。つねよ絶えず流るゝ遣り水の音のとこ。○夜もすがら。通霄也。○まがはさるハ。御讀經の聲かと聞き誤まると也。○御まへよもハ。中宮彰子の御前也。○ばかなき物がたりハ。とりとめぬ談話也。世間斷の類也。○なやましうハ。中宮の御惱也。御懷妊中なれば御心ちあしくおはします也。○へかめるま。ベクマルトミユルヲ也。○つりけなくハ。然る御氣色もなく也。意ハ御前よて女房たちの世間斷をするを聞き玉ひて。中宮ハ御懷妊中なれば。御心ちもあしきを。何の御やうすもなきことよにもてなして入らせらるゝと也。

更科日記

更科日記

菅原孝標女

東路の道のはてよりもなほ奥つかたに生いでたる人。いかばかりかハあやしかりけんま。いかよ思ひはじめけることよか。世の中に物語をいふものゝあなるま。

いかで見バやと思ひつゝ、徒然なるひるまなどよ。あねまゝ、母などやうの人々の。その物語かの物語光源氏のあるやうなど。ところ／＼かたるを聞くにいとゞゆかしきまゝに。我思ふまゝにそらにいかでか覺えかたらん。いみじく心もとなきまゝよ。等身トウゼンよやくし佛をつくりて。手洗などして。ひとまにみそかよ入りつゝ。京よどくのほせ給ひて。物語の多くさぶらふなるあるかぎり見せ給へ。と身を捨て額カガをつき祈申ほごよ。十三よなる年のほらんとて。九月三日門出して。今立イマタチといふ所ようつる。年頃あそびなれつる所を。あらはよこほち／＼らして立さわきて。日のいり際のいとすく霧わたりたるに。車よのるとてうち見やりたれば。ひとまにの参りつゝ額カガをつきしやくし佛の立給へるを見すて奉るかなしくて。人まれずうちなかれぬ。門出したる所ハ。めづりなどもなくて。かりそめの茅屋の蕪ワラなどもなし。簾かけ幕など引たり。南ハ遙トホ野のかたみやらる。東西ハ海近くていとおもしろし。夕霧たちとなりて。いみじうをかしければ。朝いふともせず。かた／＼見つゝこゝを立なんこともあはれよ悲しきに。おなじ月の十五日雨かまきくらしふるに。さかひをいで。下總の國いかたといふ所よとまりぬ。

〔解更科日記ハ。菅原孝標の女の作也。孝標ハ。菅公六世孫なりといふ。此の日記ハ。後一條天皇の寛仁四年。父孝標上總ありし年。此の女十三才よて京よ上るに筆を起して。後冷泉天皇の天喜三年。夫信濃守橘俊通。任國より上京中身まかりしとよて終る。その間凡三十六年。をりよふれたる事のみ書記せる也。されバ全く日記といふよもあらざれど。その躰ハ日記の文躰也。然して之を更科日記と名付しハ。夫よ從ひて任國よ下りしほどに書付けつる事のありしを。その欠文となりしよや。今の本文ばかりよてハ更科と名付しゆる知りがたし。○東路の云々。こは奥羽地方をさしていへる也。意ハ上總の邊よてもかはかり不自由なるを。是より東北の奥羽地方なる僻地よ至りてハいかばかりあやしき事ごものあらんとこ。○いか思ひはじめける云々。こは自からの心を自からいへる也。何ト思ヒソメタノカとこ。○あなるをハ。有なるをこ。○いかで見はやハ。ドウツシテ見ヤウヨと。○徒然なるひるまハ。退屈なる晝の間と。○あねまゝ母ハ。此の女の姉繼母也。○光源氏のあるやうとハ。源氏物語の有ごまこ。○ゆかしとハ。心よ慕ハしと。○心もとなきハ。心ニ黙止ナ

キ之○等身ハ。吾ガ身軀ト同じ大ききよといふと之○やくし佛ハ。薬師如來之○みそかよハ。密ミツよ之○京よとく云々薬師佛よ請祈するさま之○十三よなる年ハ。此の女の十三才の年之○今立ハ。上總の地名なり○年頃云々こほちちらしてハ。年來住みたる吾ガ部屋を取り拂ひ散らして之○ひとまよハ云々上の照應よて。吾ガ部屋の間よ薬師佛を安置してありしをいふ之○額をつきしハ。禮拜したりし之○門出したる所。こは今立の旅館のさまをいふ之○朝あさいは朝寐之○雨かきくらしふるハ。空かき曇りて雨のふるよ之○さかひハ。上總の國堺之○いかたハ。下總の地名なれど今詳ならず。

## 方丈記

鴨 長 明 傳は上に委し

行く川のなかれハ絶えずして。志かももとの水よあらず。よどみよ浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまる事なし。世の中よある人とすみかと又かくの如し。玉たまさきの都のうちハ棟むねをならハ蔓つたをあらそへる。たかきいやしき人の住居ハ。世々をへて盡せぬものなれど。是をよことかどたづぬれば。昔ありし家ハまれなり。あるハ去年やふれて今年ハ作り。あるハ大家はろびて小家となる。すむ

人も是よおなじ。所もかばらず人もおほかれど。古へみし人ハ二三十人が中に。とづかよ一人二人なり。朝よ死に夕ようまるハならひ。たゞ水の泡よぞ似たりける。知らずうまれ死ぬる人何方よりきたりていづかたよか去る。又志らずかりのやどり誰か爲りよか心を憐し。何よよりてか目をよろこほしむる。其あるじとすみかと無常をあらそふさま。いはゞ朝がほの露よことならず。あるハ露落ちて花残り。のこるといへども朝日にかれぬ。あるハ花は志ほみて露なほきえず。消えずといへども夕をまつことなし。予ものハ心をまれりしよりこのかた。四十あまりの春秋をおくれるあひだよ。世の不思議をみる事やハたびたびよなりぬ。

〔解〕方丈記ハ。一卷あり。鴨長明の著作なり。長明の略傳ハ上よ云へり。此の記ハ退隱の後の作なりといふ。長明ハ。源俊頼朝臣及びその二男俊惠法師よ從ひて歌を學び。其の妙を極めたり。又琴をもよくせられたり。新古今集雜下に。身の望みかなひ侍らで社のましらひもせでこもり居て葵を見てよめる。見ればまづいと、涙なみだももろかづらいかに契りてかけはなるらん。曾て土御門院の朝。建仁元年。後鳥羽上皇和歌所を置かれ。源家長を開闢とし。藤原清範。鴨

長明。藤原秀能を寄人きじんにせられしが。幾程を經ず辭して退去す。其の後上皇も  
 どの如く寄人に還補せらるべき勅ありしに。しづみにき今さら和歌の浦浪  
 によせはやよらんあまの捨舟。此の歌を奉りて重ねて仕へさりきとぞ。○方  
 丈は。佛説に禪林の正寢を方丈と爲す云々。意は丈四方の禪坐の床のとこ。長  
 明が方丈室の跡ハ。山城日野の外山にあり。宇治の木幡山の東北に當れりと  
 いふ。○行く川の云々は。まづ冒頭に世のはかなきとを述べたるこ。これ此の  
 段は高倉帝の安元三年丁酉改元ありて治承元年といふ。今年京中焼失。皇宮  
 も悉く焼け給ひしのみならず。平相國清盛入道。西光父子を殺し。康頼。成經。  
 僧俊寛を流罪せられたる年なれば。世のはかなき事を歎息して筆を起した  
 るこ。○うたかたは。水泡のとこ。はかなきためしに引きていふこ。○玉志きの  
 は。都にかゝる冠辭之。○薨は。家の棟むねの瓦のとこ。○たかきいやしきハ。貴賤之  
 ○まことかごハ。誠よそのもとの人かごこ。○水の泡ハ。消えやすき物なれば。  
 はかなき物のたとへよ水の泡をいふこ。○又志らず云々ハ。此の世の假りの  
 やどりなるよ。誰の爲よ心配し。何よよりて目を樂しませめんと思ふよや更

よ氣が知れぬとこ。○無常をあらそふとこハ。家と住む人と何れか先よはかな  
 からんと争ふこ。○夕べをまつことなし。是までの冒頭之。此の段ハ。安元三年  
 改元ありて治承元年といふ。四月廿八日京師大火よて禁裡悉く焼失し玉ひ  
 し事をいばんとて。かゝる冒頭を置きたるこ。○余云々ハ。長明がみづからい  
 へるこ。長明がもの心を知るやうになりてより以來之。物心を知るとハ。即ち  
 十五六才以上をいふこ。○世の不思議とハ。世間の思ひもよらぬ出來事之。○  
 やうたびたびよなりぬハ。漸々やがて度々たびたびはかなきことをみしとこ。さて是よより  
 て余ハ大よ悟る所ありしとの意を含めたるこ。委しくハ本書を見るべし。

以上擧ぐる所を見て。當時假名文の盛よ行はれて。世人にますく愛讀せられた  
 るを知るべし。かく國文ハ。妙巧を極めたれども。詠歌ハ。漸々古へよ劣るやうよな  
 りたり。即ち當時勅撰せられたる。拾遺和歌集。後拾遺和歌集。金葉和歌集。詞花和  
 歌集。千載和歌集の内より。當時の人の詠歌を拔萃して少か左よ示す。

## 拾遺和歌集

〔解〕此の集ハ。廿卷五百八十余首あり。一條天皇の長徳年中よ大納言公任卿の

撰なりとも。一説よハ花山法皇の御自撰なりともいへり。加茂眞淵翁ハ二説共よ非之。此の集ハ萬葉の歌をよみ誤り。古きよみ人をたがへなどしたる所あれバ。何人かの撰ならんといはれたり。集の名ハ。古今後よ遺漏せる歌を拾ひ集めたりとの意よて拾遺集とはいふなり。

權中納言義懐の家の櫻花を惜む歌よみ侍りけるに

藤原長能

身よかへてあやなく花を。しむかな。いけらバ後の。春もこそあれ。

〔解〕義懐ハ。一條攝政藤原伊尹の男よて。從二位權中言納之寛和二年。花山天皇御出家のさり。義懐も出家せられし之。藤原長能ハ。伊勢守倫寧の男よて。從五位上伊賀守たりし之。○あやなくハ。俗よワケモナク之。○いけらバハ。生てあらバ之。此の歌ハ。二段落の格之。

一首の意ハ。櫻子が散リカ、ルヲ見レバ。何ノワケモナク我身ニ代ヘテモ惜イト思ハル、ナア。ヨク考ヘテ見レバ。命サヘ有ルト來年ノ春モキツト櫻花ハ見ラル、コデアアルニ。ハチマア。人ノ心ハ妙ナモノデアアル。

井手といふ所に山吹の面白く咲たるを見て 惠慶法師

山ぶきの花のさかりに。井手にきて。此の里人よ。なりぬべきかな。

〔解〕井手ハ。山城の地名之。井出の玉川など歌よもよみて。山吹の名所之。惠慶ハ。八雲御抄。また拾芥抄よも祖先詳ならず寛和の頃の人之とあり。作者部類よハ。播磨國々分寺の講師なりといへり。○なりぬべきかなハ。ナツテシマイタイザヤナア之此の歌ハ一段落之。

一首の意ハ。山吹ノ花盛リニ井手ニ來テ見レバ。甚ダ面白イカラ。イツソノコ此ノ井手ノ里人ニ爲テシマツテ。毎日朝夕ニ見テ居タイナア。

春宮にさふらひける繪にくらはし山よ時鳥とびわたりたる所

藤原實方朝臣

と月やみ。くらはし山の。ほととぎす。おほつかなくも。なまわたるかな。

〔解〕春宮ハ。一條天皇の春宮よておはしけるをり之。實方ハ。上よ略傳あり。○と月やみハ。五月梅雨頃の暗き空をいふ之。○くらはし山ハ。倉柿とも棕橋ともかけり。大和國城上郡よある山之。此の山の名をくらきといひかけたる



之。是も一段落の歌也。

一首の意ハ。五月暗ノクラキ空デアルニ。椋橋山ノ時鳥ハ。何所ニ居テ鳴クカ。サラニ覺束ナクマア鳴キワタルデヤナア。

嵐の山の下をまかりけるに紅葉のいたく散り侍りければ

右衛門督公任

あさまだき。嵐の山の。さむければ。紅葉のにしき。着ぬ人ぞなき。

〔解〕嵐山ハ。山城之。大井河の側ヨありて花紅葉の名所之。公任ハ。三條關白太政大臣頼忠公の一男ヨて四條大納言と稱す。略傳ハ上ヨいへり。當時ハ右衛門督なりし故ヨかくある之。此の歌ハ。御堂殿大井河遊覽のをり。詩歌の船を浮べられたるに。公任ハ。和歌の船ヨ乗りて此の傑作を詠出し。船中を驚かしたる有名の歌之。○あさまだきハ。早朝之。○紅葉のにしきハ。紅葉を錦の衣ヨどりなしてかく云ふ之。此の歌も。一段落之。

一首の意ハ。アレ美ハシキ紅葉ガ。人々ノ裝束ノ衣ノ上ニ散リカ、ルガ。オ、サウデアアル。今朝ハ。マダ早クテ。嵐ノ山ノ山風ガ寒イカラ。紅葉ノ錦衣ヲ着ナイ人ハナイノデアアル。如何ニモ面白イヲデヤナア。

後拾遺集

後拾遺和歌集

〔解〕此の集ハ。廿卷千二百十餘首あり。白河天皇の應徳三年九月。中納言通俊卿の撰して奉りし之。實ハ通俊卿が撰集すべき勅命をうけしハ。今ヨり十年ほど以前なれど。此度漸ク成りて奉りし之。拾遺集ヨ漏たる歌を拾ひ取りたりとの意にて後拾遺とはいふ之。

俊綱朝臣の家ヨて春山里ヨ人をたつぬといふ心をよめる

藤原範永朝臣

尋づる。やどハかすみヨ。うつもれて。谷のうくひす。一聲ぞする。

〔解〕俊綱朝臣ハ當時の歌人ヨて橘俊綱之。藤原範永の略傳ハ上ヨ舉たり。尤も詠歌ヨ秀て。當時和歌六黨の一人之。此の歌ハ一段落の格也。

一首の意ハ。明らか之。春深クなりたる山家のありさまをよくいばれたり。

正月七日子日にあたりて雪のふり侍けるよよめる

伊勢大輔

人はみな野への小松を。ひきよゆく。けふのわかなき。雪やつむらむ。

〔解〕子日の正月の子日よかぎりて。人々野へよ行きて小松を引くと。又此日若菜を摘てわれよりめうへの人よ献るハ。是も當時の習俗也。伊勢大輔ハ。略傳上ヨあり。伊勢の祭主輔親の女なれば。伊勢大輔といふ。上東門院ヨ仕へて當時無雙の歌人之。○雪やつむらむは。雪の積むとに若菜を摘むとをかけたらへる也。此の歌も。一段落也。

一首の意は。今日は子日トテ。人ハ野へノ小松引キニ行ク日デアアルガ。カク雪ガ降りテハ。若菜ヲ摘ムコトハ出来ヌカラ。今日ノ若菜ハ雪ガツムデアラウ。

題しらず

曾根好忠

みしまえに。角くみわたる。昔の根の。一よのほどに。春めきにけり。

〔解〕好忠は。父祖詳ならず。花山天皇の頃の人也。丹後掾たりし故に。曾丹集といふ歌集あり。此の歌は。一段落の歌にて。上は一夜といはんための序之。○みしま江は。攝津の國之。○角くみハ。昔の芽を出すこと也。然して昔ハ節フサあるゆゑに。節と節との間をよといふ也。○ほどは。間之。○春めきにけりは。春と見え

て來タリイ也。即ち春らしくなりてきたとの意也。

一首の意ハ。明らか也。是は立春などの歌にて。だ。一夜立タバカリデ。春ラシク成テキタ也。

歸雁をよめる

赤染衛門

歸る雁。雲井はるかに。なりぬなり。又こむ秋を遠しとおもふに。

〔解〕歸雁とは。春よなりて歸る雁のこと也。赤染衛門は。略傳上にあり。上東門院よ宮仕せられし才女也。此の歌も。三の句よて切れたる一段落の格也。

一首の意ハ。明らか也。はるかど遠しとをかけ合せてあやなしたる也。又雁ノ鳴渡リテ來ル秋ハ。今ヨリ待遠シト思フニ。ソノ雁ガハヤ雲井遙ニ歸リ行クノガ残り惜シク思ハルトト也。

夜思櫻といふ心をよめる

能因法師

櫻さく。春はよるだよ。なかりせば。夢よもものハおもはざらまし。

〔解〕能因ハ。橘諸兄公の遠孫。肥後守元愷の子也。俗名ハ。永愷とて長門守よ任ぜられ。古曾部入道と號し。若年より詠歌を能くせり。後冷泉天皇の頃の人也。

○よるだよの。夜デモ之○なかりせばハ。無カツタナラ之。此の歌も一段落之。  
一首の意ハ。櫻花ノ咲ク頃ノ春ハ。夜デモナカツタナラ。夢ニマア物思ヒハセ  
マイニ。夜ト云モノガアリテ夜ハ物が見エヌカラ。夢ニサヘ心配致シマス。

題をらず

紫式部

世中を。何なげかまし。山さくら。花みるほどの。こゝろなりせば。

〔解〕式部ハ。上の源氏物語の條に委し○なげかましハ。歎キマシヤウ之。此の  
歌ハ。二の句よて切れたる一段落の格之。かく中途よて切れたる一段落の歌  
ハ。下の句の末尾より上へ打返りて意の通ずる例之。

一首の意ハ。櫻花ヲミルト實ニ何ノ心配モ忘レテシマフコトデアアルガ。此ノ花  
ヲ見テ居ル間ノヤウナ長閑ナ心デアアラバ。世ノ中ヲ何デ歎キマシヤウ。

遠き所よまうで、歸る路よ山の櫻を見やりてよめる

和泉式部

都人。いかよととはゞ。見せもせむ。かの山さくら。一えだもがな。

〔解〕まうで、ハ。參詣して之。式部ハ。略傳上ヨあり。和泉守橘道貞の妻なれば。

和泉式部といふなり。上東門院の女房よて歌をよくせり。紫式部日記よ。和泉  
式部ハ。實のえたる歌よみのさまよこそ侍らざめれ。うちよまかせたる事ど  
もに。かならず目とますることゞもよみたへ侍り云々。といはれたり。小式部内  
侍の母之○もがなハ。願ひの意の辭言<sup>ノボコト</sup>之。此の歌ハ一段落之。

一首の意ハ。京ニ歸リテ人々ニ櫻ハドウヂヤト問ハレタ時ニ見セタイホド  
ニ。彼ノ山ノ櫻花ヲ一枝ホシイヂヤナア。

三月三日桃の花を御覽じて

花山院御製

みちよへて。なりける物を。なとてかば。もゝとしもいた。名付そめけむ。

〔解〕花山院ハ。第六十五代の天皇よして諱ハ師貞。冷泉帝の元子よして。御母  
ハ藤原懷子。攝政藤原師尹公の女之○みちよへて云々ハ。三千年を経て實を  
結びたりといふ。漢の西王母の故事之○もゝハ。桃と百とをかけ合せての玉  
へる之。此の御製ハ一段落之。

一首の意ハ。三千年ヲ經テ實ヲ結ビタリト云フ物ヲ。ドウシテカマア。百トソ  
レマア名ヲ付ケ初メタデアラウ。

ほととぎすきよめる

大貳三位

待ぬよも。まつ夜も聞つ。時鳥。ばなたちはなの。よほふあたりは。

〔解〕三位ハ。略傳上ヨあり。後一條帝の御乳母なるヨよりて。三位ヨ叙せられたり。故ヨ大貳三位といふ。此の歌ハ。二段落の格ヨて。二の句と三の句ヨて切れたり。

一首の意ハ。待タナイ夜モ待テ居ル夜モ聞タワイ。時鳥ノ聲ヲ。花橘ノ句ヲ近所ハ。

金葉集

金葉和歌集

〔解〕此の集ハ。十卷千六百五十余首あり。崇徳天皇の天治元年。白河帝の院宣ヨよりて。前木工頭源俊賴朝臣の撰したる也。大治二年奏覽ヨ入れし所兩度返却あり。第三度目ヨ納りたりといふ。今世間ヨ流布せる本ハ。二度目の本トスヘリ。

遙見山花といへるときよめる

大藏卿匡房

初瀬山。くもるよ花のよきぬれば。天の河をみ。たつかとぞみる。」

〔解〕匡房ハ。略傳上ヨあり。八雲御抄ハ。通俊匡房ハ賢臣こそ並びて侍りけり。歌の道ハ。同日の論ヨあらず。匡房ハまされり。このたまへるヨても詠歌ヨ達したるを知るべし。○初瀬山ハ。大和ヨあり此の歌ハ。一段落也。一首の意ハ。明らか也。雲井といふヨよりして。天の河波とはいへる也。

紫藤藏松といふときよめる

良暹法師

松風の。おとせざりせば。藤波を。なよにかへれる。花とまらまし。」

〔解〕良暹ハ。父祖詳ならず。一説ハ父ハ祇園別當ヨて。母ハ藤原實方朝臣の家ノ女房白菊ト云ひしものこといへり。山城の大原に住居して風月を樂しむし人々。袋草子云。人々大原なる所に遊び行くヨ各騎馬なり。俊賴朝臣俄ヨ下馬す。人々驚きて之を問ふ。答て云く此所ハ良暹ガ舊房也。いかでか下馬せざらん。人々感歎して皆以て下馬す。とあるヨても當時世ヨ尊敬せられたる歌人トハ知られたり。能因法師ト同時の人トはいへり。此の歌ハ。一段落也。一首の意ハ。明らか也。藤の蔓延して松の緑も見えぬまで。咲かへりたるさよとまらましと。

秋のはじめの心をよめる

大納言經信

かのつから。秋はきよけり。山里の葛はひかゝる。柚のふせやよ。

〔解〕經信ハ。略傳上ヨあり。八雲御抄云。經信バかりこそ楚國に屈原がありけんやうにひとり古跡を存じて並びなかりしかど。天下に是をよしと定むる人もなし。白河帝の後拾遺えらばれしをり經信をおきながら。通俊是を承るこれ末代の不審なり云々とあり。白河帝西河に行幸の時。詩歌管絃の三船をうかべて其道の人々をわかちのせられけるに。經信卿遲參の間。殊の外みけしきあしかりけるに。とほかりまたれてまゐりたりけるが。三事かねたる人よて。汀にひさまつきてや。いづれの舟なりともよせゆへといはれたりける。時に取りていみじかりけり。かくいはんれうに遲參せられけるとぞ。さて管絃の舟よのりて詩歌を獻せられたり。三船にのるとい。是ことあり○ふせやハ。いふせやハ。挾苦シキ家の事之。此の歌ハ。一段落の格よて二の句よて切れたり。

一首の意ハ。カヤウニ世間ニ關係セヌ山里ノ。葛ナドノ延掛リタル柚人ノ住

ム狹苦シキ家ニモ。自然ト秋ハキタワイ。

水車を見てよめる

僧正行尊

早き瀬よ。たゝぬはかりぞ。水くるま。我もうき世よ。めくるとをしれ。

〔解〕行尊ハ。略傳上ヨあり。後大僧正たりしが。初め僧正なりしかは。此所よハかくあるなり。此の歌ハ。二段落の格之。二の句はかりぞハ。はかりよとあるの意之。

一首の意ハ。世人ノ俗事ニアクセクシテ忙シキサマハ。恰モ早キ瀬ニ立テ水ニセカルトト同様デアルガ。我トテモ早瀬ニ立ナイバカリデアル。我モ水車ノ如クヤハリ浮世ニ回リ永ラヘテアル身ト知ルベシ。

例ならぬとありてわづらひける頃。上東門院よ柑子奉るとて。人よかゝせて奉ける。  
堀川右大臣

つかへつる。このみの程を。かぞふれば。哀こざるよ。なりにけるかな。

〔解〕例ならぬ云々ハ。非常の病氣よてありし頃之。重病よてありし時之。柑子ハ。檳柑のよと。右大臣ハ。關白道長公の第三子賴宗之。上東門院の御兄弟之○

このみハ。木實と此の身とをかけて云之。○こずるよなりにつけるハ。柑子の梢  
よ成りしと我身の末期よなりしとかけていへる。此の歌ハ。一段落之。  
一首の意ハ。御奉公シタ此ノ身ノ歲月ヲ計ヘテ見レバ。ア、我ハモハヤ末期  
ニナツタゲヤナア。

御かへし

上 東 門 院

すぎへける。月日の數も。まられつゝ。このみを見るも。哀なるかな。

〔解〕上の歌の御返歌之。門院ハ。一條帝の皇后之。道長公の御女。堀川右大臣と  
御兄弟之。御名ハ彰子と申奉りし之。○月日の數ハ。柑子の數をかけ。木の實ハ  
此の身をかけたる之。此の御歌も。一段落之。

一首の意ハ。過ぎ暮シテキタ月日ノ數モ知ラレツ知ラレツ。此ノ君ノ身ヲ見  
ルモ哀レデアアルナア。

詞花和歌集

〔解〕此の集ハ。十卷。四百首餘あり。近衛天皇の天養元年ハ。崇徳帝の院宣よて。  
左京大夫顯輔卿の撰して奉れる之。

所々ハ花を尋ぬといふ事をよませ給ひける 白河院御製  
春くれハ。花の梢よ。よそはれて。いたらぬ里のなかりつるかな。

〔解〕白河院ハ。第七十二代の天皇よして諱貞仁。後三條帝の元子之。御母ハ藤  
原茂子。延久四年御年二十一よて即位し給へり。○なかりつるかなハ。ナクア  
ツタゲマナア之。

一首の意ハ。明らか之。是ハ一段落の御製之。

郭公を待てよめる

周 防 内 侍

昔よも。あらぬわが身よ。ほとゝぎす。まつ心こそ。かはらざりけれ。

〔解〕内侍ハ。後冷泉院の女房仲子といふ。周防守繼仲の女之。故よ周防内侍と  
はいふ之。和歌よ長じ才名高かりし人之。此の歌ハ。一段落之。

一首の意ハ。明らか之。年老テ世ノ中ヤウク物ウク。萬昔ト變リユク中ニ。夏  
ニナリテ郭公ヲ待ツ心バカリハ若キ時ト變ラヌと之。

月を御覽じてよませ給ひける

三 條 院 御 製

秋よまた。あはん逢じも。きらぬ身の。こよひばかりの。月さだよ見む。

〔解〕三條院ハ、第六十七代の天皇よして諱居貞。冷泉帝の第二子也。御母ハ藤原超子。寛弘八年御年三十六歳よて即位し給ひ。寛仁元年御出家ありて金剛淨と號し給へり。常に藤原道長の權威を惡み給ふを以て叡慮安からず。遂に御心を決して位を去りたまひし也。百人一首よ載せたる。心よもあらで愛世よながらへハ戀しかるべき夜はの月哉。とあるハその時の御製也。此の御製もその頃のと見えていとかしこき御心と見奉る。一段落の格之〇月をだよ見むハ。月デモ見ヤウ也。

一首の意ハ。朕ハカク禁中ニアリテ。來年ノ秋ニ逢フカ逢ハヌカ知ラヌ身デアレバ、セメテ今夜ダケノ月デモ飽マデ見ヤウと云。これ既よ御位を去り給はんの御心よてよませ玉へる也。いとかしこし。

霧をよめる

源 兼 昌

夕きりに。梢もみえず。はつせ山。入相のかねの。おとはかりして。

〔解〕兼昌ハ美濃守源俊輔の二男也。從五位下皇后宮大進たり。堀河の朝の人之〇はつせ山ハ。大和の泊瀬山之。此の歌ハ。一段落の格よて二の句よて切れ

たり。

一首の意ハ。明らか也。秋の薄暮のありたまをよくよみよされてあはれ也。

雨後落葉といふ事をよめる

源 俊 頼 朝 臣

なごりなく。時雨の空は。晴ぬれど。またふるものハ木の葉なりけり。

〔解〕俊頼ハ。大納言經信卿の二男よて略傳上よあり。金葉集の撰者也。此の歌ハ。一段落也。

一首の意ハ。明らか也。

千載集

千載和歌集

〔解〕此の集ハ。二十卷。千二百八十餘首あり。後鳥羽帝の文治三年也。後白川帝の院宣をうけて。入道俊成卿の撰して奉れる也。

十首の歌人々よよませさせ侍ける時。花の歌とてよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

みよし野の。花の盛を。けふみれば。こしのきらねよ春風ぞふく。

〔解〕俊成ハ。略傳上よあり。此の千載集を撰して奉りしハ七十餘歳の時也。初

め自詠十一首を入れて観覽は供へし。歌數少し更よ二三十首加ふべきよし宣ありければ。又二十五首を加へ入れしとぞ。俊成ハ。六條家の歌風を歎じ。藤原基俊の弟子となりて和歌の一流を立られたり。之を二條家といふ。常に歌をよむ時ハ。淨衣を着。正坐して桐火桶に對して心を凝して。聊か情弱の姿をなさず。よまれしとぞ。又常に人よ告て云く。歌をよむ心得ハ。必ず才智を振ひて繪師が畫具を施し。作物師が木色をさまぐに付たるやうには非るべし。只詠み上げて打ながむるに。實よとおほえてをかしくも聞ゆる姿があるべきものぞといはれたりとぞ。老練の歌人なりき。此の歌ハ。一段落之。

一首の意ハ。ミ吉野ノ花ノ盛ナ今日見レバ。ゲニ雪ノ降り積リタル越ノ白嶺ニテ春風ガ吹クヤウデアル。

花落客稀といへる心をよめる 藤原基俊

故郷ハ。花こそいとミ。忍はるれ。ちりぬる後ハ。とふ人もなし。

〔解〕基俊ハ。略傳上ヨあり。文才ありて詠歌を善くせられたり。俊成卿などの師之。崇徳帝の保延四年剃髮して覺舜と稱し。悦目抄。新撰朗詠集などを著ハ

されし人々。此の歌ハ。二段落の格よて三の句と五の句とよて切れたり。一首の意ハ。明らか之。

百首の歌奉ける時山吹の歌とてよめる 藤原清輔朝臣

山吹の。花のつまとは。まかねども。移ふなべよ。鳴くかはづかな。

〔解〕清輔ハ。略傳上ヨあり。近衛帝の天養元年。父顯輔。詞花集を撰して奉る時。清輔これを助けて力められたりとぞ。和漢の學よ長じて。奥儀抄。和歌初學抄。袋草子等の著述あり○花のつまハ。山吹の花の夫之。山吹の花を鳴蛙カエの夫とハ聞かねどもといふ意之。此の歌ハ。一段落の格之。一首の意ハ。明らか之。

時鳥の歌とてよめる 從三位賴政

一聲ハ。とやかよ鳴て。ほとノぎす。雲路はるかよ。遠きかるなり。

〔解〕賴政ハ。略傳上ヨあり。父仲正も歌をよくして此の集の作者之。此の歌ハ。一段落之。

一首の意ハ。明らか之。時鳥の鳴てとく過ゆくとまよよまれたる之。後徳大寺



左大臣實定公の。時鳥なきつるかたをながむればたゞ有明の月ぞ。残れる」といふよ大かたは同じ意なれど有明の月のかた哀深き心ちせらるゝ之。實定公の歌も此の集に載たれど皆人の知れる歌なれば省きつ。

水草隔船といへる心をよみ侍ける 法性寺入道前太政大臣

夏ふかみ。玉江は茂る。芦の葉の。そよくや船のかよふなるらむ。

〔解〕前太政大臣ハ。從一位攝政關白藤原忠通公の事よて。その略傳ハ上にいへり。鳥羽。崇徳。近衛。後白河の四朝に仕へ奉り。詩歌に長じ。能書の聞えありし人之〇夏ふかみハ。夏が深さに之〇玉江ハ。攝津にありて三島江の玉江など歌にもよめり。此の歌ハ。一段落の格なり。一首の意ハ。明らかと。

連歌の事

此の他にも千載集よハ。よき歌多くあれども略す。又連歌といふものも此の頃大よ行はれたり。是ハ一首の歌の上の句と下の句とを二人してよめる歌也。即ち彼の後三年の役の時。源義家朝臣が。衣の館ハほころびよけり。と云ひかけたれば安倍貞任が。年をへし糸のみだれのくるじと。と上を付たる。又頼政卿が鳩を射し

時。宇治左大臣殿が。時鳥名をも雲井よあぐるかな。と上の句をいひければ頼政卿乍ちよ。弓張月のいるよまかせて。と下の句を付たるの類之。金葉集よハ連歌を多く載せたれど。此所よ舉て示すまでもなれば。省きつ。以上の。紀元一千六百四十餘年の頃より。同一千八百五十餘年よ至る。凡二百十餘年間の本邦文學の概略なり。

◎第八編 ○鎌倉時代の文學

文學の衰微

鎌倉時代の文學とは。土御門天皇の正治の頃（元一八九）より。後醍醐天皇の元弘の頃（元一二九）に至る十三朝。凡百三十餘年間の文學の概畧をいふなり。此の時代は於ては是より前に保元平治の戦亂あり。次て壽永の大亂に至り。なほ承久の亂に及べる等。その擾亂六十餘年に距れるを以て。文學大に衰微し亦昔日の類に非ず。然して漢文の如きは尤も拙劣に至りし事。かの東鑑等を見ても知るべし。然して詠歌の一技のみは。その詞藻の巧なる事却て昔日に優れり。當時詠歌を以て闘はする事大に行はれて。是を歌合といふ。

歌合の事

因云歌合とは。先づ人數を定め。假令は十人ある時は五人づゝ。二十人なる時は十人づゝ。左右に組を別ち。每番二人づゝ。即ち二首の歌を組合せて。一番左某右某。二番左某右某とやうに。何番にても歌數によりて。番號を設け歌を合せて。然して判者なる者ありて。左右の歌の優劣を判定する例なり。

さて歌合は。是より先き既に行はれたれども。唯勝負を決するのみ。此に至りては美を評し疵を論じ。その一番の優劣を判定するも數日を費すに至れり。然して

歌會

將軍實朝また歌を好みければ。關東に於ても頻りに歌會といふ事行はれたり。さて是より後は北條氏専ら治を力め。凡百餘年間ハ天下無事なりしかば。文學亦漸々に再興の兆あり。

當時の學者小傳  
月輪殿 九條家  
後京極 六條家  
飛鳥井家 堀川家  
歌六方餘 壬生宮内卿  
歌聖

當時文學を以て世に知られたる人々は。藤原兼實關白忠通の第三子。博學にして故典に通じ。朝廷疑議あり。承元元年薨す。年六十一。月輪殿を稱し。又九條家と號す。子良經果進して攝政太政大臣に至り。後京極家と號す。左京大夫。元久三年三月七日薨す。年三十八。藤原有家左京大夫。元久三年三月十一日薨す。年四十二。飛鳥井家と號す。博學にして歌才あり。定家門の高弟といはれし人。子の孫。大貳重家の子。大藏卿に任ぜられ。建保四年四月十一日薨す。年六十二。六條と號せり。藤原雅經刑部卿賴經の子。參議左兵衛督。從三位。承久三年三月十一日薨す。年五十二。飛鳥井家と號す。博學にして歌才あり。定家門の高弟といはれし人。子の孫。大貳重家の子。大藏卿に任ぜられ。建保四年四月十一日薨す。年六十二。六條と號せり。藤原家隆太宰権帥光隆の第二子。少より敏才の聞え高し。俊成の弟。前代後出せし所の歌六萬餘首ありといふ。玉吟集といふ歌集あり。嘉祿二年制髮して。佛性を號し。從二位宮内卿たりしを以て世に壬生宮内卿といふ。嘉祿三年四月九日薨す。年八十。藤原定家三位入道俊成の子。和漢の才と云はれたり。正三位權中納言に累進し。後醍醐帝の貞永元年七十一歳にて出家し。明應二年薨す。年八十。藤原盛淨海の子。其盛の子なり。才學ありて。靜と號し。四條帝の仁治二年八月二十日薨す。年八十。後世に至りても人皆歌聖と稱す。平行盛淨海の子。其盛の子なり。才學ありて。定家の許に遊して去りしが。四海に於て戰没す。藤原信實右京大夫隆信の子。隆信は。歌及び書を能くしければ。信實も亦歌才あり。位下左馬頭に累進し。平家四奔の時。詠草一卷を。藤原信實に遺す。正四位下左京大夫に任ぜらる。卒年未だ詳ならず。定家の許に遊して去りしが。四海に於て戰没す。源實朝右大臣賴朝の弟にて。左馬頭源朝の子。從二位右大臣征夷大將軍に累進す。故に鎌倉右大臣とも云なり。才學ありて尤も詠歌を好み。定家卿の門に入りて學ばれける。能く古調の意を自得したるは門中第一とす。建武七年正月二十七日薨す。年二十八。菅原爲長大學頭長守の子。秀才博學を以て大内記。文章博士を歴て。侍讀となり。參議に任じ。正二位。從二位大納言に進み。權學して。顯慶二年八月十九日薨す。年八十九。高辻家高辻家と稱す。子長成高長才學あり。皆文學博士たり。藤原爲家定家の子。從二位大納言に進み。權學して。顯慶二年八月十九日薨す。年八十九。北條時賴時氏の子。才學あり。從五位上相模守たり。後雜學して。建武二年八月十九日薨す。年八十九。藤原爲教爲家の子。從二位右兵衛督に累進し。京極家。年九月十四日薨す。年六十五。子爲世從二位權中納言たり。建武五年。從五位上相模守たり。後雜學して。建武二年八月十九日薨す。年八十九。藤原爲教爲家の子。從二位右兵衛督に累進し。京極家。年九月十四日薨す。年六十五。

鎌倉右大臣  
高辻家  
最明寺  
二條家

冷泉家

舟橋家  
二條關白

日野家

子爲兼從二位大納言藤原爲相爲家の六子。冷泉家と號す。正三位中納言より左兵衛尉に累進し。嘉曆三年七月十七日薨す。年六十六。藤原爲藤爲世の子。學才あり。正中元年薨す。嘉年詳ならず。清原良枝賴業の裔。家を舟橋と稱す。明經博士となりて。後宇多。後。藤原兼基和漢の學に通じ。從一位攝政關白たり。世に二條關白と稱せらる。藤武元年八月廿一日卒す。年七十九。藤原資朝日野家と稱す。卓越の才あり。從三位中納言に累進し。會て北條氏の事績を憤り之を討せん。二月薨す。年六十八。子道平從二位左大臣として。皇太子傳を兼れ。兵部卿。藤原資朝等と北條氏を討つ。元弘二年高時の爲に害せらる。是等の一人なり。又僧侶には僧源空淨土宗の僧。源空の弟子にて。僧日蓮法華宗の開祖。僧榮西淨土宗の始祖なり。僧一遍淨土宗より出て更に是等は皆才學勝れたる僧侶なり。

當時の才女

又此の時代に於ても婦女子の輩に才學卓越なるもの多かりしなり。即ち其略傳を左に示すべし。

俊成卿女皇太后宮大夫俊成の女。顯川大納言源通具の室。少將内侍左京權大夫信實の女。少將在氏の妻たるを以て少將内侍たり。初め入條院に宮仕して三條と稱しける。信實三女あり皆世に才女と稱せらる。

辨内侍信實の二女。後深草院の女房信實の三女。深草院の女房。阿佛尼藤原爲家の室なり。略傳下院の女房なり。兄弟中殊に秀吟多しとす。

新中納言藤原定家の女。和小宰相藤原家隆の女。土中納言典侍大納言通方の女。作者部類には。大納言典侍あり。後嵯峨院の女房。權中納言名は爲子。藤原爲教の御匣殿。久我太政大臣通光の女。式乾門院に宮仕是等ハ皆有名の才女なり。然して

此の第七八編の時代は於て女才子の多きは。男學者の衰微したる證なり。假令當時女學者の多きよもせよ。男子よも亦碩學名儒の多からんよ。かはかり才女の名聲詩大よハ至らざるべし。是よよりて之を觀れば。當時才女の輩ハ多かりしよもせよ。一般の上より一睨すれば。決して文學隆盛の時代なりといハ謂はれざるなり。此の中詠歌は妙巧なりし人々の。藤原定家。藤原家隆。藤原兼實。同良經。藤原雅經。源通具。藤原有家。源實朝。藤原爲家。同爲氏。同爲世。藤原爲教。同爲兼。藤原爲相。藤原爲藤。藤原兼基。同道平等なり。又後鳥羽順徳の二帝も御歌は妙なりき。然して順徳天皇ハ。八雲御抄。禁秘抄等の御親著あり。又藤原定家ハ。一流の歌風を起し。一家の書風を創し。京極黃門の名ハ。後世よ至りても世よ能く知られたり。藤原信實ハ。性書畫を嗜み極めて妙巧なりければ。曾て上皇の宸影を鳥羽殿よ寫し奉るの榮を得たり。又當時北條氏の族よ越後守實時あり。義時の五男實泰の子也。武藏金澤よ住して稱名寺と號す。和漢及び佛書を蒐集し。建長年中清原教隆と共ニ校考して點を加へたり。實時卒して。子越後守顯時文庫を武藏の金澤よ建て之を藏す。即ち。金澤文庫是なり。顯時の子金澤貞顯。孫貞將能く文庫を維持せられたり。さて此時代よ成りたる勅撰集ハ。土御門帝の元久二年。後鳥羽帝の院宣よよりて。參議右衛門督通具。大藏卿有家。右近中將定家。前上總介家隆。右少將雅經等。新古

京極黃門  
宸影を寫す

金澤文庫

今和歌集を撰し。後堀河帝貞永元年勅を奉して。前中納言定家。新勅撰和歌集を撰し。後深草帝の建長三年。後嵯峨帝の院宣よりて民部卿藤原爲家。續後撰和歌集を撰し。龜山帝の文永二年。後嵯峨帝の院宣よりて。前内大臣藤原基通。入道民部卿藤原爲家。侍從藤原行家。入道右大辨藤原光俊等。續古今和歌集を撰し。龜山帝の勅を奉じて文永十一年。前權大納言爲氏。續拾遺和歌集を撰し。伏見帝の正安三年。後宇多帝の院宣よりて。大納言爲世。新後撰和歌集を撰し。花園帝の正和二年。伏見帝の院宣よりて。前大納言爲兼。玉葉和歌集を撰し。花園帝の文保三年。後宇多帝の院宣によりて。前大納言爲世。續千載和歌集を撰し。後醍醐帝の元亨三年勅を奉じて。民部卿爲藤。續後拾遺和歌集を撰したりしが。正中元年薨じければ。其子權中納言爲定相繼で之を撰し。同二年奏覽せり。當時専ら世よ愛せられたるハ。軍記及び軍物語イナヤシノカガキの類なり。即ち保元物語三。平治物語三。源平盛衰記四。平家物語十二。是皆古への物語とい異よして實録なり。然して平家物語ハ。琵琶を弾じて謠ひしものなり。又今昔物語よ倣ひてかゝれたる。古今著聞集二十あり。橘成季の著なり。又日記紀行の類ハ。辨内侍日記。十六夜日記等あり。此の他家集と號する類の著作多

## 軍記物語

くあれども省きつ。今左よ平家物語。十六夜日記。新古今和歌集を擧げて之を示し。其他ハ悉く略す。

## 平家物語

平家物語(宮御最後の條)

葉室大納言時長

足利が其日の装束には。朽葉の綾の直垂に赤革威の鎧着て。高角打ちたる甲の緒をしめ。金作の太刀を佩き。二十四さしたる切符の矢を負ひ。滋藤の弓持て。連錢葦毛なる馬に。柏木よみづく打ちたる金覆輪の鞍置きてぞ乗りたりける。燈踏み張り立ち上り大音聲をあけて。昔朝敵將門を亡して。勳賞を蒙りて。名を後代にあけたりし。俵藤太秀郷に十代の後胤。下野の國の住人。足利の太郎俊綱が子。又太郎忠綱。生年十七歳にまかりなる。斯様に無官無位なる者の。宮よ向ひ參らせて。弓を引き矢を放つことは。天の恐少からず候へども。但し弓も矢も冥加のほども。平家の御上にこそ止り候はめ。三位入道殿の御方に。我と思はん人々は。寄り合へや見參せんとして。平等院の門の内へ責め入り戦ひけり。大將軍左兵衛の督知盛。是を見給ひて。渡せやわたせと下知し給へは。二万八千餘騎皆打入れてわたす。さはかり早き宇治川も馬や人にせかれて水は上にぞたへたる。雜人原ハ馬の下

手に取り付く渡るほどに。膝より上をぬらぬ者も多かりけり。おのづから外  
 る、水には何もたまらず流れたり。爰に伊賀伊勢兩國の官兵等。馬筏押し破られ  
 て六百餘騎こそ流れたれ。萌黄。緋威。赤威。色々の鎧の浮きぬ沈みぬゆられけるは。  
 神無備山のもみち葉の。嶺の嵐にこそはれて。龍田川の秋の暮。堰にかゝりて流も  
 あへぬに異ならず。その中に緋威の鎧着たる武者三人。綱代に流れかゝりて浮き  
 ぬ沈みぬゆられけるを。伊豆守の見給ひてかくぞ詠じ給ひける。

伊勢武者は皆ひおどしの鎧きて宇治の綱代に掛りぬるかな是等は皆伊勢  
 の國の住人なり。黒田後平四郎。日野十郎。乙部彌七といふ者なり。中にも日野十郎  
 は古兵にてありければ。弓の羽岩のはさまにぬち立て搔上り。二人の者どもをも  
 引上げて助けゝるとぞ聞えし。大勢皆渡りて平等院の門のうちへ責め入りせり  
 入り戦ひけり。このまぎれに宮をは南都へ先立たせ參らせ。三位入道の。一類渡邊  
 黨。三井寺の大衆。残り止りて防ぎ矢射けり。源三位入道は七十に餘りて軍して。弓  
 手の膝口を射させ痛手なれば。心靜に自害せんとして。平等院の門の内へ引き退く  
 處に。敵襲ひかゝれば。次男源大夫の判官兼綱は。紺地の錦の直垂に唐綾威の鎧き

て。白月毛なる馬に。金覆輪の鞍置きて乗り給ひたりけるが。父を延さんがため  
 返し合せ返し合せ防ぎ戦ふ。上總の太郎判官が射ける矢に。源大夫判官内甲を射  
 させてひるむ處に。上總守が童次郎丸といふ。大力の剛の者。萌黄匂の鎧着。三枚甲  
 の緒をしめ。打物の鞘をばづして。源大夫判官に押し並べてむすと組みてどうと  
 落つ。源大夫判官は大力にておはしければ。次郎丸を取りておさへて首をかき。立  
 ち上らんとする所に。平家の兵ども十四五騎落ち重りて。終に兼綱を討ちてけり。

〔解〕平家物語は。十二卷あり。平家繁昌の事より滅亡に至るまでの事を記せる  
 なり。作者は勸修寺良門十三代の孫。葉室大納言時長なりといひ。徒然草には。  
 後鳥羽院の御時。信濃前司行長が作りて。生佛といふ盲人に語らせたりとあ  
 り。何れとも定めがたし。此の段は。卷の四なる高倉宮御最後の條なり。○朽葉  
 の綾の直垂は。綾地朽葉色の直垂。○赤革威は。赤色のなめし革にて綴成せ  
 る鎧。綴たるを威といふ。○高角打ちたる甲は。甲の前立物として正面に角  
 を金銀にて作り付たる。○金作の太刀は。黄金の金物なるを金作といふ。  
 ○二十四さしたる切符の矢は。切符とは。斑文ある羽の名。二十四は矢の數

之○滋藤ハ弓の名之。藤にて繁ク卷たるを滋藤といふ。中と上下とを卷たるを三所藤ミヨロコトなどいふに同じ○連錢葦毛ヒメアサギハ馬の毛色の名之。葦毛とは鼠色をいふ。鼠色にして斑文あるを連錢葦毛といふ之○柏木にみづく打たるといハ。鞍の模様之。柏の木に鵬鳥カケイのとまりたる詩畫したる之○金覆輪カネフクレといハ金の薄がねを縁に張りかけたる之○三位入道ミツイノミチノノリハ源三位入道賴政之○平等院トウビョウインハ宇治にある寺名之○知盛チカノシゲハ清盛の子後に新中納言と稱する是之○雜人原ミヤノハラとは。奴僕等のと之○外るハ水とは。人馬の間隙より流るハ水之○馬筏ウマバタハ馬と馬とを組合せて水を渡すと之○神無備山カミナヒツチハ紅葉の名所にて山城あり○龍田川ハ紅葉の名所よて是も山城あり○堰セキハいせきとよむ之。杭を立て水の流れをせく所之○網代アミヨハ水をせきて魚を捕る爲よ作れるもの之○伊勢武者云々ハ伊勢の官兵をいふ之。ひおどしハ緋威ヒカシと氷魚ヒメイサとをにかけていへる之。宇治川よてハ網代を作りて氷魚を捕る故よかく云之○古兵コヘイハ物馴れたる兵のと之○弓の強ツルといハ。弓の上下の先きを云之○宮ミヤは南都へ。宮は高倉の宮之。南都は和の奈良のと之○渡邊黨ワタナベノトといハ。渡邊競等の一族郎黨を云之○

三井寺ハ近江の三井寺之。三井寺の僧徒ハ。宮よ付き奉りし之○防矢ハ敵を防ぐ爲よ射る矢之○弓手の膝口ユミテノハシハ。左りの膝先之○兼綱カネツナハ。三位入道賴政の二男。伊豆守仲綱の弟之○唐綾威カラヤスガヒハ。綾の唐糸よておどしたる之○白月毛シラツキハ。白き毛色の馬之○上總の太郎判官カミツツノタロウハ。侍大將上總守忠清の子。忠綱のと之○内甲ウチカブハ。甲の内部之○萌黃モウワウハ。萌黄色のと之○三枚甲サンサイカブハ。鐵板三枚よて張りし甲之。五枚甲といふもあり○打物ウチモノといハ。薙刀ナギタのと之○むすムスと組みてハ。むすムスハむすと同じ無造作ムソウサウサウといふよ同じ○どうと落つトハ。俗よドツサリト落ルト之。軍記物語ハ。大方是等の文法之。

十六夜日記

阿佛尼

十六夜日記

むかしかべの中よりもどめ出たりけんふみの名ハ。今の世の人の子は。ゆめはかりも身のうへの事といまらざりけりな。むづムズくまの岡のくまはちかへすとくも。かきおくあとたしかなれども。かひなきものハ。おやのいともなりけり。また賢王の人をすてたまハぬまつりごとよもめれ。忠臣の世を思ふなむけよもすてらるゝものハ。數ならぬ身ひとつなりけり。とおもひまりながら。またさてしもあら

を。なほこのうれへこそやるかたなくがなしけれ。とらよ思ひつゝくれば。やまをうたの道に。たゞまことすくなくあだなるすまびはかりと思ふ人もやあらん。ひのもとの國に。あまのいはとひらけし時。よもの神たちのかゝらのと葉をばじりて。世ぎんさち物きやはらざるなかだちとなりよけることぞ。此道のひじりたちは。志るしかかれたりける。とてもまたまふをえらぶ人のためしかほかれど。ふたゝび勅をうけて。世々にまことえあけたる家。たゞひなほありがたくや有けん。其あどよしもたづさひりて。三人のまのことも。もゝちのふるほんごともま。いかなるえよかありけん。あづかりもたるとあれど。道をたすけよ。子をたふしめ。後の世をどへとて。ふかき契りをむすびおかれし細川のながれも。ゆゑなくせまごめられしかば。あどゝふのりのごもし火も。みちをまもり家をたすけんおやこのいのちも。もろともにまきをあらそふとし月をへて。あやふく心ほそきものから。何としつれなくけふまをいながららむらむ。ましからぬ身ひとつのやすくおもひすつれども。子を思ふ心のやまはなほまのびがたく。みちをかへりみるうらみ。やらんかたなく。とてもなほあづまの龜のかゝみようつとは。くもらぬ影もやあらは

る。と。せめて思ひあまりて。よろづのはゞかりをわすれて。身をえうなまきものになしはて。ゆくりもなくいとよふ月にさそはれいでなんとぞ思ひなりぬる。とてりとしてふんやのやすひでがさそふよもあらず。住むべき國もとむるよもあらず。ころはみ冬たつ初の空なれば。ふりみふらずみ時雨もたえず。あらしにまほふこの葉さへ。なみたとゝもにみだれちりつゝ。ことにふれて心ほそくかなしけれど。人やりならぬ道なれば。いまうしとてもとゞまるべきよもあらず。何となくいそぎたちぬ。

〔解〕此の日記は。紀行の跡。阿佛尼の作にして一卷あり。作者が十月十六日よ京を發して。その夜旅亭よて十六夜月の歌を詠じたりし故に假りよ十六夜日記とおほせし。阿佛尼は。從五位下佐渡守度繁の女。初め安嘉門院よ仕へて四條と呼べり。後大納言爲家卿の室となり。夫薨して後尼よなりて阿佛といひし。○むかしかへの中より云々。古へ支那よて漢の代魯恭王の時孔子の堂を壞ちて。壁の中より孝經を得たりといふ。その故事を冒頭よ引ける。○夢ばかりも。少しばかりも。○老らざりけりな。知ラナイテ

有タナア之。○みづくきの岡ハ。筑前國に此の地名あれども。此所ハ葛原を形容したる詞之。草木の茂りたる岡をさして水莖岡ミツクキノサカといふ之。○葛原ハ。葛の生ひたる廣き場所之。葛の葉ハ廣くして風吹けば裡かへる故よかへすくもといふ序よりへる之。○かきかくあといハ。爲家卿の筆跡の之。爲相よ渡したる證書之。○おやのいさめハ。父の遺言之。○また賢王の云々ハ。是より以下阿佛が我が身の薄命を歎きて云之。意ハ凡て賢明なる帝王ハ人をすて玉ハぬものなれど。我身ハその政治よも漏れたり之。○忠臣の云々ハ。凡て忠臣ハ天下國家の爲よ世よ不平の人民なからん事を思ふなれども。我身ハその忠臣の世を思ふ情よもすてられてあると之。○數ならぬ身ハ。阿佛が自身を卑下して云之。○さてもあらでハ。然してもあられナイテ之。○やるかたなくハ。晴しやうなく之。○やまどうたの道ハ。歌道之。○あだなるすさびハ。あだハ浮華之。すさびハならざるさみ之。○あまのいはといハ。天の石窟之。神代紀よ。天照皇大神の天の石窟よ籠り玉ひし時。諸神相謀りて神樂歌を謠ひ面白く遊びければ。大神面白しとおほして石窟の戸を細く明け玉ひけるを。手力雄命その

戸を押披きて大神を引き出し奉りし故事をいひて。歌の效能をいはれし之。○世をいさめ云々ハ。是も歌の徳をいふ之。古今集の序に紀貫之がいはれし言をいふ之。○此道のひじりハ。此の歌道の先哲よて貫之等をいふ之。ひじりといハ。クシヒニ知ルの義よて。非常の博識といふ意之。故よ聖の字をも假用せり。○まふをえらぶ人といハ。歌集を撰びし人之。○ふたゝび勅をうけてハ。是より我が家の履歴を云之。定家卿爲家卿ハ。再度院宣を奉じて歌集を撰したり。○其あといハ。其の子孫之。○たつこりてハ。關係して之。○三人のきのこハ。二人の誤なるべしと殘月抄よもあり爲相爲守の二人之。○もゝちハ。百千之。○ふるほんごハ。舊反古之。撰集などの草稿類の之。○いかなるえにハ。如何なる縁之。えんをえにといふハ。錢の字をせに。丹の字をたにといふと同例よて音便之。○もたるハ。持て有る之。○道をたすけよハ。歌道を補け力めよ之。○子をばらゝめハ。子孫を養育する之。○後の世をとへハ。父祖の後世を吊へ之。○ふかき契をむすびおかれしハ。爲家卿が存生のをり兼て阿佛よ約束ありじ之。○細川のながれハ。爲家卿の領地播磨の細川の莊之。なかれといハ。本領の



接<sup>ツグ</sup>地<sup>チ</sup>は非<sup>ヒ</sup>ず。別段の領地なればかく云<sup>ク</sup>。後世飛地なごい<sup>ハ</sup>類<sup>ル</sup>。川の縁語よてなかれといへる。○せきとめられい。差し押へ停止<sup>ト</sup>られし。こは父爲家卿が領地の内細川の莊を爲相<sup>ヲ</sup>與<sup>ス</sup>へしを。父薨去の後。異腹の兄爲氏が是を差止て横領したるを川の縁語よてかく云へる。○あとふ云々以下二句ハ上の照應。○きえをあらそふ。阿佛母子の一命は關係する年月をへての意。○心はそまものからい。心は頼みなまものながら。○つれなくハ強顔。鐵面皮などいふは同じ。○をしからぬ身とい。阿佛が自からの身をいふ。○子を思ふ云々ハ引歌。後撰集に。人のおやの心はやみよあらねども子を思ふ道よまどひぬるか。とあるを云。○道をかへりみるうらみとい。歌道よ於ても爲相の一家の潰<sup>ツ</sup>るハ甚遺憾との意。○あづまの龜のかゞみとい。鎌倉の政治といふと。北史よ。龜所以決猶豫。鑑所以辨奸蚩也。とあるをとりて龜鑑とい云。○せめてい。迫りて。○よろづのはゞかり。萬事の不都合。○えうなきものハ無益の者。○ゆくりもなくハ不意。○いよふ月ハ十六日の夜の月。○ふんやの云々ハ文屋康秀が三河のどうに

なりて。あがた見よとて。小野小町を誘ひしこと古今集よ見えたり。○すむべき國云々ハ世を遁れんとして住みよき國を求るよも非ずと。○み冬たつハ。みハ發語。冬立といふと。十月の初めの空なれば。○時雨ハ。しふれとよむべし。冬の雨のよ。○まほふハ競争する。○ことばふれてい。事よ當りて。○人やりならぬ道とい。人よ遣<sup>ツ</sup>るハわけハナイ。自<sup>ミ</sup>から思立たる旅行なればとの意。○いさうしい。行く事が憂<sup>ウ</sup>とて。○何となくいそきたちぬ。何といふといなけれども心せはしく急ぎて出立きたりと。

此の日記ハ。本文よあるが如く。爲家卿が播州細川の莊を。子爲相<sup>ヲ</sup>與<sup>ス</sup>へんとして。その書付さへあるを。卿薨じければ。長子爲氏之を横領して。爲相<sup>ヲ</sup>與<sup>ス</sup>へされば。詮方なくて鎌倉の政府即ち北條氏よ訴へて。その裁判を仰かんとて。阿佛が關東へ下向する道中の日記。但し爲氏ハ先妻宇都宮氏の産める子。爲相ハ阿佛の産める所よて。阿佛ハ後妻。故よ冒頭よ孝經を引きて。爲氏が父の遺命よ背ける不孝を責たるハ。女子の文章なれども。なか〜よをよまき筆力なるをみるべし。

〔解〕新古今集ハ。二十卷歌數千九百八十餘首あり。土御門帝の元久二年後鳥羽帝の院宣よりて。通具。有家。定家。家隆。雅經等の撰したる事上よりへり。

春たつ心をよみ侍ける

攝政太政大臣

みよしのハ。山もかすみて。きら雪のふりよしとに。春はきよけり。

〔解〕春たつハ。立春のこと。攝政云々ハ。九條關白兼實公の二男。後京極藤原良經公のこと。略傳ハ上よりへり。○ふりよしハ。雪の降りし里と年をふりし里とをかねていへる。吉野ハ。歴朝の離宮のある所なれば。かくいはれし。此の歌ハ。一段落の格。

一首の意ハ明らか。

五十首歌奉りし時

宮内卿

かきくらし。なほふる里の。雪の中に。あそこを見えぬ。春はきよけり。

〔解〕こは後鳥羽帝ハ。五十首歌奉りし時の歌。宮内卿ハ。女房の呼名なり。略傳ハ上の七編あり。右京大夫師光の女よて。歌ハ有名なりし。後鳥羽院の女房ハ。○かきくらし云々の。空がかきくもりて。こて空が暗くなりて。猶雪が

ふるといふことを。故郷よかけていへる。○あそこをみえぬハ。跡はキツト見エナイと。雪ハものゝ跡が付くものなれど。跡を付けずに春ハ來タワイと。此の歌ハ。一段落。

一首の意ハ。空モ暗クナリテ雪ガ降り。誰モ訪ヒクル人ハナイ。故郷ノ雪ノ中ニ。跡ハ見エヌガ。春ガ來タワイと。

百首歌奉りし時

藤原家隆朝臣

谷川のうち出る波も。こゑたつ。うくひすさそへ。春の山かぜ。

〔解〕家隆ハ。略傳ハ上よりあり。詠歌ハ。秀て俊成卿の門中第一と稱せられたり。壬生二位と稱せるを以て。家集を壬生集といふ。○うち出る波云々の。谷川の激流なれば。春よなりて。氷の解ると直よ白波の立をいふ。此の歌ハ。一段落。下の結句ハ。春の山風よの意。

一首の意ハ。春ガキテ氷ガ解ケタト見エテ。谷川ノ水ノ音ガ聞エタワイ。サア鶯ヲ誘ヘ春ノ山風ヨ。

守覺法親王家五十首歌

藤原定家朝臣

おほそらハ。梅のよほひよ。霞みづく。くもりもばてぬ。春のよの月。

〔解〕守覺ハ。仁和寺の二品法親王のよよて。後白河帝の皇子之。定家ハ。上よ略傳あり。二條京極に住しけれハ。京極黃門と稱す。出家して明靜ミヤカドといへり。拾遺愚草といふ家集あり。歌聖と稱せられし人之○よほひよハ。句ひよて之。此の歌ハ。一段落之。

一首の意ハ。大空ハ梅ノ句ヒニテ霞ミツ霞ミツシテモ。曇リ果テナイ春夜ノ月ハ面白キモノデアル。眞ニ空ガ霞メルナラハ月ハ曇リ果ツベキニト云。

千五百番歌合よ

右衛門督通具

梅の花。たが袖ふれし。よほひぞと。春やむかしの。月よとはばや。

〔解〕歌合とハ。左右二首の歌を組合せて一番ヒツヤヒとして優劣を評する之。千五百の番數之。此の歌合ハ建仁元年土御門院よてありし之。通具ハ。略傳上よあり。定家卿ハ。通具の歌を評して白樂天の詩を見る心ちすと云れたり○春や。とはばや。此の二つのやハ疑歎のやよて。カイと解すべし。此の歌ハ。一段落之。一首の意ハ。ア、此ノ梅ノ花ハヨキ香ガシテナツカシイガ。是ハ誰レガ袖ヲ

觸レタ移リ香デアルカ。春ハ昔ノ春テナクトモ。月ハ昔モ此ノ梅ニ宿リシ月デアラウニヨツテ月ニ問テ見ヤウカイ。

土御門内大臣家よ梅香留袖といふ事をよみ侍けるよ

藤原有家朝臣

散りぬれば。よほひばかりを。梅の花。ありとや袖よ。春風のふく。

〔解〕土御門内大臣ハ。通親公のよと云。有家ハ。略傳上よあり。當時歌道に秀たる人之。此の歌ハ。一段落之。

一首の意ハサテくナカシイ風デアルヨ。梅ノ花ハ皆吹き散ラシテ。香バカリ我袖ニ止リテアルナ。ナホ梅ノ花ノ残りテ有リト思フニヤ。今ハ我ガ袖ヲ春風ガ吹クデアル。

題まらず

皇太后宮大夫俊成女

うらみずや。うき世を花の。いとひつ。とふ風あらは。と思ひけるをば。

〔解〕俊成卿女ハ。略傳上にあり。女子にしては當時優れたる歌人之。此の集中にも歌尤も多し○うらみずやは。反語之。恨ニスアラレヤウカイ。甚恨メシイ

と。此の句にて段落之。下の句より上にかへりて解する例の歌之。此の歌も一段落之。

一首の意は。甚恨メシイコデアルヨ。我ハ花ヲ愛シテアルニ。花ハ憂世ヲ厭ヒテ。誘フ風ガアラバ散ラント思テ待テ居ルハマア。

落花といふ事を

藤原雅經

花こそふ。なごりを雲に。吹とめて。まはしハ句へ。「そるのやま風。」

〔解〕雅經ハ。略傳上にあり。定家卿の門中第一の歌人之。〇句へハ。句ハせ之。ハせを約してへ」といふ之此の歌ハ二段落之。

一首の意ハ。ア、風ガ花ヲ吹誘ヒテ伴ヒ行クガ。願クハ其ノ餘波ヲ大空ノ雲ノ所ニ吹止メテ。暫時花ノ梢ノ如ク句ハシテクレヨ。春ノ山風ヨ。

題を知らず

藤原家隆朝臣

いかよせん。こぬよあまたの。時鳥。まだしとおもへハ。むらさめのをら。

〔解〕こは待時鳥などいふ題の歌なるべし。家隆ハ。上よ云へり。此の歌ハ。二段落之。

一首の意ハ。何トシヤウ。何程待テモ鳴テ來ヌ夜ガ多クナツタ時鳥ナレバ。イツソ待マイト思ヘハ。今夜ハ村雨ガ降りテ時鳥ノ鳴テ來サウナ空デアル。

五十首歌奉し時

藤原定家朝臣

さみだれの。月ハつれなき。み山よりひとりもいづる。時鳥かな。

〔解〕定家ハ。上よいへり。此の歌ハ。一段落之。

一首の意ハ。今宵モ五月雨ガ降ル故ニ待テドモ月ハ出サウモナイ。ソノ山ヨリ時鳥ハカリ獨リ鳴テ出テ來タデヤナア。是デ月ガアラバナホヨカラウニ。

題を知らず

皇太后宮大夫俊成女

たちはなの。句ふあたりの。うたゝねハ。夢もむかしの袖のかぞする。

〔解〕こは寐覺橋などいふ題の歌なるべし。俊成女ハ。上よいへり。此の歌も。一段落之。

一首の意ハ。サテ橋ハ古人モ往事ヲ思ヒ出ダスナド云テアルガ。實ニ橋花ノ軒端ニ咲句フ家ノ假寐ハ。夢ニモ昔ノ人ノ袖ノ香ガスルカト思ハルハ。ワイ。

題を知らず

前右大將頼朝

道すがら。富士のけふりも。わかさりま。ばるノまもなき。空のけしきだ。

〔解〕こは京より鎌倉よ下る途中などの歌なるべし。頼朝ハ。左馬頭義朝の子。歌人ハ。非れどもかやうの名歌もよまれし。○道すがらハ。道残ラズ。俗ヨミチサシウといふこと。此の歌も一段落。

一首の意ハ。富士ノ山ノ煙ノ立ツサマハ如何アラント。道ヤウ注意シテ來タケレド。ドレガ煙ヤラ分ラナカツタアヤニク雨ガフリテ。晴間モナイ空ノ景色ユエ残念ナルコトデアル。

此の他も新勅撰集より續後拾遺集に至る。八代の勅撰集あれども今は略しつ。以上ハ。紀元一千八百六十餘年の頃より。同一千九百九十餘年の頃に至る。凡百三十餘年間の本邦文學の概略なり。

◎第九編 ○足利時代の文學

足利時代の文學とハ。後醍醐天皇の再祚建武の頃紀元一千九百九十餘年より。後陽成天皇の慶長の頃紀元二千二百七十餘年に至る十一朝。凡二百八十餘年間の文學の概略をいふなり。然して此時代の。初めハ。南北朝の戦争あり。中間に應仁の亂あり。終りに元龜天正の擾亂ありて。其間太平無事なりし日ハ。幾許もあらざりしかば。文學の振ハざりしハ。慥しむに足らざるなり。概して云ハ。漢學ハ。僧侶の間ヨのみ行ハレ。國學ハ。神官等の上ヨ残り。詠歌ハ。公家の玩弄物の如くなれりともいふべし。然して尤も惜むべきハ。應仁の兵燹よかりて。朝廷歴世の記録及び諸家の珍書どもの焼失せし是なり。後花園天皇の初年に新續古今和歌集の勅撰ありしが。これ勅撰集の終尾にて。此後永く其例の絶えしも又惜むべし。

記録珍書の焼失

當時の學者小傳

二條家

さて當時文學を以て世ヨ知られたる人々ハ。宗長親王後醍醐天皇第八の皇子。村上天皇の皇弟。御母ハ藤原爲子。權大納言爲世の女なり。秀才として歌を能くす。中務卿に任ぜられ。元中二年八月十日薨す。年七十四。藤原爲定大納言爲世の孫。爲道の子。伯父爲藤養子と爲す。從三位權正三位權中納言たり。博學英才として尤も歌を能くす。後醍醐帝北條氏を謀る事泄れて爲明六波羅に囚はる。諸問すれども答はず。是より於て六波羅の裏庭前に炭火を設け。爲明をして之を添らしむ。爲明神色常の如く猛火を陥み。鏡を呼て一首を詠ハ。思ひきや我き島の道ならでう。世の事をさるべし。六波羅の吏常葉範貞の歌詠を。元應二年十月廿七日薨す。年七十。源親房具平親王の後胤。權大納言師直の子。正二位右衛門督。見て終。詰問を止めける。貞治三年十月廿七日薨す。年七十。

北畠准后

千種家

花山院家

松雲散人  
明魏

和歌四天  
王

二條家

一條禪問

飛鳥井  
下冷泉

三宮に准せらる。家を北畠と稱しければ。世に北畠准后。藤原藤房。宣房の長子。博學才智あり。正二位權大納言に至る。一夜朝より退き。いばけける。正平九年四月十七日薨す。年六十二。藤原藤房。宣房の長子。博學才智あり。正二位權大納言に至る。一夜朝より退き。いばけける。正平九年四月十七日薨す。年六十二。

藤原公賢。博學にして著書多し。南北兩朝に仕へ。累進して従一位太政大臣。源忠顯。中納言有忠の子。千種家と稱す。文武の才あり。藤原公賢。博學にして著書多し。南北兩朝に仕へ。累進して従一位太政大臣。源忠顯。中納言有忠の子。千種家と稱す。文武の才あり。

藤原師賢。正二位大納言に拜せられ。家を花山院と號す。兼通にして文武に達せり。筑後國の日向。菊地武時。隆盛の子。戦て卒す。藤原師賢。正二位大納言に拜せられ。家を花山院と號す。兼通にして文武に達せり。筑後國の日向。菊地武時。隆盛の子。戦て卒す。

藤原師基。二條相國兼基の子。文才あり。且戦功多し。従一位左大臣。藤原長親。大納言師賢の孫。内大臣家賢の子。衛中將を贈らる。藤原師基。二條相國兼基の子。文才あり。且戦功多し。従一位左大臣。藤原長親。大納言師賢の孫。内大臣家賢の子。衛中將を贈らる。

藤原師賢。正二位大納言に拜せられ。家を花山院と號す。兼通にして文武に達せり。筑後國の日向。菊地武時。隆盛の子。戦て卒す。藤原師賢。正二位大納言に拜せられ。家を花山院と號す。兼通にして文武に達せり。筑後國の日向。菊地武時。隆盛の子。戦て卒す。

細川頼之。初名彌九郎。從四位下右馬頭より武藏守に轉。今川貞世。範國の子。足利氏の族にして義隆。隆盛の邊に住し著書多し。新羅散人明魏といふ。天授二年六月十二日薨す。年四十三。今川貞世。範國の子。足利氏の族にして義隆。隆盛の邊に住し著書多し。新羅散人明魏といふ。天授二年六月十二日薨す。年四十三。

細川頼之。初名彌九郎。從四位下右馬頭より武藏守に轉。今川貞世。範國の子。足利氏の族にして義隆。隆盛の邊に住し著書多し。新羅散人明魏といふ。天授二年六月十二日薨す。年四十三。今川貞世。範國の子。足利氏の族にして義隆。隆盛の邊に住し著書多し。新羅散人明魏といふ。天授二年六月十二日薨す。年四十三。

會兼好。卜部兼顯の子。博學優才にして後宇多上皇の寵を得たり。左衛門佐たりしが。上皇崩御の後。通元三年三月二日薨す。年詳ならず。會兼好。卜部兼顯の子。博學優才にして後宇多上皇の寵を得たり。左衛門佐たりしが。上皇崩御の後。通元三年三月二日薨す。年詳ならず。

會慶運。淨辨の子。云々。和歌を能くし。四。藤原持基。滿基の子。才學あり。兼好同時の人。和漢の學に通じ。書及び歌に巧なり。家集を草庵集といふ。二條家の歌風を學ぶ人は甚だ愛讀する。集之。會慶運。淨辨の子。云々。和歌を能くし。四。藤原持基。滿基の子。才學あり。兼好同時の人。和漢の學に通じ。書及び歌に巧なり。家集を草庵集といふ。二條家の歌風を學ぶ人は甚だ愛讀する。集之。

藤原爲遠。大納言爲定の子。累進して從三位中納言に至り。藤原爲重。二條爲冬の子。大政大臣となり。後攝政關白に拜せらる。藤原爲遠。大納言爲定の子。累進して從三位中納言に至り。藤原爲重。二條爲冬の子。大政大臣となり。後攝政關白に拜せらる。

藤原兼良。博學俊才にして和漢文詩歌を巧にせり。家を一條と號し累進して從一位中納言たり。藤原兼良。博學俊才にして和漢文詩歌を巧にせり。家を一條と號し累進して從一位中納言たり。

藤原雅良。從三位權中納言に累進し。藤原雅良。從三位權中納言に累進し。藤原雅良。從三位權中納言に累進し。

子冬良。父に繼て才學あり。關白に拜せられ。妙花寺と號す。藤原雅良。從三位權中納言に累進し。藤原雅良。從三位權中納言に累進し。藤原雅良。從三位權中納言に累進し。

子雅世。正三位權中納言に累進し。藤原持爲。爲尹の三子。下冷泉家の始祖。從五位上。子雅世。正三位權中納言に累進し。藤原持爲。爲尹の三子。下冷泉家の始祖。從五位上。

源義滿。小字は春王。義隆の長子。年十才父薨して職を嗣ぎ。征夷大將軍に拜せられ。源義滿。小字は春王。義隆の長子。年十才父薨して職を嗣ぎ。征夷大將軍に拜せられ。

源義教。實は義滿の第二子。才學あり。初正たり。後通俗して義宣といふ。義宣の後を嗣ぎ。從一位征夷大將軍に拜せられ。室町。源義教。實は義滿の第二子。才學あり。初正たり。後通俗して義宣といふ。義宣の後を嗣ぎ。從一位征夷大將軍に拜せられ。室町。

子義政。初名は義成。義教の第二子。兄義勝早の第に移り。名を義教と改む。嘉吉元年六月廿四日薨す。四十八。法名尊慶院と稱す。子義政。初名は義成。義教の第二子。兄義勝早の第に移り。名を義教と改む。嘉吉元年六月廿四日薨す。四十八。法名尊慶院と稱す。

子義政。初名は義成。義教の第二子。兄義勝早の第に移り。名を義教と改む。嘉吉元年六月廿四日薨す。四十八。法名尊慶院と稱す。子義政。初名は義成。義教の第二子。兄義勝早の第に移り。名を義教と改む。嘉吉元年六月廿四日薨す。四十八。法名尊慶院と稱す。

長尾景久。上家の重臣。才學あり。世に盛ならしめんとす。上杉憲實。鎌倉管領足利持氏の執事なり。性學を好み。實を足利學校に授け。大日卒す。年。長尾景久。上家の重臣。才學あり。世に盛ならしめんとす。上杉憲實。鎌倉管領足利持氏の執事なり。性學を好み。實を足利學校に授け。大日卒す。年。

平常縁。東式部少輔胤綱の子。祖父東六郎。中院爲家。卿の門人となり。歌道を考へたり。子孫皆世々の勳業の作。平常縁。東式部少輔胤綱の子。祖父東六郎。中院爲家。卿の門人となり。歌道を考へたり。子孫皆世々の勳業の作。

藤原雅親。飛鳥井と號す。雅世の長子。從三位中納言に至り。尤も歌に能く。藤原雅親。飛鳥井と號す。雅世の長子。從三位中納言に至り。尤も歌に能く。

藤原實隆。家を三條院と號す。正二位内大臣に累進す。博學。藤原實隆。家を三條院と號す。正二位内大臣に累進す。博學。

子雅俊。從三位中納言。藤原實隆の孫。子雅俊。從三位中納言。藤原實隆の孫。

太田持資。又資長といふ。道灌と號す。伊豆守。備中守等。任せられ。尤も。太田持資。又資長といふ。道灌と號す。伊豆守。備中守等。任せられ。尤も。

藤原公條。實隆の子。正二位右大臣に至り。永祿六年十二月二日。藤原公條。實隆の子。正二位右大臣に至り。永祿六年十二月二日。

源義尙。義政の子。從二位内大臣に累進す。源義尙。義政の子。從二位内大臣に累進す。

子實澄。從二位大納言。源義尙の孫。子實澄。從二位大納言。源義尙の孫。

會宗祇。東常陸の門人。文應二年七月三十日。會宗祇。東常陸の門人。文應二年七月三十日。

會宗長。宗祇の門人。永正七年。會宗長。宗祇の門人。永正七年。

會宗碩。宗祇の門人。會宗碩。宗祇の門人。

藤原爲純。下冷泉と稱す。藤原爲純。下冷泉と稱す。

中院家也足軒

東光院九條禪問

三位法印

三玉集

り。天正六年四月一日播州大江元就大膳大夫たり。博學にして文才あり。源通勝中院を稱す。從二位大納言たり。後丹後に遷り。於て歿す。年四十九。源通勝中院を稱す。從二位大納言たり。後丹後に遷り。於て歿す。年四十九。源通勝中院を稱す。從二位大納言たり。後丹後に遷り。於て歿す。年四十九。

廿五日歿す。藤原植通從一位關白に累進し。致山を號し。雍樂して東光院を稱す。博く和漢の學。大内義隆美與の子。天文五年五月十三日歿す。年五十三。山本晴幸武田信玄の將也。博學にして特に兵法に通ず。俗稱勘分入道して。永祿四年九月十日川中島にて歿す。年五十八。直江兼

續上杉謙信の將也。博識にして學才あり。北條氏康氏綱の子。才學あり。左京大夫たり。子氏政左京大夫たり。才學ありて。詠歌を能くす。天正十八年七月十一日歿す。年五十六。里村絶巴和漢の學に小田原に於て自。毛利氏の子。漢學を愛し。隱居して。備後三原城に孔廟を新築して之を。年六十六。里村絶巴和漢の學に

たり。慶長七年四月十日歿す。年七十九。細川藤孝院實澄の門に入り。和學を嗜み。詠歌に妙也。慶長十五年八月廿日歿す。年七十七。等なり。此の

うち宗良親王は。新葉和歌集二十を撰し。二條爲定は。新千載和歌集二十同爲明は新拾遺和歌集二十を撰す。北畠親房は。神皇正統記六元々集八職原抄二其の他にも著書あり。藤原公賢は。園太曆三十除目抄一を著し。今川了俊は。言塵集七僧玄惠は。庭訓往來二を著し。僧兼好は。徒然草二を筆し。僧頓阿は。井蛙抄六を著す。藤原爲遠は。新後拾遺和歌集二十を撰し。一條兼良は。其著甚多し。樵談治要十文明一統誌一。公事根源一。東齋隨筆一。花鳥餘情二十歌林良材集二。其他數種あり。子冬良も。増鏡十を著せり。飛鳥井雅世は。新續古今和歌集二十を撰す。冷泉政爲は。碧玉集六といふ家集あり。然して當時後柏原院の。柏玉集十。西三條實澄の。雪玉集十八を合せて四十是を三玉集と

連歌宗匠

山口本

墨本嚙矢

當時學者の風俗

號し。甚だ世に愛せられたり。平常縁は。新古今集抄四を著し。僧正徹は。正徹物語二を作れり。西三條實隆は。源氏明星抄二十を著し。子公條も。源氏細流抄二十を著す。僧宗祇は。連歌を以て其名高し。新撰菟玖波集二十其他著述あり。宗長。宗碩。肖伯。皆連歌の宗匠なり。宗碩は。藻鹽草二十肖伯は。源氏弄花抄七伊勢物語肖聞抄三を著せり。中院通勝は。岷江入楚五十を著し。九條植通は。源氏孟津抄二十を著し。里村紹巴も。源氏の抄二十を著せり。世に紹巴抄といふ是なり。細川幽齋は。詠歌大概抄二其他著あり。然して上は舉し人々は。大かた和漢の學を兼たる人多し。

因云。當時大内義隆は。性學を好み。本邦及び漢籍を蒐集せんとして。本邦の紙を明國より舶送し書冊を製せしめたり。是を山口本といふ。又當時鎌倉慈恩寺の住職は永貞といふ僧あり。京師五山五山といふ。天龍寺。相國寺。建仁寺。東福寺。万壽寺。の僧の詩を彫りて始めて墨本石本又打本といふ。石鐫の事。を製す。是本邦よて墨本を作りし嚙矢なり。

さて此の時代は於ては。學者中に僧徒の多きは如何なる故ぞといふ。當時博學碩儒といはるゝほどの者も。多くの僧徒より出たるがゆるなり。即ち京師五山の

僧徒等の如き。大概皆學者なり。此所は大なる故に常人よりも學才ありて儒門を張らんとする者なり。皆薙髮したるなり。此は是れ當時一般の風俗にて。是より後も徳川氏の初世元祿の頃に至るまで。此の習慣を脱れざりき。よりて假令博學なりとも俗躰よてハ世人目して學者とせず。隨て尊敬せられざるがゆゑ。已れ學者たらんとするものは。強て薙髮するもの甚多かりしハ。實は捧腹の至りなり。

源語の註釋

然してまた當時尤も世も行はれて。人々愛讀せられたりし書ハ。紫式部が著ハされし源氏物語なり。當時の有様をみるよ。まづ源氏物語を一讀せざるくらゐの學者よてハ。人と歌文を談話する事能ハざるほどのありさまなりき。故に當時より至りて源語註釋の書類の多く出來たる事ハ。また前後より其例なきを見るべし。又當時詠歌は秀たる人々ハ。皇族ハ。宗長親王後醍醐帝の皇子。尊胤法親王後伏見帝の皇子。尊道法親王同。永助法親王後光嚴院の御子。堯仁法親王同。榮仁親王後光嚴院の御子。將軍家ハ。尊氏。義詮。義滿。義持。義政。義尙。僧徒ハ。兼好。頓阿。淨辨。慶運。一休。宗祇。宗長。宗碩。肖柏。公卿其他の人々ハ。二條爲定。同爲明。今川貞世。細川頼之。二條爲遠。同爲重。一條兼長。同冬良。飛鳥井雅縁。同雅世。冷泉持爲。同政爲。西三條實隆。同公條。同實澄。飛鳥井雅親。同雅

秘傳口訣

俊。太田持資。冷泉爲純。中院通勝。九條植通。北條氏康。同氏政。細川藤孝等なり。然して此の頃の歌の古人ハ及ばざるハ他なし。是此の頃の歌ハ。やうく感情を述るを次とし。器機的ハ言葉を叙するを先とする事となりて。大にその區域を狭はり。秘傳口訣といふことの専ら行はれしがゆゑなり。さて此の習慣を一變せられしハ。實に次編に述たるが如く。契沖。春滿。眞淵。宣長等の力なり。そは次編を参考して知るべし。

當時の著書

當時の著書のうちに見るべきものハ。太平記四十卷。花園帝の文保二年より。後光嚴院の貞治六年まで。凡五十年間のこと記す。作者ハ。後醍醐帝の侍讀たりし玄惠法師なりと云傳へたれど。近世に至りて小島法師なりといふ説あり。小島法師ハ。系圖詳ならず。増鏡十は水鏡大鏡を加へて世に三鏡と稱す。後鳥羽帝より。後醍醐帝に至る。凡百五十年間の天皇の傳記なり。作者ハ。一條禪閣兼良公の子藤原朝臣冬良なり。神皇正統記六卷。開闢より第九十七代後村上天皇に至る。天皇の略傳なれど。其の間ハ自説を附して。尊王愛國の衷情を著されたり。實ハ南朝柱石の臣准后從一位源朝臣親房公の著ハ。耻ざる書なり。其の文章平坦にして。其の議論雄壯なり。但



散文跡  
紀行跡

し餘りに佛説を引きたるハ。少しく煩はしきやうなれども。世人ことごとく佛法を信じたる當時なれば。亦止を得ざる方便といふべし。また散文跡として妙巧なるハ。兼好法師の徒然草<sup>二</sup>の右に出るものなし。紀行跡のものハ。頓阿法師の高野日記<sup>一</sup>一條兼良公の藤川の記<sup>二</sup>北條氏康の武藏野紀行<sup>一</sup>等あれど。左よ正統記。徒然草。藤川の記を示すべし。

歌集も勅撰には。北朝光明院の貞和年中に。花園上皇が御自撰の風雅和歌集<sup>二十</sup>を先として。上に擧たる新千載。新拾遺。新後拾遺。新續古今の五代集。并に新葉集等あれど。今新續古今集の歌を擧て。其の他は省きつ。

神皇正統記

北畠准后親房<sup>傳の上</sup>

大日本ハ神國かり。天祖はじめて基をひらき。日神をかく統を傳へ給ふ。我國のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此ゆゑに神國といふなり。神代には豊葦原の千五百秋の瑞穂國といふ。天地開闢のはじめより此名あり。天祖國常立尊。陽神陰神にさづけ給ひし勅に聞えたり。天照大神。天孫尊にゆづりましくしにも此名あれば。根本の號なりとは知りぬべし。<sup>下</sup>

〔解〕正統記は。六卷あり。後村上天皇の興國中に。北畠親房公の筆する所なり。實に當時天下の形勢。人心の向背定らず。昨は南朝に仕へ。今日は北朝に従ふもの多く。その大義名分を知らざるを憤りて。此の書を著されしなり。公は具平親王の後裔にして。後醍醐後村上二帝の朝に當りて。父子身を苦しめて國家に盡したりしは歴史に詳之。公は初め玄惠法師に付て學びしが。和漢の學に通じ早くより世に重ぜられたり。略傳上にあり。○天祖は。國常立尊のと之○日神は。天照大神のと之○異朝は。凡ての外國をさしていへる之○豊葦原云々の。豊ハ美稱之。葦の茂りて廣き所を葦原といふ之。千五百秋ハ。長き秋之。瑞穂ハ。威稜の秀るを葦の穂の榮ゆるよかけていへる之。是れ日本國の古名よして。國をほめて云へる意之○陽神陰神ハ。伊弉諾伊弉册の二神之○天孫尊ハ。彥火瓊杵尊之。天照大神の御孫なれば天孫とかへれし之○根本の號は。最初よりの名なりと云ふ意之

人皇第一代。神日本磐余彥天皇と申す。後に神武と名つけ奉る。地神鸕鷀草葺不合尊第四の尊。御母王依姬。海神小童の第二の女なり。伊弉諾尊よハ六世。大日靈尊よ

ハ五世の天孫よまします。神日本磐余彦と申ハ。神代よりのやまとことばなり。神武ハ。中古となりて。もろこしの詞よごためたてまつる御名なり。又此御代より代ごとよ宮所をうつされしかバ。其所を名つけて御名とす。此天皇を檀原セツハラの宮とも申是なり。下略

〔解〕人皇云々ハ。神武以前の帝王を神皇と稱し。神武以後を人皇と稱せる著者の意よりかくいふ之。○地神ハ。天孫なれど此國は降臨して治め玉ひしよりかく云之。嘗不合尊ハ。地神の第五代目之。○小童ハ。神名之。此の小童の字ハ借字之。○大日靈尊ハ。天照大神の御名之。○やまとことばハ。本邦よ古くより云傳へし國語といふ意之。○中古となりて云々ハ。桓武天皇の朝に。淡海御船フナノミが勅を奉じて先々の天皇の御謚を撰し奉しをいふ之。即ち神武綏靖といふが如き漢語の御謚是之。○宮所を云々ハ。當時の俗一代ごとに宮殿を更スガフて移り住玉ひし之。即ち綏靖ハ高丘宮タカノカミノミヤに。安寧ハ浮穴宮ウキアナノミヤに住玉ひしが如し。○檀原宮ハ。大和畝火ウヂヒにありし之。今大和國高市郡なり。

徒然草

徒然草

吉田兼好兼好は上に委し

つれづれなるまゝに。ひふらし硯イシよむかひて。心ようつりゆくよしなしことぞ。そこはがとなくかまつくれば。あやしうこそものくるほしけれ。いぞや此世ようまられてハ。ねがはしかるべきこととおほかめれ。みかどの御くらあハ。いともかしこし。竹のそのふのすゑ葉まで。人間のたねならぬぞやんことなき。この人の御ありさまハ。さらなり。たゞ人もとねりなごたまハ。るまはゆしと見ゆ。その子。うまごまではばふれたれど。なほなまめかし。それよりしもうかたハ。ほとよつけつゝ時にあひ。したりがほなるも。みづからいみしと思ふらめど。いとくちざし。法師はかりうらやましからぬものハ。あらじ。人よハ。木のはしのやうに思ハるゝよと。清少納言がかけるも。げよなることぞかし。いまほひまうにのゝしりたるよつけていみしと見えす。増賀ひじりのいひけんやうに。名聞くるしく佛の御さしへにたがふらんとぞおほゆる。ひたぶるの世すて人ハ。ながくあらまほしきかたもありなん。人ハ。かたちありさまのすられたらんこそ。あらまほしかるべけれ。物うちいひたるまゝに。くからず。あはきやうありて。詞おほからぬこそあかずむかばまほしけれ。めでたしとみる人の心おとりせらるゝ本性みえんこそ。くち

さしかるべけれ。品かたちこそうまれつきたらめ。心などか賢より賢よりうづ  
さばうづらざらん。かたちこそろさまよき人も。さえなくなりぬればしなくたり。  
かほよくさけなる人にも立まじりて。かけずけおさるゝこそはいなきわさなれ。」  
ありたきこといふことしき文の道。作文。和歌。管絃のみち。また有職。公事のかた  
人の鏡ならんこそいみしかるべけれ。手などつたなからずはしりかき。聲をか  
くて拍子とり。いたましようするものから。けこならぬこそそのこはよけれ。」

〔解〕徒然草ハ。一卷あり。題號の意ハ。本文よつれくゝなるまゝにどあるをど  
りて付たる之。作者ハ。吉田兼好なり。略傳ハ上よいへり。兼好が歌ハ。風雅集。  
新千載集。新拾遺集。新後拾遺集。新續古今集等の勅撰集よ多く見えたり。舊註  
よ兼好ハ。修學院といふよ籠り居たるよし。又横川よ住めりともあり。好みて  
老莊をよめりとぞ。さてこの徒然草をかゝれしハ。遁世の後の事なり。○つれ  
くゝハ。俗よマイクツといふと之。○心にうづりゆくハ。心に感じたる事物の  
移り來ると之。俗よ心ニ浮フोट又思ヒ出ス事などの意之。○よしなじこと  
ハ。所由もなき事之。○そこはかどハ。ばかハ確之。其の事と確と定むるとなき

之。○あやしうハ。性之。○ものくるほしけれハ。物癡之。何事よても我が氣よ入  
りたるとよ心がはまりてする時ハ。他人より見れば狂氣おみて見ゆると之。  
蝶などの花よ狂ふといふも同意之。○いでやハ。發語之。俗よイヤマウといふ  
と之。○ねがはしかるべきハ。願ハシクアルべき之。○おはかめれハ。多くある  
と見ゆるの義之。○いともかしこしハ。甚恐多き之。○竹のそのふのす葉ハ。  
親王を竹園といふゆゑに。す葉とハ。皇族に至るまゝといふ意之。○人間の  
たねならぬハ。本邦の帝王ハ掛まくも恐き事なれども。天照大神以來皇統連  
綿として。今日よ至るを以て。上古より天皇を神と稱へ來れる之。万葉集よも  
現神など書けり。○やんことなきハ。無止事之。俗よモダシガタイ。又無據など  
いふ意之。さて是を移して高貴といふ意に用ゐる例といなれる之。○十の人  
ハ。攝政關白と云之。又一所ともいふ之。○よらなりハ。あらためていふもあた  
らしきことといふ意よて。俗よ申マテモナイと云之。○たゞ人ハ。タゞウト  
とよむべし。是ハ位よつかぬ人をいふとなれども。こゝハ攝政關白の外の人  
をいふ之。○とぬりなど云々ハ。舍人の官よよりて人々よ賜ハる定數あり。所

謂隨身のとこ。弘安の禮節に。大臣大將ハ八人。納言參議ハ六人。中將諸衛の督  
 四人。少將諸衛の佐二人とあるが如し。きはハ分際之〇ゆしハ。俗ヨエライ  
 と云ヨ同じ優<sup>すぐ</sup>たると云〇うまごハ。孫之〇はふれハ。場所を放るゝと云。あふ  
 れと同じ。俗ヨ零落<sup>ちりぢり</sup>など云と同意之。日本紀に益とあり〇なまめかしハ。表面  
 の美はしきと云〇まもつかたハ。下方之つハ添て云詞之〇ほとよつけつハ  
 時よあひハ。ほとハ分限之。身の分限ヨ應じて。時勢ヨ合ひて登用せらるゝと  
 云〇またりがはハ。爲テヤツタといふ顔つき之。得意顔のと云〇しみハ。エ  
 ライ之〇いとくちをしいハ。甚殘念之。又ハがくしなどといふ意之〇法師はか  
 りハ。法師ハ僧のと云。はかりハホド之〇木のはしハ。木片之。木の切れの捨物  
 のと云〇清少納言ハ。清原元輔の女之。上の枕草子の條ヨ委し。枕草子の中に。  
 思はん子をほうしになしたらんこそ心くるしけれ。さるハいとたのもしき  
 わきを。たゞ木のはしなどのやうに思へるこそいとほしけれ。いとせば  
 たり〇けよと云ることぞかしハ。實に然るとであるとなり〇さきはひまうに  
 のノまりハ。まうハ字音之猛之。のノしりの聲高にものゝと云〇しみしと

ハハ。エライトハ之〇増賀ひじりハ。人名之。宇治拾遺物語ヨ多武の峯に増賀  
 上人とてたふときひじりおはしけり。とある是之〇名聞くるしハ。名の世  
 間へ聞ゆるのが苦しいと云〇ひたふるのよすてびとハ。一向に遁世したる  
 人のと云〇なかハ。なからなからと。半分ハといふ義之〇あらまほしき  
 かたもありなんハ。然やうに有りたと思ふかたもあらうといふと云〇か  
 たちありさまハ。容貌之〇すくれたらんハ。優てあらん之〇あらまほしかる  
 べけれハ。ありたいと思ふやうすである之〇物うちひたると。うちハ添  
 言。ものさしひてある之。口をきくと云〇きよくからずば。聞悪くならん  
 〇あいきやうハ。字音之。愛敬之。柔和よして禮ある形之〇あかすむかはまほ  
 しけれハ。飽ないで其の人といつまでも對話して居タイ之〇めでたしハ。愛  
 甚之〇こころおどりハ。思ひしよりの見下けらるゝ心持がする之〇本性  
 ハ。性質之〇品かたちハ。人品容儀之〇うまれつきたらんハ。生付てあると見  
 ゆると云〇なごかハ。俗ヨドウシテカ之〇賢より賢に云々ハ。賢<sup>たか</sup>とて其の上ヨ  
 も一層賢き方に移さうなら移らぬ事ハなりと云〇こころをまハ。心だての

と云○まをの。學問の才智○まをなり。人品の下ると云○かほの。けの。顔の悪氣なる人○かけずの。掛竝も能はず○けおとる。氣押さる。勢は壓倒さると云○ほいなまの。本意なき○わさの。事○まととしむ。虚飾はあらぬ實用的といふと云○文の道。學問の道○管絃の道。管ハ笛箏葉の類。絃は琴琵琶の類。音樂の道のと云○有職の。いふそくとよむべし。故實をよく辨へ知れると云○公事の。禁中の諸務をいふ○人の鏡。人の模範のと云○手などつたなからずの。手を拙からず○はしりかまの。達者よかくと云○聲をかしくの。聲おもしるく○柏子とりハ。笏柏子とて笏を以て膝を打て柏子をとり今様など謠ふと云○いたましうするものからぬ。痛むまをするものながら。遠慮して辭退すると云○けこならぬの。下品ならぬ。上云へる事共皆下品よての見苦しく聞苦しとの意。舊説はけこの酒を飲まぬ下戸のことといへど。此所の前後の文を味ひみみるに。突然は飲酒のとをいふも如何之。又下文に酒を戒めたる段も三四所みゆるを。此所のみ下戸ならぬをよしと云はんも不都合之。故

よ下戸の説ハ取らず○まのこはよけれの。まのこの男之。是ハ専ら男の上をいへる故よ男のよしと斷言せたる。

藤川の記

藤川の記

藤原兼良 藤原兼良

胡蝶の夢のうち。百年のたのしみをむさぼり。蝸牛の角のうへ。二國のあらそひを論ずる。よしといひあしといひ。たゞかりそめの事ぞかし。とよつけかくよつけ。おぼし心なきやますこそ思なれ。應仁のはじめ世のみたれしよりこのかた。花の都のふることをば。あらぬ月日のめぐる思ひをなし。奈良の葉の名よおふやとりよし。六かへりの春秋をむかへつ。うきふしきけき吳竹の。はしにたりぬる身をうれへ。こひぢよ生るあやめふさの。葉をのみこふる頃よもなりぬれば。山のひがしみの。國よ。むさし野の草のゆかりをかこつべきゆゑあるのみならず。高砂の松のまゐる人なきよし。もあらねば。五月雨の空のかきくもらぬさきよと。みのしるころも思ひたつことありけり。

〔解〕此の記ハ。一條兼良公が。應仁の亂後美濃國よ下向せらるゝ時の紀行なり。兼良公の略傳ハ上云へり○胡蝶の夢云々の。支那の莊周の故事○蝸牛の

角云々も。莊子のうちよある故事之。莊子よ蝸牛の角上よ觸氏蠻氏の二國ありて争ひし事あり○おなじ心をなやます。同じく心痛する之○應仁のはじめの。後土御門天皇の應仁元年。細川勝元と山名宗全と兵を東西よ構へて私闘よ及びしより天下大よ亂れたるをいふ之○花の都のふるさとの。兼良公の京都の舊邸之○あらぬ月日ハ。今までの如く太平無事の月日ならぬをいふ之○奈良の葉の云々ハ。兼良公亂を避て六年間大和の奈良よ住居したるを云之○はしよなりぬる身ハ。古今集雜下よ。木よもあらず草よもあらず竹のよのはしよ我身のなりぬべら也。とあるを引ていふ之。はしよ。ものノ中間よて俗よドチラニモ付ヌ邪魔モノ、意之○こひぢハ。泥中之○あやめらさハ。菖蒲之○葉をのみこふる云々ハ。五月五日家毎よ菖蒲の葉を軒端よ嗜く故よいふ之○山のひかしハ。東山道之。美濃國ハ。東山道よ組せり○むさし野の草ハ。彼の紫草之。紫をゆかりの色といふよりして。縁故ある人を尋ねて下りしといふ意之○高砂の云々ハ。細流抄よある。いかよしてありと知られど高砂の松のおもはん事もはづかし。といふ意をとりて高砂の松ハ久しき

ものなるが。その松の如く舊知の人もあれはと之○みのしろころもハ。簀代衣よて。雨天のをり簀の代りに着る衣之。旅行ハハ。必用なる故に簀代衣といひて。その衣の縁語にて思ひたつとはいはれし之。  
さて次よ此の時代の詠歌を擧ぐべきなれども。今新續古今集のうちより數首を左よ擧て。其他の集ハ省きつ。

新續古今和歌集

新續古今和歌集

〔解〕此の集ハ。二十卷歌數二千餘首あり。後花園帝の永享年中勅を奉して。飛

鳥井贈大納言雅世卿の撰之。

たつ春の心をよみ侍ける

權中納言雅縁

春きぬと。いふより雪の。ふる年を。よもにへだて。たつ霞かな。

〔解〕雅縁ハ。略傳上よあり○雅世の父之○ふる年は。去年のとと。雪は降るもの故にかくいひなしたる之○よもハ。四方之。霞ハ物を立隔つる故よかくいへる之此の歌ハ。一段落之。  
一首の意ハ。明らかし。

立春の氷といへるときをよませ給うける 後小松院御製

志賀の浦やよせてかへらぬ浪のまに氷うちとけ春のきよけり。

〔解〕給うけるは給ひけるの意。當時の語格は此の類の誤あり。後小松院ハ第九十九代の天皇諱ハ幹仁と申す。後圓融天皇の皇子之〇志賀の浦や。此のやハ歎辭之。よといふは同じ。志賀浦ハ近江之〇よせてかへらぬとハ浪ハうちよせても立かへる物なれども。今ハ氷りてある故よかへらぬ浪といへる之此の歌も一段落之。

一首の意ハ。志賀ノ浦ヨ。冬ノ寒サニテ閉ヂ氷リテ寄セ返ル浪モ見エザリシガ。ソノ氷ノ打解ケタ浪間ニ今ハ春ガ來タワイ。

貞和二年百首歌奉けるに 民部卿爲明

春きても梅の立枝ハ。風さえて花もちとほよ。うくひすのなく。

〔解〕貞和ハ。北朝光明帝の年號之。爲明ハ。略傳上ヨあり〇梅の立枝ハ。たゞ梅の枝のと之〇風さえてハ。風ハ汗て之。此の歌も。一段落之。一首の意ハ明らか之。

延文二年百首歌奉ける時 權中納言爲重

雪もきえ。こほりもとけて。河上の。こせの春野ハ。わか菜つむなり。

〔解〕延文ハ。北朝後光嚴帝の年號之。爲重ハ。略傳上に委し。同族爲重卿の薨後ヨ。卿ヨ代りて。新後拾遺和歌集を撰み繼ぎし人之〇河上のハ。戸毛川之。葛上郡ヨあり〇こせハ。巨勢よて地名之。此の歌も。一段落之。一首の意ハ明らか之。

百首歌奉し時 權中納言雅世

はつかなる野へのみどりハ。見えてけり。春の日數をつまぬ若菜ハ。

〔解〕雅世ハ。略傳上ヨあり。後花園院の永享年中勅を奉して。此の集を撰したる人之〇はつかハ。纒といふは同じ〇つまぬハ。日數を積まぬと。若菜を摘まぬとを兼ていへる之。此の歌も。一段落之。

一首の意ハ。マダ纒カナル野邊ノ緑ノ色ニ見エタワイ。春ノ日數モ積ラナイ。時節ノ早キ若菜ハ。

梅盛開といへる心をよませ給うける 今上御製

色も香も。たゞひのあらじ。咲みちて。軒はよあまる梅のまたかせ。

〔解〕今上の。後花園天皇之。第一百一代の天皇よして諱ハ彦仁と申す。後崇光院の皇子之。此の御製ハ。二段落之。

一首の意ハ。色モ香モ類ガナイワイ。満開ニナリテ軒バニ餘ルマデ薫ル梅ノ下風モ類ガナイワイ。

・ 永和二年百首歌奉ける時

權大納言爲遠

春のきる。衣のぬきは。知らねども。もる影うすき。夜はの月かな。

〔解〕永和ハ。北朝後圓融院の年號之。爲遠ハ。略傳上ヨあり。二條家と號す。後圓融院の論言ヨよりて新後拾遺集を撰定中ヨ薨じたる人之○春のきる衣とい。古今集ヨ。霞を衣ヨ見倣して。春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風よこそみたるべらなれ。と在原行平のよまれしを本歌としてかくいはれし之○ぬきは。横糸のとこ。織物の横糸が薄ければ。地が粗惡になるゆゑ之。此の歌ハ。一段落の格之。

一首の意ハ。春ノ着ル霞ノ衣ヌキヲ薄ミト古人ガ云テアルガ。其ノヌキノ薄

イカ厚イカ知ラヌケレドモ。トニカクニ其ノ霞ヲ漏レテクル影ノ薄イ今夜ノ月デマナア。

春歌中に

法印 淨辨

八十まで。我身世よふる。恨さへ。つもりよけりな。花のしらゆき。

〔解〕淨辨ハ。略傳上ヨあり。和歌を能くせられて四天王の一人之。此の歌ハ。古今集ヨ。小野小町ガ歌ヨ。花の色ハうつりよけりな徒らに我身世よふるなガめせしまに。とあるを本歌としてよまれし之。即ち二段落の格之。

一首の意ハ。我ハ當年八十オノ春ヲ迎ヘテ。思ヘバ八十ト云マデニ齡ガ積タガ。我カ世ヲ經テ志ヲ得ヌ恨マデモ共ニ積タコトデアアルナア。此ノ花ノハカナク散リテ白雪ノヤウニ積ルガ如クデアアルア。

夏歌の中に

寶篋院贈左大臣

このみやと。思ひしかども。時鳥。きくにづけてぞ。音はまたれける。

〔解〕寶篋院ハ。將軍足利義詮之○このみやハ。然バカリカイ之。そのやうに時鳥を待れやうかい。との意之。此の歌ハ一段落の格之。



一首の意ハ。ソノヤウニ時鳥ガ待タレヤウカイ。トハ思タケレドモ。鳴ク聲ヲ聞テ見レバ。ヤハリ亦聞キタイト思テ。更ニ鳴クノガ待タル、事デアル。

貞和百首歌めされけるついでに

光嚴院御製

みそぎ川。ふけゆく浪の。すゞしきは。あすの秋こそ。まづ立ぬらし。

〔解〕貞和ハ。北朝光明帝の年號也。光嚴院ハ。諱ハ。量仁。後伏見天皇第一皇子之○みそぎ川ハ。名所よあらず。何の川よても六月祓を志たる川をいふ之○立ぬらしハ。俗よ立タサウナといふこと。此の御歌ハ。一段落也。一首の意ハ。明らか也。

百首歌奉し時關月

關白前太政大臣

關の戸の。あくるハを。しき。月影よ。何そハ鳥の。きひてなくらむ。

〔解〕前太政大臣ハ。二條持基公也。略傳ハ上よ云へり○關の戸のハ。あくとといふ序よいへる也。此の歌ハ。函谷關の故事をまたにかまへてよまれたる也。一段落の歌也。

一首の意ハ。夜ノ明ルハ惜シイ今夜ノ月影デアルノニ。ドウシテ鶏ガシヒテ

鳴デアラウ。鶏ガ鳴ケバ夜ガ明ルデヤガ。サテモ惜シイ明月ノ關所ノ景色デアルナア。

家よて人々題をさふりて五十首歌よみ待けるよ殘菊句といふとを

鹿苑院入道前太政大臣

花どみし。籬も今ハ。あればて。霜よにはへる。きくの。一もと。

〔解〕家よて云々ハ。入道の室町の邸よて人々五十首の歌よまんとして。各歌題を採り取りたる也。鹿苑院ハ。將軍足利義滿のと之略傳上よあり○霜よ句へるとハ。霜がふりて菊の色の移ろへると也。白菊などハ。端紅など歌よもよみて。霜の爲よ却て色のうるはしくなれるを句へるとハいふ也。此の歌も一段落也。一首の意ハ。明らか也。

紅葉十首歌めされけるついでよ紅葉交松といへるときよませ給ける

後光嚴院御製

染のこす。色かあらぬか。松か枝の。みどりをかはす。木々のもみちば。

〔解〕後光嚴院ハ。御名ハ彌仁。北朝光嚴帝の第二皇子ノ○めとれけるハ。敬語  
ノ。召し給ふと云○色かあらぬか。ハ色テ有ルカ無キカ。此御歌ハ二段落ノ。  
一首の意ハ明らけし。

古き詩の句を題よて歌よみけるに。花發風雨多。といふこと。

頼阿法師

世中ハ。かくこそ有けれ。花さかりやま風ふきて。ばる雨ぞふる。

〔解〕古き詩ハ。古人の詩之。當時ハ詩の句などを題よして歌よむ事流行したる  
なり。頼阿ハ。略傳上にいへり。和歌四天王の一人也。此の歌も二段落也。  
一首の意ハ。明らけし。花よも風雨ありて盛なる時ハ妨害があるが。世中もこ  
れと同様よて盛者必衰の理ハ脱れ難きもの也。さてもまよならぬ世の中  
との意を述べられたる也。

嵯峨のおくよすませ給ける秋の頃

後龜山院御製

おもひやる。人だよあれを。住なれぬ嵯峨の、秋の露ハいかよと。

〔解〕嵯峨ハ。山城の地名也。此所よ住ませ給けるハ。御讓位の後也。こは後小松

帝よ御讓位の後。嵯峨よ住給ひて世をわびてよませ玉へるいとかしとき御  
製也。後龜山院ハ。第九十八代の天皇よして。後村上帝の第二皇子也。諱ハ瀧成  
と申奉る。此の御製ハ。一段落の格也。

一首の意ハ。思ヒヤツテクレル人デモ有レバヨイナア。朕ガ住馴ナイ嵯峨野  
ノ秋ノ露ハドウデアアルカト。サテ世ノ中ノ人ハ薄情ナモノニテ。今ノ朕ガ身  
ノ上ハ誰アリテ一人モ願ルモノハナイア、

落葉を

兼好法師

のがれえぬ。老曾の森の。もみぢはば。散かひくもる。かひなかりけり。

〔解〕兼好ハ。略傳上にあり。和歌四天王の一人也。○老曾の森ハ。近江國にある名  
所也。○散かひくもるハ。空も曇るばかりに甚しく散り合ふと云。此の歌ハ。一  
段落也。

一首の意ハ。明らけし。老曾の森を。人の年老たる事にいひなし。散りかひくも  
るを。涙の散りて目の見えぬ意に取りなして。人間の遁れ難き老といふは。涙  
を散らし聲をくもらせて歎きてもかひなきものぞと云。

寒草を

法印 慶運

春日野の雪まにだにも。もえ出し。くさ葉を霜に。あへず枯ぬる。

〔解〕寒草は。冬の草のとと。慶運の略傳は上よ委し。和歌四天王の一人の○だに  
もは。デモマア之○あへずい。合セズ之。俗に云堪へずと大方同じ。此の歌は。一  
段落の格也。

一首の意は。春ハ春日野ノ雪マニデモマア平氣テ芽ヲ出シタ草葉デアルガ。  
冬ニナレバ霜ニ堪ヘラレズシテ枯テシマウハチカシイ事デアアル。

此の他にも當時の人の歌どもは多くあれど略しつ。

以上は。紀元一千九百九十餘年の頃より。同二千二百七十餘年の頃に至る。凡二百  
八十餘年間の本邦文學の概畧也。

◎第十編 ○慶長以後の文學

伏見の學  
校  
木製の活  
字

慶長以後の文學とは。後水尾天皇の慶長の末年頃紀元一千六百五十七年より。光格天皇の文化年  
間紀元一千七百四十四年に至る十二朝。凡二百餘年間の文學の概略をいふなり。既に前回述  
るが如く。應仁亂後は。文學の見るべきものなかりしを。慶長五年關が原の役あり  
て天下の大勢定り。其後十餘年を経て元和元年豊臣氏亡び。全く干戈を偃するよ  
至りぬれば。是より文學亦漸く興起しつるなり。然して爰に至らしめしは誰が力  
ぞといふよ。是偏に將軍徳川家康の力に依れり。慶長六年。家康學校を山城伏見に  
建て。下野足利學校の僧三要在その教師となし。木製の活字十餘萬を付與せられ  
ければ。三要これを以て書籍を印刷しけり。世に足利本と稱する是也。又假字交り  
の活字も此の頃よりありて。伊勢源氏物語。宇治拾遺の類。其の他數種の假字本を  
印刷せり。世に慶長活本と稱する是也。此の頃家康伏見あり。當時有名の學士藤  
原惺窩を召て。漢籍を講ぜしむ。然して惺窩の門中尤も名聲高かりしは。林信勝と  
す。信勝は。寛永七年江戸に移りて忍岡今の上野山王區に邸宅を設け。子弟を教授せり。時よ  
將軍家光家康の孫。三代之代にて。徳川義直家康の子。紀伊大納言。徳川光圀家康の孫。水戸中納言。西山と號す。大日本史二  
百五十卷。神皇正統記五百十卷。扶桑拾遺集三十卷

昌平齋  
文學の盛況  
國學家  
程朱學  
陽明學  
古學派

等の著あり、明の歸化人朱舜水を師として學べり、其の臣等家光を輔けて大に文學を擴張せり。然して當時の天皇後水尾も亦文學を好み、詠歌を能し玉へり。義直、林氏の邸内より更に堂宇を建て孔子の像を安置す。後元祿三年、將軍綱吉五代將之を湯島に移しぬ。乃ち聖堂及び昌平齋是之昌平齋の跡は今の高師範學校の地なり然して綱吉大に文學を好みしかば、是より漸々文學の盛況を見るに至れり。是れ實に百十二代東山天皇の御宇なり。此時に當りて國學家よハ、沙門契沖、荷田春滿あり。程朱派の漢學よハ、林春齋、貝原益軒あり。王陽明の學には、熊澤蕃山あり。古學と稱する流よハ、伊藤仁齋、同東涯あり。其他連歌、俳諧、俗謡に至るまで、北村季吟、望月長好、近松門左衛門の徒ありて、大に前代より優れり。次は將軍家宣六代將亦學を好み、常に新井白石をして書を講せしむ。次は將軍吉宗八代將も亦學を好み、大に見る所ありて始て西洋の學を試みむと欲し。青木敦書を長崎より遣して、和蘭人より付て學はしむ。是れ洋學の嚆矢なり。然して當時大家の聞え高き學士ハ、新井白石、室鳩巢、伊藤東涯、荻生徂徠、服部南郭、太宰春臺、荷田在滿、加茂眞淵等なり。徳川宗武四安中之宗家を補佐して自からも學を好み、加茂眞淵を召して師事せり。次に將軍家齊十一代亦甚學を好み、塙保巳一をして本邦の書を

洋學の嚆矢

講せしむ。保己一の塾を和學講談所といふ。此の時に當りて老中松平定信白川侯、樂翁を好みて、花月草紙、無双の才學を以て、家齊を補佐して、天下に號令せければ、徳川氏一世の盛時にて、其の文才士の多かりし事、實に前代無比といふべし。上の例によりて、次に碩學著名なる人々の概略を示す。

當時の學者小傳

宗立入道

六々山人

當時文學を以て世に知られたる人々は、藤原惺窩略傳下、(附)那波道圓、堀杏庵、松永遐年略傳各下、伊達政宗才學ありて詩歌を能くす。初め陸奥守。後從三位權中納言に進み。晩年、初め繪田信長に仕へ。後秀吉に従ひ。家康に仕ふ。豊前國四十万石に封せられ。越中守。參議從三位に至る。傳學を好み。博覧の門人たり。元和五年致仕して宗立入道と號し。正徳二年十二月歿す。年八十二。三齋と號し。松向寺に法號す。木下長嘯略傳下、あ松永貞徳略傳下、石川丈山名は重之。一名回といふ。詩文を能くし。兼祿の書に妙之。初め將軍家康に仕へて。大坂の役に功あり。後比叡山の麓一乘寺村に隱居す。嘗て市中に入らざりて。一首の歌を詠じて其志を示せり。渡りし舟の小川は遠くさし。老の波そよぶげはつらし。六々山人林羅山略傳下、(附)東舟叔勝、春勝、守勝、春信、春薦略傳各下、朝山素心意林庵と號す。寛文四年。九月四日卒す。年七十六。中江藤樹略傳下、山崎闇齋略傳下、(附)淺見綱齋、佐藤剛齋、三宅尙齋、永田養安略傳各下、熊澤了芥略傳下、木下順庵略傳下、(附)新井白石、室鳩巢、榊原篁洲、祇園南海、松浦霞、沼柳川震澤、向井滄洲、南部南山、服部寛齋、岡田竹甫、田子舜堀、山甫西、山健甫、岡島石梁、石原鼎庵略傳各下、中村楊齋名は欽。字は敬甫。同州侯の舊臣なり。京師に住居して専ら經書を讀す。年七十四。伊藤仁齋略傳下、子東涯、長英、長衡、長準、長堅略傳各下、(附)北村可昌、小川立所、荒川敬

林塘庵

元林九成瀨尾維賢中島義方中江岷山晁世美陶山晁奥田蘭汀谷左仲積積以貫原田東岳略傳各下人見卜幽名は豊。字は道生。林塘庵と號す。初め林羅山に學び。後ち水戸家に在ふ。和漢の學に通じ。東見記二卷。土佐日記附註三卷。其の他著あり。卒年七十二。下河邊長流略傳各下

門契冲略傳各下(附)安藤爲章今井似閑海北若冲野田忠肅略傳各下北村季吟略傳各下具原萬信略傳各下荻生徂徠子道濟略傳各下(附)安藤東野縣孝孺太宰春臺服部南郭高野蘭亭越智雲

夢秋元淡園三浦竹溪鷹見爽鳩吉田孤山石川叔潭山井崑崙根本武夷板倉璜溪岡井

隼洲山田正朝鳴島道筑朝比奈玄洲木下蘭阜土屋藍洲田中蘭陵伊藤南昌松崎子允

久津美華山宇佐美潜水入江南溟略傳各下有賀長伯略傳各下河瀬菅雄略傳各下谷川士清略傳各下柳

澤洪園名は公美。また柳里菴と號す。傳學にして醫術に長じり。著書あり。安永二年九月二十二日卒す。年七十二。山脇尚徳東洋と號す。傳學にして醫術に長じり。著書あり。寶

永十二年八月十三日卒す。年五十八。北邊成章略傳各下壺井義知略傳各下湯淺元禎字は子祥。常山と號す。新兵衛と稱す。備前岡山侯の臣

紀談東行筆師。四書日録若干卷あり。龍公美字は子明。備前と稱す。京師伏見の人。草履。松菊主人。吳竹翁等の號あり。出て彦根藩

二月卒す。荷田春滿義子在滿略傳各下葛辰字は君岳。鳥石と號す。南郭の門に入りて業を受け。卒年詳ならず。新井白蛾名は新登。字は謙吉。

業を淺見綱齊に受く。然れ共學者の位置に立す。易術を以て其。中井登庵名は誠之。字は叔復。忠藏と稱す。播磨龍野の人。子竹

山高し。著書多あり。寶政四年五月十四日卒す。年六十八。山紀徳民字は世壽。平洲また如來山人と號す。通稱甚三郎。尾張平洲村の人。尾州家の

如來山人岡崎盧門名は信好。字は師古。平太と稱す。會て龍加茂眞洲略傳各下(附)藤原宇万伎楫取魚彦田中道麻

呂荒木田久老村田春郷上田秋成略傳各下本居宣長略傳各下子春庭義子大平略傳各下柴野邦

彦字は彦輔。通稱も彦輔といふ。尾山。又古愚軒。尾藤孝肇字は志尹。三洲。又約山と號す。通稱良古賀樸字は淳風。通稱助とい

春府に仕へ。碩儒の名高し。文化四年十二月一日歿す。年七十四。賴惟寛字は千秋。賴太郎と稱し。春水と號す。越州の人。傳學に弟惟柔字は千祺。万四郎と稱し。

十四年五月四日歿す。年六十八。賴襲龍寛の子。字は子成。山陽。又三十六峰外史と號す。俗稱久太郎といふ。近世の大儒なり。著書甚多し。山本信

有字は天爵。北山。又孝經樓主人と號す。通稱善六。林家の門下。村田春海略傳各下(附)藤井高尚清水濱臣高田與

清略傳各下橘枝直子千蔭略傳各下河村秀根子股根益根略傳各下塙保巳一略傳各下(附)屋代弘賢

石原正明伊勢貞丈略傳各下伴蒿蹊子資規略傳各下尾崎雅嘉略傳各下小澤蘆庵略傳各下平田篤胤略

下)香川景樹略傳各下等なり。此の他よも其の名聞えたる人は多かれど。大方よして今

は漏しつ。

但し婦人よては。荷田在滿の女蒼生子。村田春海の女多勢子。男子の部よて少

し後れたれど。岸本由豆流狩谷望之橘守部等は。略傳を載せたり。

此の中漢學に秀たりしは。藤原惺窩。那波道圓。林羅山。同春齋。朝山素心。中江藤樹。

山崎闇齋。熊澤蕃山。木下順庵。伊藤仁齋。同東涯。人見卜幽。安藤爲章。新井白石。室鳩

巢。雨森芳洲。祇園南海。荻生徂徠。太宰春臺。服部南郭。柳澤淇園。吉益東洞。山脇東洋。

漢學家

處士の侍

北白河の  
三位入道

書齋家  
藝術家

詩文家

藤原惺窩

神童

湯淺常山。龍草廬。葛鳥石。新白蛾。中井髡庵。同竹山。紀平洲。岡崎廬門。柴野栗山。尾藤二洲。古賀精里。頼春水。同杏坪。同山陽。山本北山等とす。然して惺窩。羅山。春齋。ト幽。爲章。白石。春臺。常山。平洲等ハ。能く本邦の學よも通じたり。故に國文として見るべき文章亦多し。素心ハ。承應年中。後光明天皇の侍講たり。身處士を以て天皇の侍講たること蓋し例外なり。素心薙髮して北白河に住す。天皇常よ目して北白河の三位入道と稱し玉へりとぞ。徂徠。淇園。烏石。栗山。山陽等ハ。兼て能書の聞え高し。南海。淇園ハ。繪畫よ於ても妙を得たり。東洞。東洋ハ。醫術よ長じて名聲當時よ冠たり。白蛾ハ。易學よ長じ。羅山。順庵。東涯。白石。南海。徂徠。南郭。草廬。栗山。二洲。精里。春水。杏坪。山陽ハ。詩文よ於ても老練なりき。此の他當時詩を巧よしたる者ハ甚多かれども。此よハ載せず。

藤原惺窩。名は肅。字は欽夫といふ。惺窩ハその號之。藤原定家卿の後裔。冷泉爲純の二子なり。世々播磨國細川よ食邑またりし故よ。惺窩ハ細川よて生れし。幼にして甚だ穎悟なれば。世人呼て神童となす。一日僧となりて京都の相國寺よ入りしが。天よ悟る所ありて出て儒よ歸し。四書六經を講じ。支那の程朱の說を唱へた

りし。天下の人靡然として隨ふ者多し。嘗て朝鮮の人姜況曰。朝鮮三百年以來此の如き人有る事なし。我幸に日本に來て先生に謁したりと。此の如き大家なるを以て上にいへるが如く家康の見る所となりて。當時廢壞したる文學を興復するの先鋒には當られたるなり。元和六年九月十二日卒す。年五十九。妙壽院と法號す其著述せられたる書には。職原鈔首書五及び文集。歌集等あり。此の門より出て有名なりし人々は。那波道圖名は方。活所と號す。播磨姫路の豪。後紀伊家に仕よ。卒年五十四。堀杏庵名は正愷。字は敬夫。尾州家に客となりて。武家系圖を編輯せり。寛永十九年十一月二十日卒。松永遐年字は昌三。貞徳の男。京師に住して名聲。播磨姫路の人。京師に。卒す。明曆三年六月二日卒す。年六十六。菅得庵名は玄同。字は子鶴。播磨姫路の人。京師に。卒す。寛永五年六月十四日卒す。林羅山下ハい林東舟名は信勝。羅山の弟。の徒なり是等の人々大に程朱學を擴張しければ。漢學漸々震起するに至れるなり。

林羅山

道春點

林羅山。名は信勝。後剃髮して道春といふ。羅山はその號。京都人。惺窩翁。山城市原村に隱遁の後。羅山は。始て入門したるなり。然れども非凡の才士なれば頼にその濫奥を極め出藍の稱あり。羅山。四書の新註を作りて門人を教授せり。道春點是也。羅山。慶長の季年に幕府に召され。法律政治教育諸般の事に盡力し。徳川幕府の基礎を強固ならしめしは。蓋し羅山の力少しとせざる也。明曆二年正月廿三日

卒す。年七十五。其著書二百余种あれば。枚擧するに違あらず。本朝通鑑二百七十三卷。但し本朝神社考六將軍家譜七徒然草野槌十三等皆その著のうち也。長子叔勝字は敬吉。父次子春勝字は子利。春齊と號す。別號を尊峰といふ。三代一覽二子守勝字は子文。讀耕齋と號す。難髮して春徳と稱す。寛文元年三月十六日卒す。年三十三又春齋の子春信初名は孟著。梅洞と號す。寛文春齋の二子春篤初名は春常。風圃と號す。享保十さて此の春篤に至りて。將軍綱吉の命に依りて髮を蓄へて信篤と改め。始て大學頭に任ぜらる。是より子孫其職を續きて。世々幕府儒臣の頭梁たり。

中江藤樹

近江聖人

山崎闇齋

關異

中江藤樹。名は原。字は惟命。江州高島郡小川村の人。家に大なる藤樹あり。常に其の下に居て書を講ず。仍て號とす。母に仕へて至孝なり。性篤實端正なるを以て。大其の名をいはず遠近皆稱して近江聖人といへり。本邦に於て王陽明の學を唱へしは藤樹を以て嚆矢とす。慶安元年八月二十五日歿す。年四十一。門人多し。山崎闇齋。名は嘉。字は敬義。闇齋はその號也。播州山崎村の人。京都に移住す。幼にして狡猾無頼なれば。父疎じて僧となす。闇齋喜はず。土州の吸江寺にありて關異といふ書を著はして。大に佛法を詆る。時に國守山内家の憎む所となり。去て京都に到り。儒門を張りて大に程子の學を講ず。晚年會津侯に客たり。著はす所日本書

山崎點

熊澤了芥

木下順庵

紀註十五風葉集十本朝改元考一等あり。其の他漢籍の著書多し。闇齋が訓點を付したる四書五經あり世に山崎點といふ。天和二年九月十六日歿す。年六十八。此の門より出て大家となりたる人は。淺見綱齋名は安正。重次郎と稱す。江州高島に佐藤剛齋名は直方。五郎左衛門。享保四年八月十五日歿す。三宅尙齋名は重國。字は丹二。寛保永田養安易學に造じり。是等を先として。其の門弟凡一千人に及べりといへり。熊澤了芥。名は伯繼。了芥。蕃山は皆號也。藤樹の門に入り。學成りて備前侯に仕へ。秩祿三千石を得る。後去て大和吉野に隱遁し。自ら息游軒と號せり了芥。能く陽明學を利用して常に利國安民の策を講じ。其の實効を所々に見はせり。晚年播州明石侯に仕へ。終に下野古河の客舎にありて。元祿四年八月十七日卒す。年七十三。著書源語外傳五。其の他漢學に關する著書は數種あり。木下順庵。名は貞幹。字は直夫。順庵はその號也。又錦里と號す。俗名は平之允。松永昌三貞徳の子。昌三は昌三の門に入り。幼にして奇才あり。年十三太平賦を作る。長ずるに及て東都に遊び志を得ず。京に歸りて東山に隱れ書を讀む事殆二十年。名聲天下に高し。遂に加州の前田家に聘せられ。大に愛顧せらる。元祿十一年十二月二十三日卒す。

恭靖先生

年七十八。門人等私に謚して恭靖先生といふ。長子敬簡夭く歿し。次子寅亮。孫寅孝。皆前田家の儒臣たり。門弟中著名なる人々は。新井白石名は君美。字は在中。白石はその號也。將軍家史餘論九卷。折たく樂の記三卷。其の他世に益あるもの甚多し。享保十年五月十九日卒す。年六十九。室鳩巢名は直清。字は師禮。堀川の經濟學に長たり。其の著書一百五十餘部あるが中、藩論二十卷。古史通五卷。采覽異言五卷。讀史餘論九卷。折たく樂の記三卷。其の他世に益あるもの甚多し。享保十年五月十九日卒す。年六十九。室鳩巢名は直清。字は師禮。堀川の經濟學に長たり。其の著書一百五十餘部あるが中、藩論二十卷。古史通五卷。采覽異言五卷。讀史餘論九卷。折たく樂の記三卷。其の他世に益あるもの甚多し。享保十年五月十九日卒す。年六十九。

經濟學

殿中侍講

兩森芳洲名は東。字は伯陽。東五郎と稱す。芳洲は號也。宗祇園南海學教授なる。年十七の時。一夜に五百律詩一百首を賦したるに。句々皆金玉。看る人皆その才を歎賞しける。後、節に勵む。以上の人々を木門の五先生と稱せらる。松浦霞沼名は謙。字は貞卿。播州の人。宗對州侯に仕へ。子孫皆職を襲ふ。卒年詳ならず。柳川震澤名は順剛。字は加向。井滄洲名は三省。字は晉甫。南部南山名は景衡。字は思謙。國華と號す。秀才の名あり。年十三にして。登東天台。服部寬齋名は保麻。字は紹卿。家に居て學を盛。岡田竹圃名は文。字は信誠。學に造り。田子彝名は宗叔。堀山甫名は順元。高西山健甫名は順謙。是も岡島石梁名は達。字は仲道。自ら岳仲道と稱す。石原鼎庵名は啓。字は實庵。長崎の此の他尙多し。當時順庵の學風世に行はれて盛なる事かくの如し。故に當時の形勢は一度木門に入らざる者は。儒者の群に入る事を得ざるが如し。是に於て林家の學大に衰へたり。これ順庵の學風は。その模型に偏せず。専ら實學を旨としたるが故なり。其の門下の才士種々の學に達したる者あるを

木門五先生

見ても知るべし。

伊藤仁齋

古學家

堀河學

伊藤仁齋。名は維禎。字は源祐。泉州の人なり。京都に移りて堀河に住す。初め性理學を信じ。後ち宋儒の説を疑ひ。自ら悟る所ありて大學非孔書辨を著し。以て程朱の學を排斥したり。更に門戸を開きて古學家と稱す。諸侯争て幣を厚して聘すとす。いへども仕へず。世人呼て堀河學といふ。著書甚多し。然れども論語古義。孟子古義を始め大方皆漢學の書なり。寶永二年三月十二日歿す。年七十九。長子東涯名は長胤。字は源胤。父の遺志を繼ぎて終身仕へず。家において講學す。著書亦多し。製度通十三卷。續軒小錄一卷。本朝官制沿革考六卷。其の他著述五十餘部あり。元文元年七月十七日歿す。年六十七。二子長英字は重藏。梅字と號す。備後朝臣。堀河學考六卷。其の他著述五十餘部あり。元文元年七月十七日歿す。年六十七。子長衡字は正職。介字と號す。水四子長準字は平藏。竹里と號す。久留五子長堅字は才藏。岡崎と號す。此の五子皆碩儒の聞えあり。世人目して堀川の五藏といふ。但し伊藤の家の當時堀川はあれば

堀川の五藏

伯達字は茂七。荒川敬元名は秀。字は貞元。若冠才名高。林九成名は義端。京都の書肆。瀨尾維賢字は俊夫。是も京都の人。中江岷山名は一貫。平八と等を魁とす。東涯の門中一の。梶世美字は德濟。陶山冕南渡と號す。蘭汀名は士字。字は善甫。谷左仲詳名は子。穂積以貫字は以助。原田東岳名は直。字は直。等名聲高し。然して仁齋東涯の二門を合すれば。其の門人一千人ありしといへり。

貝原篤信

貝原篤信。字は子誠。益軒と號す。筑前福岡の人。本藩の文學を擧られ。後、京都



隱捷し。正徳四年八月廿七日卒す。年八十五。篤實温行の人よ。著書尤も多し。家道訓六巻大和俗訓八巻童子訓五巻和漢名數二巻女大學一巻を始め六十餘部あり。又四書五經。孝經。小學等の訓點を付けられたり。此の門中の高弟一は。竹田定直一。といふ者ありて。定直ハ。同藩の儒臣たり。

### 荻生徂徠

荻生徂徠。名は雙松。字は茂卿。徂徠はその號之。本姓物部氏。故に物茂卿と稱す。將軍綱吉の侍醫たり。初め上總に住居す。五才にして文字を知り十五才にて文章を能く作す。東都に出て柳澤侯に仕へり。徂徠は。専ら漢學の風を一變せんとして。口を開けは先哲の學はたゞ議論の高尙なるを好みて實用に迂なりと誹り。更に復古の學を唱へて。支那の經書を講ぜり。著書甚多しと雖も大方は漢學に關する書也。享保十二年正月十九日卒す。年六十二。子道濟一。金能く父の業を繼げり。さて徂門より出て有名なりし人々は。安藤東野一。服部南郭一。大宰春

### 復古の學

臺名は純。字は蘭夫。春臺は號之。信州の人。終身仕へず東都に住して著書數部あり。尾道四年五月三十日歿す。年六十八。 服部南郭名は元裕。字は子濶。南郭は號なり。尾道四年五月三十日歿す。年六十八。 高野蘭亭名は維馨。字は子式。高野の號なり。初め京都に住し。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 三浦竹溪名は維賢。字は子彬。鷹見爽鳩の號なり。長門の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 鷹見爽鳩名は正長。字は子方。鷹見爽鳩の號なり。長門の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 越智雲夢名は正建。字は君秋。元淡園の號なり。以正。字は子師。三浦竹溪の號なり。長門の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。

石川叔潭名は清山。字は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 根本武夷名は應志。字は伯修。板倉瓊溪の號なり。美作の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 岡井曝州名は孝先。字は巨観。山田正朝の號なり。大佐本村の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。

山田正朝字は大佐本村。山田正朝の號なり。大佐本村の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 鳴島道筑名は鳳洲。字は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 朝比奈玄洲名は文淵。字は伯廉。尾道の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 松下蘭阜名は賢。字は伯廉。山田正朝の號なり。大佐本村の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。

土屋藍洲名は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 田中蘭陵名は其暢。字は子舒。武州の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 伊藤南昌名は元啓。字は伯廉。山田正朝の號なり。大佐本村の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 松崎子允名は徳臣。丹波人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 久津美華山名は應志。字は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 宇作美潜水名は應志。字は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 入江南溟名は應志。字は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。

然して是より後よ至り漢學の大家を以て寛政の二助と稱せられたるは。柴野彦輔名は應志。字は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 尾尾藤良佐名は應志。字は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 古賀彌助名は應志。字は伯廉。肥前中津の人。年十四徂門に入りて樂を受け。柳澤侯に仕へ。幾し無くして歿す。寶曆九年六月廿一日歿す。年七十七。徂徠と並び稱せられたる人。 是は。いづれも幕府の碩儒として一世を風靡せり。以上舉

### 寛政の三助

なる所の専ら漢學のみ關係あるやうなれども。本邦文學の盛衰優劣を知らんよハ。決して國文の上よ於てのみいふべきよ非れば。今参考の爲めに之を舉げたるなり

### 和漢混文

さて此の頃の漢學者よハ。和漢混交文よ通じたる者多し。此の和漢混交文ハ。是より先鎌倉時代の頃より漸々世よ行れたり。即ち軍物語軍記の類是也。然して此の文牀ハ當時よ至りて大よ熟練したり。今斯の文牀よ尤も熟練したる人々を舉げバ。藤原惺窩。林羅山。熊澤蕃山。伊藤仁齋。子東涯。入見卜幽。貝原益軒。安藤爲章。新

井白石。室鳩巢。雨森芳洲。荻生徂徠。太宰春臺。柳澤淇園。湯淺常山。紀平洲等之。此の中爲章の紫家七論。白石の折たく柴記。春臺の駿臺雜話。淇園の雲萍雜誌。平洲の松島紀行等を示さむとしつれども今都合よりて雲萍雜誌と松島紀行とは之を省き。其の他を抜抄して下に擧たり。

國學詠歌  
に秀たる  
人

さて國學詠歌は秀たりし人々ハ。木下長嘯子。松永貞徳。下河邊長流。沙門契沖。北村季吟。有賀長伯。河瀬蒼雄。谷川士清。北邊成章。壺井義知。荷田春滿。養子在滿。加茂眞淵。本居宣長。子春庭。養子太平。藤原宇万伎。楫取魚彦。田中道麻呂。荒木田久老。上田秋成。村田春海。橘枝直。子千蔭。河村秀根。塙檢校。伴蒿蹊。尾崎雅嘉。小澤芹庵。平田篤胤。香川景樹等なり。但し上は名たる外は有名の人ハ。其の門下の餘は略傳を擧たり。此の他詠歌を能くしたる人々ハ。藤原雅輔。藤原光廣。同資慶。藤原通躬。荷田蒼生子。村田多勢子の徒。甚多くして枚擧するは違あらず。然して此所は擧たる人々の歌文ハ。近世の歌集文集類に多く散見きたれば。此所は略しつ。今眞淵の文意考。宣長の菅笠日記。篤胤の歌道大意等の文を下條に示す。

木下長嘯

木下長嘯。名ハ勝俊。關白秀吉の北方大政所の兄の子なり。若州小濱の城主たりし

が。關が原合戦の後。東山邊に隱遁して。風月を吟詠し。歌文を樂しみて。歲月を送り。慶安二年六月十五日卒す。年八十一。

松永貞徳

松永貞徳。逍遙軒また長頭丸と號す。國學を細川幽齋に學び。晚年俳諧を能くして世に愛せらる。承應二年十一月十五日卒す。年八十三。慰草八。百人一首抄三。歌林樸

花の本

樸七等を著述せり。後水尾天皇より花の本の號を賜りて世に俳諧の宗匠と稱せられたり。俳諧の事は下にいふべし。此の門より出て有名なりしは。北村季吟傳。下望月長好名ハ兼友。長好ハ號之。信濃の人。京都嵐山の徒なり。

下河邊長流

下河邊長流。名ハ具平。彦六と稱す。もとは小崎氏なり。大和宇多の人なりしが。移りて大坂に住し。貞徳。契沖等と同時の人。夙に和歌を嗜み。萬葉集の古風を慕ひ。自から一家を成しぬ。萬葉集名寄五。續歌林長材集二。晚花集一。歌集十等を著せり。貞享三年六月三日歿す。年六十三。

沙門契沖

沙門契沖。名ハ空心。契沖は號之。俗姓下川氏。攝津尼が崎の人。幼にして奇才あり。年長し出家して攝州今里妙法寺に住し。晚年退隱して東高津の圓珠庵に住みて。心を國學に潜め。古語を推考せり。水戸義公。聘を厚くして召せども仕へず。萬

圓珠庵

北村季吟  
歌學所

葉代匠記を呈し。元祿十四年正月廿五日寂す。年六十一。著書は。萬葉集代匠記二十冊。古今餘材抄三十冊。源註拾遺八冊。勢語臆斷四百人一首改觀抄。五河社五雜記。厚顔抄。漫吟集等數種あり。此の門より出て有名なりし人々は。安藤爲章通稱新助。年山と號す。水戸縣公に仕ふ。年山紀開六卷。紫家七論等の著書あり。今井似閑京都の人。六波羅の東に隱居し。萬葉集を著す。海北若冲學伯と號す。大坂の人。和蘭類林を著す。野田忠肅攝津今津の産。萬葉類句を撰す。等の徒なり。

有賀長伯

北村季吟。拾穂軒と號し。呂庵と稱す。京都玉津島の社司也。幕府に召されて歌學所となり。法印に昇進して再昌院といふ。著書甚多し。然して皆世に有益の書也。源氏湖月抄六十冊。八代集抄五十冊。萬葉集拾穂抄三十冊。枕草子春階抄十二冊。伊勢物語拾穂抄五百人一首拾穂抄。三は今も世に愛讀せられたり。子湖春。孫湖元。皆よく業を繼て歌學所なり。

河瀬菅雄

有賀長伯。以敬齋と號す。京都の人なり。業を望月長好より受く。源氏物語掌故四冊。歌枕秋乃寐覺二冊。和歌八重垣七冊。初學和歌式七冊。和歌麓の塵三冊等の著あり。元文二年六月二日卒す。年七十七。

谷川士清

河瀬菅雄。醉露堂と號す。京都の人也。和歌よき草二冊。増補和歌道志る九冊等の著あり。卒年詳ならず。

北邊成章

谷川士清。名ハ昇。士清ハ字なり。伊勢の津の人也。和訓栞十三冊。日本書紀通證三十冊等の書を著はせり。安永五年十月十日歿す。年七十。

壺井義知

北邊成章。字ハ仲達。富士谷と號す。京都の人也。また不盡谷とも書けり。捕頭抄三冊。脚結抄六冊等の著述あり。子成壽北野と號し。源吾と稱す。又著書あり。壺井義知。鶴翁と號す。大坂の人也。故實に委し。著ハす所の書。昔傳拾葉五冊。紫式部日記傍註二冊。源氏男女裝束抄三冊。職原抄解十冊。裝束圖式二冊。故實秘要抄二冊等あり。此の門下

荷田春滿

よて速水房常京都の人。秋等ハ。各著書あり。荷田春滿。本姓ハ。荷田宿禰よして。通稱ハ羽倉齋宮と云へり。京都稻荷山の祠官なり。夙ハ國學の替廢を歎し。眼を國史律令に屬し。心を上代の歌文に潛め。質問を契

在滿

沖に試みなどして。大に國學を鳴らしければ。當時世の耳目を驚かせり。後世國學の隆盛に至りしは實に春滿等の力なり。元文元年七月二日歿す。年六十八。卒後遺命して其の著述を焼かせければ。今残れるは萬葉解。伊勢物語童子問十三冊等あるのみ。養子在滿東之進と稱す。實ハ春滿の甥なり。樂を繼て大伴會具五冊。同個案二冊等を著す。在滿の女也。傳學満の子。御風。東威と稱す。遂ハ京都より出て國學を教授す。寶曆三年四月十四日歿す。女蒼生子在滿の女也。傳學

加茂眞淵

くす。天明六年二月二日歿す。年六十五。

加茂眞淵。縣居と號し。岡部衛士と稱す。遠州濱松の人。始め徂徠の門に遊びて漢學

を修め。後ち春満の門に入りて國學を研究す。然して東都に門戸を張り。田安家中納言武仕へ。後仕を致して濱町に住し。専ら著書をなし。益々有志の徒を教授す。門人數百名に及べりといふ。明和六年十月三十日歿す。年七十二。著書中今も世に愛讀せらるゝもの。萬葉考七卷同別記三卷冠辭考十卷語意考一卷文意考一卷伊勢物語古意六卷百人一首初學五卷源氏物語新釋。縣居家集等なり。その門下に有名人なりし人々。本居宣長下藤原宇方杖 辭會を説し。加藤大助を稱す。東都の人。著書土佐日記註二冊。假名問答等あり。楫取魚彦稻生茂右衛門を稱す。下地の人。著書古昔抄一冊。萬葉集千歌等あり。田中道麻呂藤木翁と號す。通稱は庄兵衛。後藤家して道全といふ。美濃の人。大坂。著書土佐日記註二冊。假名問答等あり。荒木田久老五十樹園と號す。伊勢内宮の祠官と。宇治主統と稱す。其の著書中万葉集乃落葉四冊。祝詞追考一冊。肥後風土記。豐後風土記。出雲風土記等の著書。五十樹園集等あり。村田春郷本姓は小野。字は君親。顯隆と號す。春道の子。然して。弟春海。下。橘枝直。下。子千蔭。下。上田秋成。著書は冠辭考續七卷。落久保物語校正四冊等あり。本居宣長。鈴乃屋と號す。通稱は舜庵。後ち衛士と改む。伊勢松坂の人。眞淵翁に就て古學を修め。自ら一家を爲す。其の門人六百餘名ありきといふ。享和元年九月廿九日歿す。年七十二。宣長。初め醫を業とし。曾て紀伊家仕へ。大に本邦の學を唱ふ。然して國學の隆盛に至りし。實に此の翁の時代を以て空前絶後といふべし。上の春満翁。眞淵翁と併せて。世に國學の三大人と稱す。明治の聖代に至りて。

本居宣長

國學三大人

本居春庭  
同大平

村田春海

橘枝直  
同千蔭

河村秀根

各贈位を賜りたり。此の翁の著書甚多し。其の最なるもの。古事記傳四十卷古訓古事記三卷歷朝詔詞解六卷古今集遠鏡六卷詞迺玉乃緒七卷玉乃小櫛九卷玉勝間十六卷玉安良禮一卷菅笠日記二卷出雲國造神壽後釋二卷大祓詞後釋二卷鈴屋集等凡五十餘種あり。子春庭博學にして秀才なり。眼疾を患ひて全く盲目となりぬ。文政十一年十一月七日歿す。年六十六。詞の八衢二卷。詞乃通路等の著書あり。養子大平通稱三四衛門。初め稻掛十介と稱し。茂權といふ。鳳の鈴屋の門人。入りて學ぶ。後養子となり。本居氏を嗣す。天保四年九月十一日歿す。年七十八。玉翁百首解二卷。有馬日記一卷。已未紀行一卷。姓氏錄考等の著書あり。村田春海。字は士觀。織錦乃舍。又琴後翁と號す。通稱三四郎。春道の二子。初め漢學を修めて詩文を能くす。後眞淵翁の門に入りて専ら國學を研究し。著書數種あり。假字拾要二卷時文摘緝一卷歌語一卷字鏡考證。齋明紀童謡一卷琴後集等七卷人の知る所なり。女多勢子。又博學にして詠歌は妙なり。門人中又名家多し。藤井高尙松乃舎と號す。文章を能くす。橘枝直。通稱は加藤又兵衛。芳宜園と號す。幕府の家人なり。尤も歌文を能くし。東歌三卷を著せり。子千蔭通稱は又左衛門。亦縣居家の門人。歌文を能くし。能書を以て稱せらる。八町郷に住し。門人數百名あり。萬葉集略解三十卷。宇氣長乃花といふ歌文集正續八卷。及び曼帖類數種の著書あり。河村秀根。葎庵と號し。復太郎と稱す。國史を推考する事を好み。門を杜ち客を謝し

て著述は從事す。著ハす所の書。書紀集解を始め。六國史の集解。古事記。舊事記。古語拾遺。姓氏錄。萬葉集。律。令義解。三代格。延喜式。禁秘抄等の集解。其の他數種の著書あり。子股根一耶と稱す。奇才ありて和歌を能くす。二一男益根す。家ありて専ら教授を力め。帝勅通覽。空輔。國郡。姓。氏。制度。官職。武家等の通覽。及び。益根賦。乾葉集等の著書あり。秀根の兄を秀頼といふ。又國學は精し。尾州家の命よりて徒刑考十を撰し。其の他數種の著書あり。

塙保己一

塙保己一。名ハ保己一。水母子と號す。幼よして明を失ひ瞽となりたれども。天資強記よして一はび聞けハ年を経れども忘るゝ事なし。源氏物語の如き大部といへども悉く諳記せざるハなし。歌文を好みしかども兼て大志ありて。遂は保元以降諸の記録雜書を蒐集し。類別して之を編成せり。即ち群書類聚と名付て。凡一千二百七十三種。六百二十五冊とす。是實は本邦よ於て古今未曾有の大著述なり。然して諸家の珍書これよりて不朽は傳ふるもの多し。誠は文學上の大功勞といふべし。其の他螢蠅抄。總隱集等の著書あり。門人また多し。屋代弘賢一名陸。文太郎と稱す。輪池。余人ありしといふ。著書甚多く古今要覽の如きハ一石原正明嘉左衛門と稱す。尾張の人。二部千卷とす。天保十二年五月十八日歿す。年八十六。伊勢貞丈安齊と號す。不滅と稱す。故實は通せり。著書甚多し。武器。軍器。馬。船。子。田。樂等の考。四。聖草七卷。貞丈家訓一卷。徒然草大觀。其の他百餘種あり。

伴蒿蹊

伴蒿蹊。名ハ資芳。閑田子と號す。近江の人なり。京都大佛の邊に住す。和漢の學は通じ。詩文を能くし。國史は精しく。國文は妙を得たり。當時國史。日月。浦。瀧。國史を世。和歌。四天王といへり。著書近世崎人傳六。譯文童諭。二。國文世々乃跡。三。閑田耕筆。四。閑田文章。五。其の他多くあり。子資規直樹と稱す。父の業を繼ぎて。増補題字。要解。歌。辭。要解等。其の他の著書あり。

尾崎雅嘉

尾崎雅嘉。俗稱春藏。華陽と號す。大坂の人なり。博覽よして和漢の學は通せり。群書一覽六。百人一首一夕話。七。等の著書あり。世は行はれたり。

小澤蘆庵

小澤蘆庵。名ハ玄中。又觀荷堂と號す。通稱ハ帶刀。尾州の人なり。古學を唱へて一家を爲す。門人多し。著書袖中和歌六帖。觀荷隨筆。蘆庵集等あり。

平田篤胤

平田篤胤。氣吹舎と號し。大學と稱す。羽州の人なり。幼よして俊才あり。長ずるよ及び博覽強記和漢の學及び佛學は通じ。常に敬神愛國の意深く。その著書古史傳三十。古史徵。十一。神字日文傳。二。出定笑語。並ニ附錄。六。志都乃窟。二。氣吹舎叢書。二。悟道辨。二。歌道大意。等。凡一百餘種あり。其の門人一千餘名よ及びべりといふ。實は近世の大家なり。天保十四年閏九月十一日歿す。年六十八。然して此翁の著書ハ。出定笑語。志都乃窟を始め。大方ハ現今の講義筆記體の文よて。所謂言文一致ともいふべき文

躰なり。是皆門人の筆記なれども。蓋し何人よも能く知り易からしむむとて。かゝる文躰の著書を創めたるなるべし。然して此の躰の書を多く著へしたるハ。翁を嘯矢といふべし。

香川景樹

歌風一變

香川景樹。桂園と號す。從五位下肥後守たり。京都の人なり。古今集正義三十一。土佐日記五。桂園一枝二等三を著せり。近世よ於て歌風を一變したるハ此翁なり。門人中八。八田知紀。渡忠秋等ハ。其の名世よ知られたり。

此の他よも世よ聞えたるハ。岸本由豆流棟家園と號す。考證學よ長し。源中納言物語考證四卷。土佐日記考證二卷。櫻河院百首考證三卷。等の著書あり。狩谷望

之。棟家と號す。和名類聚抄十卷。其の他數種の著あり。橘守部惟本と號す。後醍醐天皇十一年。長祿橋格。短歌撰格。文章撰格各二卷。等の著あり。等の如き人々あれども。こまやでハ

と思ひて漏しつ。

さて是より文例を左よ示すべし。

紫家七論

安藤爲章傳上

其五 作者本意

此の物語専ら人情世態を述て。かみ中志もの風儀用意をせりし。事を好色よよせて。美刺を詞よあらはさず。見る人をまてよしあしを定めしむ。大旨は婦人のため

に。諷諭すといへども。おのづからそのこのいましめとある事おほし。ひとつふたつを擧て例せハ。桐壺の帝の色をおもんじて。更衣よ寵遇すきとせ給ひ。人のそしりをおもんからせ給はず。世のためしよもなりぬべき御もてなしき。上達部うへ人よりはじめ。天が下のもてなやみ草よならせ給ふハ。帝徳のはづかしき御事よして。御代のみかどを諷諫し奉るよあらずや。且源氏の君をわたくし物よおもほして。御元服より以下なよ事も東宮よかどらずもてなし給ひ。ようせずハ。儲位をもとりかへまほしう見えとせ給ふハ。叡心のあつしきならずや。弘徽殿のおしたちかどくまき所ものし給ひて。みかどの御なげきを。事よもあらずおほしけるハ。后妃の徳。いづくよかおはします。こゝもとをよみ給ふ女御后より以下。その風儀用意をかへりみ給はずハ。又あしきとまのうたてき名をおひ給ふべし。次よ帯木の巻の品定ハ。一篇の女誠なれば。女といふ女よよみ習ハせたくこそ。又空蟬と軒端の萩が圍碁のありとま。閨中もぬけの衣といきたなきと。教戒あらハなるものなり。その空蟬が。無心よしてやみなんとと思ひはてたるハ。用意いみしきものよして。式部が志をり。また次よ夕顔がもてならしたる扇よ。をかしうかきするが

たるハ。すきくしきとがや。なほおもからぬ成べし。さるハあまりやハらかよおほどき。物ふかくおもきかたのおくれたるより。ばたして横さまに身まかりぬ。これを聞く女ハ。あたなる人よすかざる事をおもふべし。源氏のうかびたる心のすさびよ。人をいたづらよなし。我御身も堤の程よて。馬より落ちていみしく御心ちまどひたるハ。貴公子のまのびありきさいままむ。惟光がかゝる道にゐて奉りたる罪ハ。猶淺からず。近習たる人これを思ふべし。是より以下の卷々皆この眼をつけてよみ侍らば。其人の行跡情態。かゞみようつす如く。妍醜のがるゝことなく。世のしましめとなりなん事。作者の本意よして。いたづらに作るよハあらざるべし。

〔解〕紫家七論ハ。一冊なり。こは七論中の其五とある條よて。作者本意といふ題よて。式部が尤も注意したるありさまを示されし之○此の物語ハ。源氏物語をいふ之○かみ中まもハ。貴賤をいふよ同じ。上中下の人々の風俗之○美刺とハ。立派よ物を指して批評する之○諷諭ハ。それとなく人を諭し諫むる之○桐壺の帝の云々。此所の敷語ハ上の源氏物語の條よ委しくいへり。見合すべし○またくし物ハ。最愛の物といふ意之○ようせずハ。能くまないな

ら之。俗よワルクスルト之○儲位ハ。皇太子の位之○あこましきハ。淺慮之○弘徽殿ハ。桐壺帝の女御之○おしたちかどくしきハ。押張りて賢才ある之○こノもとをハ。源氏物語の此の條を之○うたてき名ハ。くれぐれよろしからぬ名之○帶木の卷の品定ハ。帶木ハ源氏第二の卷之。雨夜の品定とて。源氏の君の許に。頭中將。左馬頭。藤式部丞等の集會して女子を品評したるをいふ之○うつ蟬と軒端の萩ハ。うつ蟬ハ。伊豫守の妻之。軒端の萩ハ。伊豫の女。空蟬のまノ子之○閨中もぬけの衣ハ。源氏の忍びて來りし時空蟬ハ衣を脱捨て遁避せしをいふ之○いざななきハ。その時軒端の萩ハ熟睡してありしをいふ之○空蟬が無心よして云々ハ。空蟬ハ源氏の懸想するを甘く遁れ避けて貞操を全くしたる之○夕顔ハ。女の假の名之。源氏の第四夕顔の卷あり○をかしようかきすさびハ。夕顔が扇よ歌を面白くかきて源氏よ贈りしと之○すきくしきとがや云々ハ。好色めきて輕々しき振舞どと之○やハらかよおほどきハ。柔和よ大様之○横さまよ身まかりぬハ。横死之。夕顔ハ何がし院よて横死したる女之○あたなる人よハ。浮華なる男よ之。因云すかざる事ハ

すかざるノ事と云ハされバ語格とノのはねども當時ハ此の類多シ○馬より  
落テ云々。是れ夕顔の卷ヨあり。源氏の君。夕顔の死體を見んとて夜の程ヨ山  
寺ヨ行きて歸り來る途中のト云○惟光ハ。源氏の昵近の臣ト。

新井 白 石傳上

折たく柴記

折たく柴記

父にておはせし人ハ。四歳ヨして母におくれ。九歳ヨして父よおくれ給ひしかば。  
父母の御事。詳なる事ハ志らぬなりと仰せられき。我祖父をば勘解由殿と申し。祖  
母にておはせし御事ハ。染屋の何某の女なり。ふたりながら常陸國下妻庄ヨてう  
せ給ひぬ。新井といふハ。もと上野國の源氏ヨて。染屋ハもと相模國の藤氏なるに。  
いかなる故ヨよりてか。常陸の國ヨハ移りたまひぬらむ。その由をいひも傳ふる  
人あれど。まさしく父のおはせられたりし事とも。うけられぬことなり。父の仰せ  
しは。我父ハいかなる故ヨよりてか。所領の地うしなひて。其領せし地ヨ引こもり  
ておはせしといひしが。眼大きに。鬚多くしておそろしけなるが。死し給ふころハ。  
まだ白髪ヨはおはせざりしとおほえたりき。つねに物めしけるに。箸筒の黒くぬ  
りしよ。かきつはたの蒔繪をしたりしより。箸をとりいでノものめして。めし終り

ぬれば。箸をきこめてかたはらにさしおき給ひしき。我をばぐみそだてし老婢  
のありしにとふよ。すぎにし頃の戦ひによき首とりて。大將の陣にまゐり給ひし  
よ戦ひつかれたるらむ。これ給れとて。めしける膳をおし出して。その箸共よたま  
はる。この事時の名譽なりしかバ。今も身をばなしたまはぬなりといひき。それも  
いどけなきとき聞にしことよて。いつれの時。いかなる所の戦ひヨて。大將は誰  
とかいひぬらん。さだかならず。

〔解〕此書ハ。三冊あり。白石翁が致仕の後六十歳の時。即ち享保元年よかゝれし  
ト。然して此の記ハ自序よも云ハれたるが如く。子孫ヨ傳へむ爲よかゝれた  
るよて。他人ヨ見するの意ならぬバ。我が先祖の事に及ぶ所の悉く敬語を用  
ゐたるト。然して行文のさま平淡よて俗ならず。解し易き詞のみよて。面前メンゼンよ  
ものいふが如くかきなされたるハ。さすがよ老練の筆ヨして。後世の漢學者  
などのかけても及ばぬ所ト。此の頃の學者ハ漢學者といへども皆此等の假  
名文ハかゝれしなり○父よて云々ハ。白石の父ト。與次右衛門正濟ト○母ハ  
おくれハ。正濟の母。白石の祖母染屋氏ト○父よおくれハ。正濟の父。白石の祖



父勘解由と稱せし人之○御事ハ。今俗よ御方といふよ同じ○うけられぬハ。諸ひ難き之○父の仰せしハ。正濟の云ひし之○我父ハ。勘靜由の之○死し給ふころハ。死に給ふと云ふべき語格なれど。當時の文には是等の誤あり○物めしけるに。物を食する時に之○かきつはたハ。杜若之○我をばふみそだてしハ。正濟を養育きたりし之○これ給れハ。當時の俗言也。貴人などの臣下よ物いふ詞也。今俗よ頂戴シロといふが如し○大將ハ誰とか云々ハ。此の大將多賀谷修理大夫よハ非るか。多賀谷氏ハ。天正文祿の頃。佐竹氏小田氏等と屢戦ひし事。小田軍記に見えたり○さだかならずハ。俗よタシカナラズといふ事之確とせぬ。

駿臺雜話

駿臺雜話

太宰春臺

寛永のころの事よなむ。將軍家。谷中となり御鷹狩のありし時。御かちよてこゝやかして御過がてに御覽まし〜けるが。此寺へもおもほえず渡御ありしに。折ふし其時の住僧をや八旬に及て。庭よ出てみつゝみつゝ。手づから接木して居けるが。御供の人々おくれ奉りて。御側よ二人三人付きたてまつりしを。なかく〜

やんごとなき御事をい思ひよらぬハ。そのまゝ背むき居たりしを。房主なよてとすゝと仰せられしを。老僧心よあやしとおもひて。いとばしたなく。接木するよと御いらへ申せしかハ。御わらひありて。老僧が年よて今接木したりとも。その木の大きくなるまでの命もまればたし。それよさやうに心をつくす事ふようなるぞと。上意ありしかハ。老僧御身の誰人なればかく心をき事をきこゆるものかな。よくおもふて見給へ。今此木ともつぎておきなハ。後任の代よ至りていづれも大きよなりぬへし。然らば林もまけり。寺も黒みなんと我ハ寺の爲を思てすることなり。あながちよ我一代よ限るべき事かばといひしを。きこしめして。老僧が申こそ實よ理りなれど。御感ありけり。その程よ御供の人々おひ〜來りつゝ。御紋の御物とも多くつとひしかハ。老僧それよ心得て。大きにおそれて奥へよけ入しを。御めし出しありて物など賜りけるとなん。いまハ翁も此老僧が接木することく。老朽ぬれども。ある限ハ舊學をきばめて。人よも傳へ書よものとして。後世に至て正學の開くる端よもなり。此道のためよよろづの助ともなりなハ。翁死ても猶いけるがことし。古人のいはゆる死しても骨くちじといひしこそ。おもひあたり侍

れ。いさゝか我身のため謀るよあらず。諸君も翁がこのころを信じ給へかし。  
 「解」此の書ハ。五册あり。春臺翁が老後よ至りて客よ對し。或ハ門人よ對して清  
 談せられしを。門人どもの筆記して文章よ綴りしを。更に再び翁の考閲して  
 子孫に遺さんとして册子とせられし。此の一段ハ一の卷のうち老僧が接木  
 とある一章ハ。寛永ハ。後水尾帝の年號ハ。三代將軍家光ハ。御  
 かちよては。歩行してハ。○此寺ハ。今詳ならず○八旬ハ。齡八十才のトハ。○み  
 つわくみハ。身軀の縮衰したるハ。腰などの屈みてハ。○接木ハ。今も植木屋な  
 どのよくするトハ。梅桃梨柿の類ハ。接木すれば早く花を付けて果を結ぶハ。○  
 やんごとなき御事ハ。貴き御方ハ。御事は。當時の俗言なるト上ハ。○  
 とはしたなくハ。甚だ不都合ハ。○御いらハ。申せしかば。いらハ。答ハ。申せ  
 しい。申しハ。いふべき語格ハ。當時の文ハ。是等の誤り多し○ふようハ。不  
 用ハ。○上意ハ。當時の俗言にて將軍の宣ハ。上意トハ。○  
 のかなハ。申スモノヤナマハ。○よくおもふてハ。おもひてトハ。○  
 なれども。當時の文ハ。此の誤多し。熟慮してハ。○寺も黒みなん。是も當時の

學風種々

俗言ハ。寺も奥ゆかしくならんと意ハ。○あながちよハ。強てハ。○その程ハ  
 ハ。其の間ハ。○おひくハ。追々ハ。○御紋の云々は。葵の紋付たる物共ハ。葵  
 ハ。將軍家の徽號ハ。○いふハ。翁も。翁ハ。春臺が自からさいふハ。○舊學ハ。  
 舊來わが志す學風のトハ。翁が舊來志す學風ハ。純粹の程朱の學ハ。當時學  
 風種々あり。山崎闇齋ハ。孔孟の説なれど。我國の道とて神道を加味せんとし。  
 伊藤仁齋ハ。古學と稱し朱子學を退斥せんとし。熊澤蕃山。中江藤樹等ハ。陽明  
 學とて良知の説を主張したり。春臺ハ。初め徂徠の門ハ入りしかど。後ハ。説の  
 異ありとて一家を立たり。徂徠の説ハ。道ハ。天地ハ。出るよあらず。聖人の作り  
 給へるハ。などいはれしを惡みてなりとぞ○正學ハ。我が志す學を翁が自  
 からかくいへるハ。翁ハ。常に山崎熊澤中江伊藤徂徠などの説を異説を目し  
 て大に駁撃したり○古人の云々ハ。支那の故事ハ。○諸君ハ。客及び門人ハ。對  
 していふハ。

文意考

いともくかみつ代の人。このころよまぬはれぬ思ひあれハ。言ハ。いのでうたへり。

加 茂 眞 淵 傳は上  
に委し

こそうたといへり。また目よ見耳よ聞事のもたすべからぬわざある時ハ。言をづらねていふ。こそたへ言といへり。これを後の世よふみとなむいふなる。しかあれバ。うたハ内よりおこり。たへ言ハ外より來るものなり。かれよの中の人。ことにつけて。此ふたつをいひつゝわが思ひをやり。人の心をなぐさめ。天地の神わざをたへ。君臣のおほまつろへ事をものりませれバ。萬よたらばぬ事をむあらざりき。かくていよしへハ常いふとはもよろしければ。歌をもたへ言をも。まづいつねの言葉もていひつゝけりけるが中よ。うたといひ。ふみとしもいふよいたりてハ。おのづからあやよつゞけなせるよよりて。めでたきものとなりたり。是をたどへバ。草木も色香のよきをバよみし。鳥虫も聲ふしのあしきをバあしむハ。人のこゝろよしあれバ。何のことはもよろしくおもしらくこそいひなすべきなりけれ。かくてぞいはまぐもかしてき天つ神祖も。ふとを厚きのりと辭をめで給ひて。久かたの天照しおはしまし。かけまぐもたふとき天皇も。高くうるはしきおほみことのをもて。ちばやふる人を和し給ふなれバ。すめらみ國ようまれどうまるへ人。誰かハこのと葉よ。よろこばざらむ。

〔解〕文意考ハ一冊なり。寛政の頃。眞淵翁が著ハされしふみよて。語意考と共に世よめでらるへ書之〇かみつ代ハ。上古之〇もたすべからぬとぞハ。黙止がたき事之〇たへ言ハ。稱辭之。ほむる言の意之〇かれよの中の人ハ。故よ世間の人といふと之〇わが思ひをやりハ。我が思事を晴す之〇神とををたへハ。神の上の事を稱譽する之〇おほまつろひ事ハ。太政なり。ろひハりの延言之〇常の言葉ハ。平常口よいふ所の言之〇あやハ。文之。文飾して云ひなす之〇よみしハ。好し之〇あしむハ。惡む之〇何のことはもハ。歌よても文よても之〇いはまぐもかしてきハ。云ハむも恐多き之〇天つ神祖ハ。天照大神之〇ふとを厚きのりと辭之ハ。大よ貴き祝詞といふ意之。是れ彼の天照大神が天の石窟に籠りたまへとき。天兒屋根命が太祝詞を宣たまひし故事をいふ之〇久かたのハ。天よかへる冠辭之〇天照し云々ハ。その時大神の石窟より出給ひしこときいふ之〇かけまぐもハ。言葉よかけて申すも之〇おほみこととのりハ。詔詞宣命の類之〇ちばやふるハ。冠辭之。多くの神といふよかけていへども。人よもかけたる例あり。万葉二。人麻呂がよめる高市皇子の殯宮

之時の長歌よ。千磐破人乎和爲跡の類之。○すめらみ國ハ。皇國之。○このと葉  
 よハ。此の文詞之。即ちたハ言のよ。○よろこばざらむハ。喜バぬ者ハナイ  
 と。

菅笠日記

菅笠日記

本居宣長（傳）

ことし明和の九年といふとし。いかあるよき年よかあるらん。よき人のよくみて。  
 よしといひおきける。吉野の花見よと思ひたつ。そもくこの山わけ衣のあらま  
 しい。二十年ばかりよも成ぬるを。春毎よさばりのみしていたづらよ心のうちよ  
 ぶりよしを。そのみやハとあながちよ思ひおこして。出たつよなむ有ける。さるハ  
 何ほかり久しかるべき旅よもあらぬ。そのいそぎとて。とよするわざもなけれ  
 ど。心ハいそがはし。明日たハんとての日の。まだつとめてより。麻（ま）きさみとく  
 などを。いとまもなし。その袋よかきつけハる歌。

うけよ猶花の錦よあく神も。心くたきし春の手向ハ。」

ころハ三月のはじめ五日の曉。まだよをこめて立出ける。市場の庄などいふわた  
 りにて。夜ハ明はてにけり。とてゆく道ハ。三渡りの橋のもとより。左よわうれて。

川のそひをやハのほりて。板橋をとたる。此とたりまでは。事よふれつハ。をりく  
 ものする所なれば。めづらしけもなき。このとかれゆくかたハ。阿保でえとかや  
 いひて。伊賀國をへて。そつせよいづる。道よなん有ける。此道もむかし一度二度  
 ハ物せしかど年へにければ。みなとすれて。今はじめたらんやうよ。いとめづらし  
 く覺ゆるを。よハより空うちくもりて。をりく雨ふりつハ。よものながめもそれ  
 くまからず。旅衣の袖ぬれて。うちつけよかこちがほなるも。かつをかし。」

〔解〕此の日記ハ。二冊あり。宣長翁が明和九年三月。吉野の花見よものしたるを  
 りの日記之。○よき人の云々ハ。引歌之。萬葉一よ。よき人のよしとよくみてよ  
 きといひし吉野よくみよよき人よくみつ。とあり○この山わけ衣之ハ。この  
 旅装といふ意之。○さばりのみしてハ。指障ばかりありて之。○ふりよしハ。年  
 月を経し之。○明日たハんとての日の。明日出立せんといふ日。即ち旅行の前  
 日之。○つとめてハ。早朝之。○麻（ま）きさみハ。切幣（キリハタ）とて五色の布帛を細かに切り  
 袋よ入れて旅行よハ携へし之。古への例之。○そハぐりハ。そノ（その）延言之。急  
 きく之。○その袋ハ。幣袋（ハタカ）之。○うけよ云々この歌意は明らかし。○よきとめ

ては。夜の明ぬうち之○市場の庄ハ。伊勢國一志郡之○三渡りの橋ハ。同郡三渡川よかけたしたる橋之○此わたり云々ハ。翁ハ。伊勢の松坂よ住居せられし故に此の邊までば。きりく來しことのあると之○阿保ごえ。是ハ伊勢と伊賀との國堺の山路をいふ之○そつせば。大和の初瀬之。有名の觀音ある古刹なれば。古へより名高き地之○うちつけよハ。卒爾よ之○かこちがはハ。歎息顔のと之○かつば。半分ハといふ意之。

平田篤胤傳ハ上ニ委シ

歌道大意

サテ今日ト。此ノ次ノ會日ト。一日ニ演説イタス處ハ。兼テ申タル歌道ノ粗マシデ。人タル者ハ。誰トテモ歌ハ詠ムベキモノデ。マタ道ノ眞モコレニ依テ辨ヘラルハ。ユエン。又ソノ歌詠ム心バヘ。マタ萬葉家トイフ訣。マタ近世家ノ歌ヨミノ非ゴト。マタ歌ヲヨマント爲ル心得ナドノコナ。鈴屋翁ガ説ヲ本ト致シテ。カタハラ先達ノ説。マタ篤胤ガ思ヒ得タルコトモナドナ。採交ヘテ演説イタスコトデム。夫ニツケテ心得ベキコトガアル。夫ハ朝廷ノ御撰集ノ内。新千載集ニ。藤原信長トイフ人ノ歌ニ。(水グキノ岡ベノサ、ノ一フシチコノ世ニノコス言ノ葉モガナ)。此歌ノ

意ハ。水グキノ岡邊ノ笹ノト云マデハ。一フシト云フノ枕詞。死ヌマデニ何ノ仕出シタルコトモ無ク一生ヲ送ルハ。誠ニツマラヌコトダ。後世ニナリテ。某ト云々人ハ。イツノ頃ニ云々ノコナ爲シオイタガ感心ナコトダ。ト稱ラレルヤウニ。歌ナリ文章也書記シテ遺シオキタイモノダト云フ意デム。マタ續拾遺集ニ。丹波經長朝臣ノ歌ニ。(仕へ來シ身ハ下ナガラ我道ノ名ヲヤ雲居ノ代々ニ止メシ)。此意ハ。カヤウニ御奉公ナシテ居ル我身ノ官位ハ卑イコナレハ。何トゾ世ニ勝レタル秀歌ヲ詠デ。撰集ニモ入り。後々マデモ雲上堂上方ノ御稱ニ預ルヤウニ致シタク思フ。トイフノ意デム。コノ二首ノ歌ナドガヨク心得居ツテ。志ヲ振起スベキ思ヒゴサニ致スガヨイデム。コノ人々斯ヤウノ深キ志ダニ依テ。果シテソノ歌ドモガ御撰集ヘ御收メニ成テ。斯ヤウニ久シク世ニ傳ハリ。猶コノ行末天地ト共ニ傳ハルコトデム。卑キ賤ノ男。シツノ女トイヘハ。其名ヲ高ク雲ノ上ニ聞エ上ゲ。畏クモ天皇ニマデ其名ヲ知ラレ奉ルハ。歌ノ有難イ處デ。ステニ御代々ノ御撰集。古今集ヲ始メ。實ニ陋キウカレ女。遊女ノタグヒマデモ能キ歌ヨミタルヲバ御選ミ入レ遊バシテ。其名ヲ天地ト共ニ無窮ニ致スコトデム。道ニ志ノ無イモノハ論ノ限リデハナイガ。少

カモ道ニ志アル者ハ珍タキ書物ヲ著ハスカ。マタ夫マデモナクハ。眞ノ歌ナリト詠テ後世ニ其名ノ傳ハルヤウニアリタイモノデム。

〔解〕此の書は。一冊なり。是は門人等の筆記なれど。かやうに演説講義等の續々冊子となりて世に出たるハ。翁より以前ハ多く見ざる所也。故に翁を以て假りに嚆矢といふべき也。○心バハハ。俗に注意をいふと同じ。○萬葉家。是ハ當時の俗言也。荷田翁。契沖阿闍梨以來。古學を嗜み。古調の歌よむ人を目して。當時の世人がかくいひし之。○非ゴト。誤りたる事也。○鈴屋翁ハ。本居宣長翁の之也。號を鈴屋と云はれたればかく云之。○先達ハ。先輩の人々の之也。先生といふと同じ。○御撰集。上より下へる勅撰集の之也。○雲上堂上方といハ。月卿雲客などもいひて。古への朝廷に昇降する五位以上の官員方の之也。世俗に御公家様などいへりし人々の之也。○思ヒシハ。思出の種也。○雲の上ハ。朝廷の之也。○古今集ヲ始メ云々。古今集ハハまろめといふ遊女の歌などの載せてあるをいふ也。○眞の歌。まことよよろしき歌の之也。

是等の類也。此の他當時の人々の歌文ハ。秀吟傑作なども多くありて。なかくは

俳諧

中古の歌も劣らぬほどなれども。皆能く世人の知る所なれば。今ハ省きて次は俳諧狂詩狂歌狂文俗論小説などの事を少云ふべし。

さて此の時代は於て俳諧といふもの起れり。松永貞徳(海は上)始めてこれが宗匠たり。かしくも後水尾天皇より花の本の號を賜はりたり。然して俳諧ハ古の俳諧歌などの流にハあれど。俗語をもまじへて興あるを旨とす。句法ハ。古への片歌。或ハ連歌の一片などをより轉じたるものよて。十七文字を限りとして。能く無限の情を見はす是なり。然して貞徳より以前は於て有名なりしハ。山崎宗鑑(三郎を稱す。近師の風操を學びて播磨守たり。始て此道の一宗を爲すといふ。天文廿二年十月二日歿す。年八十九)荒木田守武(伊勢守宮の神官也。園田長官を稱す。是亦此道に於て大爲すといふ。天文廿二年十月二日歿す。年八十九)又貞徳より後ハ有名なりしハ。安藤貞室(名ハ正厚。貞室ハ號なり。延寶二年二月七日歿す。年六十四)西山宗因(名ハ四一。二郎作を稱す。又梅齋。向榮庵等の號あり。肥後の人大坂に住す。天和二年三月二十八日歿す。年七十八)松尾芭蕉(略傳下。等を以て最とす。即ち宗鑑守武貞徳貞室宗因芭蕉を世に俳諧の六家と稱す。

俳諧六家

松尾芭蕉

松尾芭蕉。通稱忠左衛門といへり。藤堂侯の藩士なりしが。世塵を避て薙髮し。天々軒桃青と號し。庵室を深川に結びて住みけり。然してその窓前ハ芭蕉を植て自から芭蕉庵と號しけるゆゑ也。人亦呼て芭蕉翁とぞいひける。好て諸國を行脚游歴

榎本其角

しければ。芭蕉の名天下は高く門人また甚多し。晩年大坂に遊し。その客舎はありて。元祿七年十月十二日歿す。年五十三。さて其の門人中尤も有名なりしは。榎本其角本姓竹下。父を東坂といふ。江洲野田の人。初め源助と稱し。楯を突一葉を學びて。楯名を奪子と號す。東都に往する久しくして。俳名大に著し。六藏庵。狂雷堂。文合庵等の號あり。又寶井貫子とも稱せり。東都町藥師堂の邊に住し。寶永四年二月三十日歿す。年四十七。

服部嵐雪淡路の人。來りて東都に住す。彦兵衛と稱し。雪中庵。不自軒等の號あり。不白軒等の號あり。年五十四。 森川許六五老井と稱し。菊阿佛と號す。江洲彦根の人。來りて東都に住し。又齒を

狩野安信學ぶ。正徳五年八月二十六日歿す。落橋舎と號す。肥前の人。兄に隨て京師に立花北枝と稱し。鳥軍日歿す。年六十。風俗文選等の著あり。 向井去來平次郎と稱し。落橋舎と號す。肥前の人。兄に隨て京師に立花北枝と稱し。鳥軍日歿す。年六十。風俗文選等の著あり。

河合會良傳詳ならず。伊家奇人談云。信州諏訪の産なり。一とせ東武に遊びて。燕門に入り一時に名あり。 志田野城越前の商人。榎木社と號す。加賀國小松の商人なり。享保三年五月十二日歿す。年詳ならず。

越智越人尾州の人。名古屋に住す。落橋後に至り。支考が先師の夢想滑稽の傳など杜撰の書を出し。國に歸りて。俳諧數篇を著す。世に其非を辨せり。實に我道清濁の土といふべし。谷人談にあり。さて燕門中其角嵐雪の歿後には。野是等のの人々なり。之を世に蕉門の十哲と稱せり。然し

て又是より後。婦人よして名聲の高かりしは。加賀の千代女千代は。加賀國松任藩の人にて。福増屋六兵衛の女なり。年十八の時。金澤の福間茶屋に嫁しける。四五年前ありて。夫身より引ければ。千代は。悲しみに堪へず。加藤髪して。尼となり能く貞操を守り。安永四年九月八日歿す。年七十四。然して千代は。少年より才名高く。その秀吟人口に膾炙せるもの多し。今類はしければ。奇きつ

さて此の俳諧を嗜むもの。後世に至りてもますます許多なれども。其技漸々卑俗に走り。専ら巧みなるをのみ旨として。古への如く優調なる者鮮し。さて其例を示すべきなれども。都合よりて今略しつ。

蕉門十哲

千代女

又此の時代は於て。狂詩狂歌狂文などいふものも大に流行せり。其の優なる者ハ。太田南畝。石川雅望。加茂季鷹等の數名とす。然して此の三氏ハ博覽よて國學をも能くせり。故に國學は有益なる著書も數種あり。

狂詩狂文

太田南畝

又此の時代は於て。狂詩狂歌狂文などいふものも大に流行せり。其の優なる者ハ。太田南畝。石川雅望。加茂季鷹等の數名とす。然して此の三氏ハ博覽よて國學をも能くせり。故に國學は有益なる著書も數種あり。

其の著書中。一話一言。南畝莠言等は。國學者の參考に便なる書なり。また太平樂府。蜀山百首等の如き狂詩狂歌の著書もあり。

石川雅望。通稱五郎兵衛。六樹園と號す。狂名宿屋飯盛といへり。文政十三年閏三月廿四日卒す。年七十八。其の著書中。源注餘滴十二卷。雅言集覽五十卷は。國學者の參考に便なり。狂歌百人一首。萬代狂歌集等の著書もあり。

加茂季鷹。雲錦亭と號し。加茂縣主と稱す。伊勢物語傍註二卷等の著書あり。又門人共の輯したる雲錦翁家集四冊あり。此の他にも尙多かれど。今は略しつ。

又此の時代に於て俗謠小説等の著作に長じたる者もあり。此の俗謠小説の如きは。古へは曾て無き所の一種の文藝なれども。今は却て世俗愛讀する者多し。即ち俗謠とは。淨瑠璃本の類にて。清元。常盤津。河東。一中。豊後。長唄。端唄等にて謠ぶ所

俗謠小説

加茂季鷹

石川雅望

狂詩狂文

太田南畝

千代女

蕉門十哲

の俗文及び演劇脚本と稱するものは是也。此の文に妙を得たるは。元祿前後にありては。近松門左衛門杉森信盛と稱す。長州萩の人也。井原西鶴俳諧を能くす。大坂の人也。並木千柳近松徳三の徒あり。其後に至りては。並木五瓶。鶴屋南北。河竹新七。瀨川如臯等あり。皆此の道の大家なり。

さて小説に二種あり。一は擬實小説。一は洒落人情小説是也。大久保武藏鏡。大岡政談。護國女太平記。及び仇討の類は。聊の實事を裝飾し。多くの虚説を加へて面白く書きなしたるなり。然して是等の類は著者もその姓名を隠して云はざるもの多し。是を今假り擬實小説とは名付しなり。次に洒落人情小説。とは俗に謂へる洒落本。人情本是也。即ち御伽草紙なども此の類なれば。此の種類は尤も多し。然して明和以後寛政より天保の頃元二、千四百十餘年より。紀元二千四百八十餘年に至る。を最盛なりとす。此の間に於て大家と稱せられしは。左の人々なり。

京傳 山東庵京傳。岩瀬醒と稱す。東都の人也。本朝醉菩提。優曇花物語。其の他數種の著作あり。

三馬 式亭三馬。菊池泰輔と稱す。東都の人也。浮世風呂。古今百馬鹿。其の他數種の著作あり。

馬琴 曲亭馬琴。瀧澤解と稱す。東都の人也。京傳の門人なれど。博覽にして師に劣らず。里見八犬傳。椿説弓張月。夢想兵衛蝴蝶物語。其の他著他尤も多し。

春水 爲永春水。佐々木貞高と稱す。東都の書價也。三馬の門人にて名聲あり。然れども其の著作は。梅曆辰巳の園の類にて。大方猥褻に渉る書のみ多ければ。見るに耐ざる也。

一九 十返舎一九。重田貞一と稱す。駿州の人也。東都に來り住す。學力ありて洒落文に長せり。道中膝栗毛の類の著作尤も多し。

種彦 柳亭種彦。高屋彦四郎と稱す。幕府の士也。夙に才筆の聞え高く著作多し。その中に源氏物語に擬して著作したる田舎源氏は。世に好評せられたり。此の他尙あれど省きつ。さて是等の俗謠小説狂歌狂文の例は之を擧るも煩はしければ皆略しつ。

さて慶長以後の文學は。此の如く百般の文事備はらざることなく。實に未曾有の隆盛といふべし。然して亦此の間に西洋學を唱ふる者も起りて。遂に明治の聖代に至れる也。然而して。仁孝。孝明天皇の御宇。天保以來の文學は。現今人々の目撃



する所なれば之を略す。

以上は。紀元二千二百七十餘年ノ頃より。同二千四百七十餘年の頃に至る。凡二百餘年間の本邦文學の概略なり

新撰日本文學史略終

日本文學史略正誤

- 山州は 嶺洲の誤 總目錄一六頁ノ十五行
- 荒本田は 荒木田の誤 同二八頁ノ五行
- 一々つは 一つ々つの誤 本文二二頁ノ十行
- 靱ヅキは 息ヅキの誤 同二九頁ノ一行
- 青葉は 青葉の誤 同三二頁ノ九行
- みづそくぐは みなそくぐの誤 同三四頁ノ九行
- 酒をは 酒をの誤 同頁ノ十一行
- 輔ルは 捕ルの誤 同四六頁ノ四行
- 事務は 事務の誤 同四九頁ノ五行
- 勢苦は 勞苦の誤 同五一頁ノ四行
- 土風記は 風土記の誤 同五九頁ノ七行
- 掲難は 掲難の誤 同六五頁ノ十二行
- 去島は 去島の誤 同七五頁ノ五行
- 池には 池のの誤 同七六頁ノ四行
- 島アは 鳥アの誤 同八五頁ノ十三行
- いか思は いかに思の誤 同二八三頁ノ十行
- 綱代は 綱代の誤 同二四頁ノ五行及七行
- 薙剃は 薙髮の誤 同三三頁ノ六行今川貞世ノ註
- 捕せらるは 補の誤 同三三頁ノ六行上杉盛實ノ註
- 略傳を載せは 略傳を下に載せの誤 同二六三頁ノ十一行
- 新白蛾は 新井白蛾の誤 同二六四頁ノ一行
- 著者るりは 著者ありの誤 同二七八頁ノ五行
- 一はびは 一たびの誤 同二七八頁ノ七行
- 麻きずみは 麻きずみの誤 同二九三頁ノ十二行
- 等の續々は 等の筆記の續々の誤 同二九六頁ノ三行
- 其の他著他は 其の他著作の誤 同三〇二頁ノ二行

明治廿五年九月廿八日印刷  
同 年十月一日出版

版權所有

著者

鈴木弘

恭

東京市小石川區竹早町十三番地

發行兼印刷者

青山清

吉

同 小石川區大門町廿五番地

賣捌人

吉川半七

同 京橋區南傳馬町一丁目

關西大賣捌所

松村九兵衛

大阪市南區心齋橋通南一丁目

同

大谷仁兵衛

京都市三條通御幸町四へ入







●壺井義和大人著

紫式部日記傍注

全二册

●大本●正價金二十五錢●郵稅金六錢

●平春海●橘千蔭大人兩先生考

落久保物語注釋

全二册

●大本●正價金二十五錢●郵稅金六錢

●三村安臣大人著

言葉のこひ鏡

●全壹折  
●正價金十錢  
●郵稅金二錢

●正七位内藤耻叟先生閱  
●佐伯有義先生編輯

勅語教の園

全二册

●勅語參考  
●洋裝美本●正價金四十錢●郵稅金六錢

●正七位内藤耻叟先生著

勅語俗訓

●小本和裝●美製全一册  
●正價金八錢●郵稅金二錢

●正七位内藤耻叟先生著

祝日祭典由來

全一册

●洋裝小本●正價金五錢  
●郵稅金二錢

●土岐政孝編輯

修身訓範

●和裝半紙本●全三册  
●正價金三十五錢  
●郵稅金六錢

●關信三編輯

幼稚二十遊嬉

●和裝半紙本●全一册  
●正價金十錢●郵稅金二錢

●橫田惟孝先生著

戰國策正解

●和裝半紙本●全八册  
●正價郵稅共金壹圓

●副島種臣公題辭  
●廣部精先生編輯

支那亞細亞言語集

上下  
全二册

●和裝半紙美製  
●正價金七拾錢●郵稅金八錢

●廣部精先生譯述

支那總譯亞細亞言語集

合本  
全四册

●和裝美製  
●正價金六十錢●郵稅金八錢

●清崎曠敏本編次

●日本阿部修助先生增注標記

增注標記二十一史略

全八册

●和裝大本美製  
●正價郵稅共金壹圓五拾錢

●大森惟中先生閱

日本外史譯語

●和裝小本  
全二册

●大森惟中先生閱

發字辨蒙解

全一册

●和裝小本●正價金十錢●郵稅金二錢

●廣部精先生編輯

古文眞寶讀本後集

全一册

●和裝半紙本●正價郵稅共金三十錢

發字辨蒙解

全一册

●大森惟中先生閱

漢語字類

全一册

●村山拙軒先生校閱  
●藤森温高先生纂評

增注纂評古文眞寶讀本後集

全一册

●和裝半紙本●正價郵稅共金三十錢

●廣部精先生編輯

發字辨蒙解

全一册

●大森惟中先生閱

日本外史譯語

和裝小本  
全二册

●大森惟中先生閱

增補漢語字類

全一册

●和裝小本●正價金三十五錢●郵稅金四錢

41-41

●尾島碩聞先生著

**方鑑大成**

●和裝美製●半紙本全三冊  
●正價金七十錢●郵稅金六錢

●尾島碩聞先生著

**方鑑必携**

●和裝美製●小本全一冊  
●正價金十五錢●郵稅金二錢

●文部省檢定濟

●上野清先生編纂

**近世算術**

●上下全二冊  
●定價金二圓五十五錢  
●郵稅金十二錢

●上卷定價金八十錢●下卷定價金七十五錢

●上野清先生校閱●森喜太郎君著

**近世算術解式**

●上下全二冊  
●定價金七十錢  
●郵稅金六錢

●上卷定價金三十錢●下卷定價金四十錢

●上野清先生校閱●佐久間文太郎君著

**近世算術**

●上中下全三冊  
●定價金八十錢  
●郵稅八錢

●上卷金二十五錢●中卷三十錢●下卷二十五錢

●上野清先生編纂

**近世代數**

●全一冊  
●定價金三十五錢  
●郵稅金四錢

●上野清先生編纂

**平面三角**

●全一冊  
●定價金四十錢  
●郵稅金四錢

●上野清先生編纂

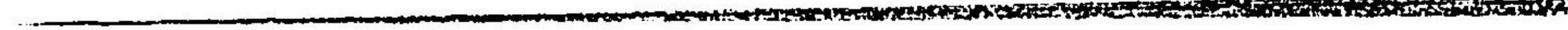
**近世代數**

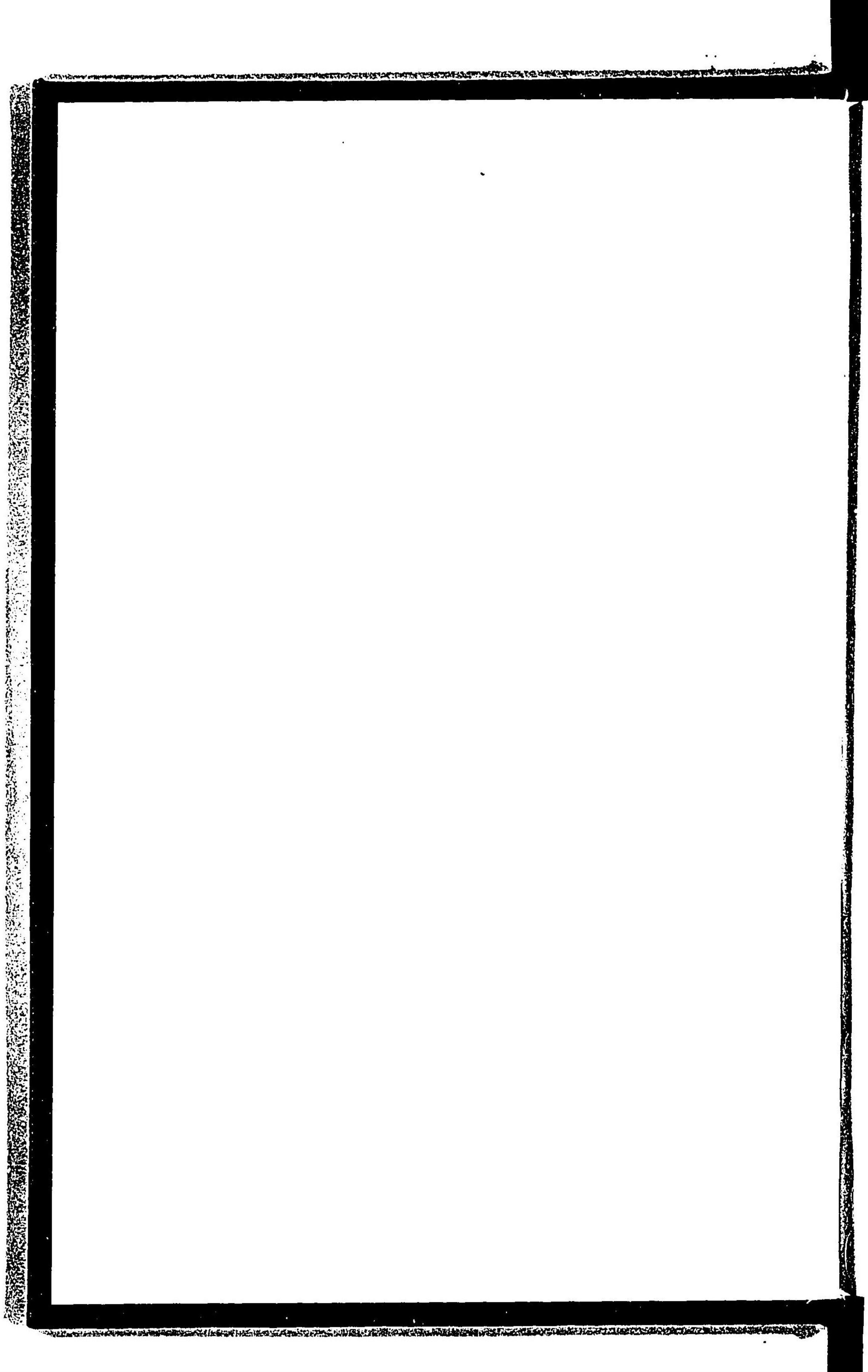
●上下全二冊  
●定價金一圓六十錢  
●郵稅金十二錢

●上野清先生著述

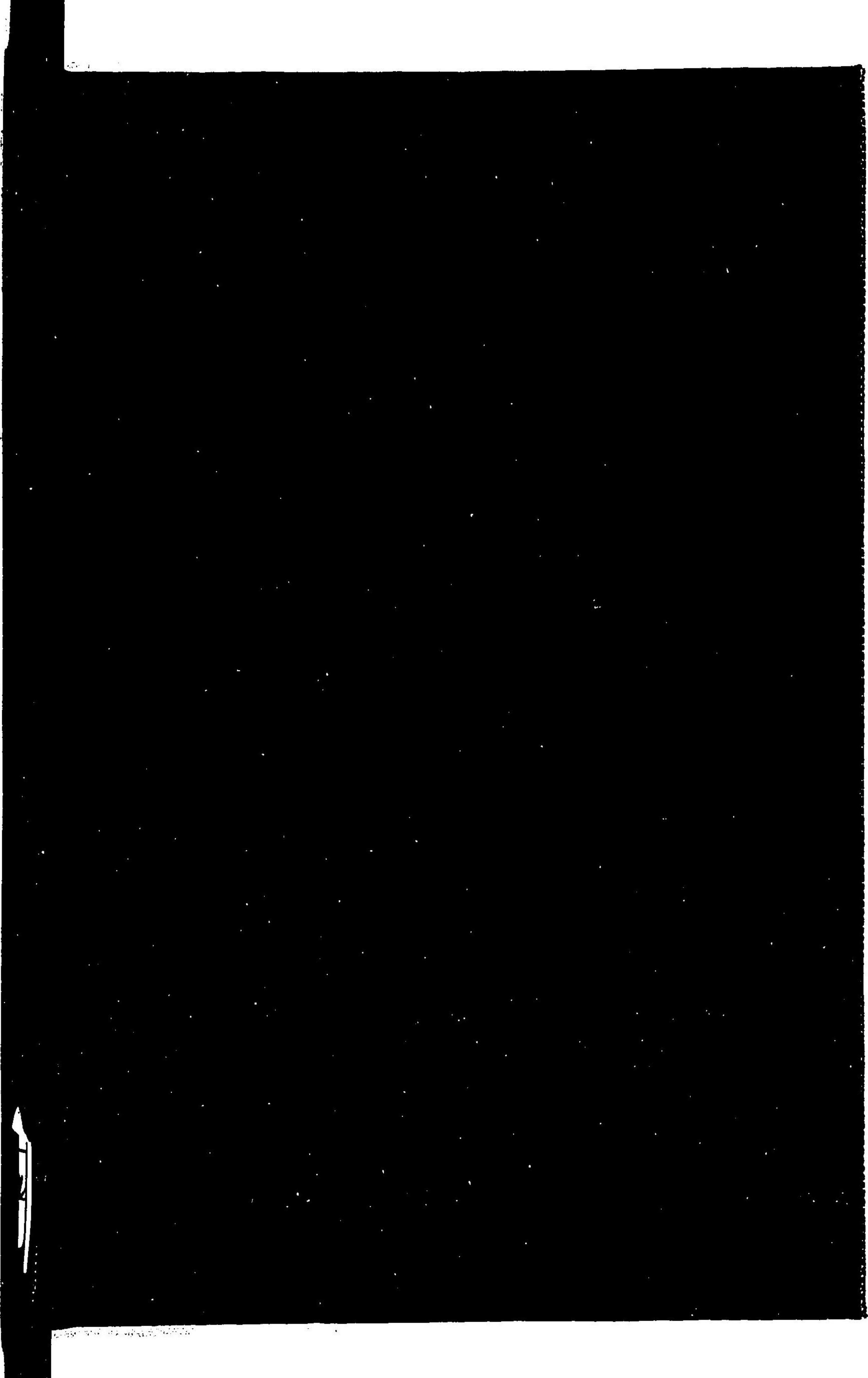
**世界之三大變**

●洋裝全一冊  
●定價金二十錢  
●郵稅金二錢









910.2  
Su822n

084917-000-6

910.2-Su822n

新撰日本文学史略

鈴木 弘恭/著

M25

DBB-0201

